

「多田から……こんな忙しい日に……」

老母は厭やな顔をして福松の顔を見たが、一寸考へごとをなする風をして、店の方に急いだ。

洋服客は店の土間に突ッ立つて人の出るのを待つてゐた。それは父子で、モーニングコートを着た十六七の色の白い息子を先きに立て、フロツクコートを着た色の黒い中爺は稍大きな風呂敷包みを提げてゐた。

「まあ好うお出でやす。さあ何うぞ……御挨拶は後で致しますがな」

と老母は、機嫌の好い顔を見せて二人を座敷に誘ひながら、

「竹さん何やなア、お前までが遠慮して……お前其の荷物を持つたら良えやないか、重たいものをお父つあんに持たして……」

店の間の六疊から次の間の四疊半、其の次の八疊と、家中の室を有るッたけ通り越して、五坪ほどの庭に添った廊下から離座敷へと、老母は客を導いた。

「竹さん見い、この銀杏はお前の亡母のまだ健康で居る時、植ゑて呉れたのや。お前とこの本堂の横にある大けな銀杏な、あの銀杏の實が零れて三寸ほどの苗になつたのを、亡母が大事にして持つて來たのや。それがあないに大けになつたんやもんなア……」

廊下を通る時、老母は立ち止つて、一間餘にも伸びた銀杏の若木を指さしつゝ、斯う云つた。二人の客は一寸銀杏の方へ目を注いだばかり、深く老母の言葉を味ふて見やうとする様子もなかつたので、老母は飽き足らぬ風で先きに立つた。

離座敷は八疊と三疊とで、八疊の床の間に近く二つの座蒲團を並べて老母は、

「さア何うぞ……それでは御挨拶が出来ません」

と、下座の方に洋袴を折つてキチンと坐つた客を促して上座へ押しやつた。

「へい、へい、へい。其の後は誠に暫く、御無沙汰ばかり致しまして……」

「私の方こそ、一度お尋ね申さんならんと始終云ふとりますのやが、商賣にかまけて……」

などと、版で捺したやうなことを云ひ合ふ挨拶は随分長かつた。四年前に亡つて可愛い娘の夫と、其の遺兒との訪問を受けた老母は、忙しい紋日に迷惑なと思ふ心よりも、久し振りに懐しいと感ずる情のだん／＼勝つて來るのを覺えた。

「香屑さん、何うぞ、御遠感なくあなた、お構ひも申しませんが、毎度申します通り竹丸が斯うして居りますのやよつて、お幸存命中と同じやうに思つて、御緩りと御滞留を願ひます」

斯う云つて老母はいそ／＼と茶の支度に立つた。天井に吊り下げた數ある小ひさな白い折鶴を、ぼんやりと眺めてゐた竹丸は、片隅に置いてある福松の机や本箱の側へ寄つて、硝子戸の外から、いろ／＼の本の標題を讀んで見た。それは聖教釋義や聖書を初め基督教の書物らしいものばかりであつた。

香屑は衣籠から巻煙草入れを取り出したが、まだ火鉢も煙草盆も出てゐないのに氣が付くと、其のまゝまた衣籠に押し込んだ。

七

忙しかった紋目の仕事も、夕方までには片付いて、三人の職人は仕事場を掃き清め、打ち板の上に塵を敷いて一休み息んだ。

福松は大釜の湯を盥に取つて、顔や手足を洗ひながら、傍で茹で場の片付けをしてゐる妻に向つて

「ああ、まアこれで今日の仕事も済んだか、下等な忙しい商賣やと思へば厭やになるが、これで儲けがつかつて人を幾人が助けたと思へば、忙しいのも苦にならんア」

なぞと云つてゐたが、背中の子と眼前の仕事とに責め抜かれてゐる妻は、自分が何の爲めに働いてゐるのかと云ふやうなことを思つてみる心の隙はなかつた。彼女は大笑にこびり付いた鯉鮎の屑をせつせと洗ひ落しつゝ、無意味に夫の顔を見て、徒らに動く其の口の状だけを意識してゐた。

老母はことごとく、客人の爲めに夕飯の物を煮始めた。客人は其の間に洋服を和服に着更へて、二丁ほど距つてゐる銭湯へ行つた。

うどんそば玉おろし小賣 菊屋

これだけ肉太の字で並びよく書いた懸行燈に火が入つて、黄色い光がぼんやりと黄昏の町を照らし始めた時分に、二人の客は湯上りの赤い顔をして歸つて來た。

離座敷には夕飯の仕度が調うて、木具の高膳が三つ。別に低い盆の上に爛徳利と盃とが載せてあつた。

福松は仕事着を通常着に更へ、主人らしくなつて客を待つてゐた。——挨拶がまた可なり長かつた。老母が重さうにして持つて來た鐵製の七輪を真中に据ゑて、福松は炭火の加減を直した。ほつぽと熾り立つ焔が赤く銀縁の眼鏡に映つて見えた。

大きな皿がまた老母の手によつて運ばれた。それには鶏の肉が、繪に描いた波のやうに手際よく一面に並べてあつた。

「竹、お前ちつと運びや、祖母さんが一人で困りやないか」

香屑は、あたふたと立つて行く老母の後姿を見ながら斯う云つた。

「いいえ、宜しいんで。自分一人でも何もかもやらんと氣が済まんのですよつて、他から手出しをすると却つて怒ります……そんなことはお構ひなく何うぞお始め下さいませ」

福松は斯う云つて、盃を取り上げ、何時の間にか老母の持つて來た盃洗の水に一寸漬して姉嬢に獻した。香屑は吸ひかけてゐた煙管を棄て、それを受けた。

鍋のものも煮え、爛徳利の代りも來て、靜かな座敷はだん／＼陽氣らしくなつて來た。

床の間に活けてある黄菊白菊の香に、ものゝ煮える匂ひが混つて、重苦しい空氣が室中を流れた。「矢張り宗教の方をおやりでござりますか」

深くは飲まぬ福松を相手にして、陶然と酔つて來た酒好きの香屑は、云ひにくさうにして聞いた。

「別に洗禮を受けたと云ふのではござりませんが、昨年まで此地に居りました熱心な信者のフランス人と懇意に致しとりましたもんでしたから、少し許りカトリック——舊教——天主教ですな——に首を突ツ込みましたので……」

福松は柔かな調子で、容を正しつゝ答へた。

店の方では職人どもが飯を濟まして、

「坊ンさんが洋服着て……面白いな」

なぞと小聲で客人の噂をしながら、戶外へ遊びに出た。

老母は勝手で、吸物の種に鶏卵を割つてゐた。

八

福松は成るだけ宗教の話を選びやうとしたが、香屑は人の信仰を肴にでもするやうな態度で、チビ

リ／＼と飯みながら、いろ／＼のことを云つた。

「何んのかと云うても、皆な人間ぢやもの、渚の葉小舟では心細うて生活して行かれんので、何んか知らん物に纏り付かうとする……其處がまあ私等の飲み代になる資本でしてな」

彼れはこんなことを云つて、五分箱ほどに延びた頭をふら／＼させた。福松は酔つた姉篋の盃に後から／＼と酒を注ぎながら、

「さうですとも、人間と名のつく上は、どんなえらい人にも依頼心と云ふものが屹とあるのですよつて、神様や佛様は何時の世にも不景氣知らずで、大けな堂が焼けては建ち、建つては焼けしますなア」
なぞと調子を合はした。酒の傍で喰ふだけのものを喰ひ終つた竹丸は、隅の方へ寄つて坐眠りをしてゐた。

「其のフランス人と云ふのは、此地に長い間居られたのですか」

「五年ほどでしたが、まことに親切な人で、日本語も能く出来ました……シモンと云ふ人として……御承知でもございませうが、日本はフランスの傳道地になつて居りますから、同國の宣教師と一所に來ましたので、此地で美術を調べて居りました」

斯う云つたやうなことから、話は暫く其のフランス人のことをついいた。

「シモンさんも好え人でしたが、奥様がまた優しい方で、八歳になる子を連れて、配偶者よりはズツト後から日本へ來られたのでしたが、私等が訪問して奥座敷でシモンさんの話を聞いてゐますと、奥様は屹と次の室でフランス語の禱りを捧げて居られました。其の禱りは、夫の話が出来るだけ十分に聞いてゐるもの、腑に落ちるやうにと云ふ禱りであつたと後で聞きました」
この話には、香屑も、酔つてはぬながら、妙ならず動かされた風で、

「宗教家も夫婦共稼ぎでないとかかんのでせうな」

と云つて、盃を持つた手を其のまゝに、何か頼りに物案じをした。

「其のフランス人が日本へ初めて來た時に、一番可笑しいと思つたのは、下駄でしたさうで、故國で留守居をしてゐた奥様のとこへ出す手紙の中に、利休（日和下駄のこと）の繪を描いて、これは何であると思ひますかと云ふてやると、奥様からの返事に、日本では卓子に紐を通して何うするのですかと書いてあつたさうです……そんなことでシモンさんの家では下駄の話が何時も出ました。六歳になるお子さんが、私の行く度に上り口へ脱いで置く下駄を珍しがり、杖の先へ鼻緒を引ツかけて、抛り廻すには困りました。何時やらでした、表付の新しいのを穿いて行つた時には、それが氣になつて、話も落ち付いて聽いてゐられんことがありました」

斯う云ふ事を思ひ出し／＼話して、福松は客の相手を勤めてゐたが、立つて行つて本箱の抽斗から紙に包んだものを取り出し、あり振れた顔をした髯のない四十恰好の西洋人の寫眞を香屑に見せた。

寫眞の裏には日本字で「此地を去るに臨みて福松君に呈す」と下手に書き付け、其の下に Victor Simon と達筆な署名があつた。

神モーゼに云ひたまひけるは、我は有りて在る者なり、又云ひたまひけるは、汝かくイスラエルの子孫に云ふべし、我有りと云ふ者我をなんぢらに遣はしたまふと。

出埃及記の第三章第四節を、福松の字で丁寧に書いたのが、シモンの寫眞とともにあつた。

九

長い酒が漸く濟んで、軽く盛つた一腕の飯を不味さうに喰べ終はつた香屑は、もう見るのも厭だと

云つたやうな顔をして、取り荒らされた盃や焦げ付いた鍋を見てゐた。

竹丸は坐睡りから喚び覺されて、食物の殻を臺所に運んだ。老母はそれを受け取つて流し元に、まだ子を負つたまいで働いてゐる妻に渡した。

「運動がてら少し外へ出て見ませうか、今夜は賑かてござりませう」

斯う云つて福松は客の爲めに、市の夜景を觀せやうとした。

大儀らしい足を引摺つてゐる香屑と、嬉しさうにして、兩側の赤い提燈を見て行く竹丸とが、先きに立つ身長の高い福松の中折帽を目印しにして、雑沓する細い町から、アーク燈の光に緋鯉の見える池の畔に出たのは、それから半時間ほど後であつた。

空は曇つたまゝ、雨も落さず、綿入れに羽織では着過ぎるほどの氣候であつた。緩い石壇を上ると、土手の上から鉢に植ゑた菊を數多く並べて、ところ／＼に立てた雪洞の光は、いろ／＼の花の種類を鮮かに映し出した。其處にも人の群がガヤ／＼と賑うて、菊つくりの手並を響める聲が高かつた。

金堂の前まで來ると、四邊に人も尠く、手巾で階段の塵埃を拂つて、其處へ腰を下した三人は、菊の花壇を中心にして、其の周圍を動く人の群を走馬燈のやうに眺める距離に在つた。

「十年ほど前にこの堂の中で、佛像の耳の破片を拾うたことがありましたが、今はもうそんなものも落ちてゐますまいな」

香屑は背後を向いて、こんなことを云つた。

「本尊の丁ど裏のところに置いてあつた大きな佛像の耳の破片でしたやう、あれは何うしたのでしたか半分壞れてゐまして、何と云ひますか、あの佛の頭の縮れ毛になつてゐる圓いものを、子供がよく引き抜いて來て手遊品にして居りましたが、それは基督教の傳道隊が説教の材料にして、偶像崇拜を惡

く云うたので、信者が百人ほど殖えたさうでした」

福松の話に香屑は笑ひながら、袂を探つて燐寸と巻煙草とを取り出した。パツと光つた燐寸の火に太い柱の低い軒が暗の中へハッキリ浮び出たやうに見えたが、直ぐまた元の墨繪のやうな色に返へつて、香屑の煙草の火は、手から口へ螢のやうに動いた。

「私はあの耳の破片を、何か使ひ途がないかと思つて、十年このかた考へて居りますが、宛で判じ物でもするやうで、まだ面白い思ひ付が出て來ません……先づ香合でせうかなア」

煙を吐きつゝ香屑は斯う云つて、立ち上ると、そろ／＼と歩き出した。

「古いものが好きなら、今でも探すと少しは見付かりませう。宅の母が女ながら矢張りさう云ふものが好きで、ズツと前に何處かで古堂の壞れた時櫛形を拾うて來て生花の臺にしてゐましたが、何んでも弘法大師の建てた堂とかの櫛形で、チョイ／＼觀に來る人があります」

こんなことを云ひながら、福松は香屑の後から行つた。竹丸は詰まらなさいうにして、福松に並んで歩いた。

賑かな通りへ出ると、香屑は道具屋の店に、竹丸は雜誌店の前に立つたきり、暫く動かなくなつた。

十

三人が菊屋の前へ歸つて來た時は、もう懸行燈が下してあつて、暗い町はいよく暗かつた。福松が小走りに走つて、締め寄せてある大戸を引き開けると、足音を聞きつけて、ランプを手に店まで出て來た老母が、内から障子を開けた。パツと射したランプの光が、石塊や瓦の破片の多い土の上に流れて、三人の影は長々と、向ふの家の樂書のある剝けかゝつた壁に映つた。

店の間には薄汚い蒲團が三組、窮屈さうに敷かれて、今しがた戸外から歸ると直ぐ其處に潜り込んだらしい職人どもは、堅い木枕を三つ並べて寝入つた風を装ふてゐた。

次の間にも蒲團、其の次の間にも蒲團。家中が蒲團の世界になつて、踏んで行くべき場所、疊の現はれた部分は尠なかつた。

次の間には勞働に疲れた妻が、お律を抱えて居汚く眠つて居た。それと並んでお花に乳首を含ませてゐた乳母は、眼をばちくりさせながら、枕元を通る人々に默禮をした。其の次の間の蒲團は老母のと福松のとで、今、三人足音を聞き付けて、ランプを片手にあたふたと起きて行つた性急な狀が、老母の蒲團の亂れた様子によく現はれてゐた。

これらの有様を、老母の手にしたランプが一々照らし出して、廊下から離座敷へと辿つた。離座敷にもまた、ふっくりとした蒲團が二組並べて敷かれ、紙の新らしい圓形の行燈には、菜種から絞つた油の火が瞬きをしてゐた。

「御ゆっくりお息みなさい。家は皆早起ですが。そんなことにはお構ひなく……」

斯う云つて福松は、机の上のものを少し片付け、本箱から取出した赤い表紙の小ひさな本を手にしながら、自分と妻と小ひさいお花との連夜の寢室を客に明け渡して、一寸後を振り返へると、靜かに廊下の方へ去つた。

老母は二人の客をふっわりと包んだ蒲團の隅々を、風邪を引かぬやうにと押へ廻はり、

「お幸はこの蒲團が好きでござりまして、亡くなります一年前に参りました時も、竹さんと一所にこの蒲團で息みましたが、其の時が参り納めてござりました」
と香屑のかけてゐる派手な更紗模様に見入つて、眦の下つた眼を屢叩いた。

行燈の油皿の二本の燈心を一本にして、客が便所へ行く時の用意に、燐寸と燐寸の燐寸の燐寸、それは乙女の乳房ほどの大きさの紙を裏返へしにして、尖つたところに蠟燭を立てるやうにしたもの——古器物の好きな老母が風の吹く日に大佛殿の後方で拾つて来たもの——とを備へて置いて、老母が自分の寢床に來た時、福松は蒲團の上に腹這ひになつて、豆ランプの明りで本を見てゐた。

「今度はいよいよ、竹丸をお頼み申したいと云ふつもりらしいが、此地には良え學校もなし、家も忙しいよつて斷らうかなア」

老母は寢衣に着更へて、細帯を締めながら斯う云つた。

「死んだ娘さんからも頼まれてゐたのやし、現在の孫を預つて勉強させて呉れと云ふのを斷ることも出来んでせう……竹さんは今が肝心のとこですよつて、多田の山奥の、中學校もないとこに置いては仕方がありません……當分家へ置いて英語でも習ひにやつたら可えてせう」

亡つた娘の一人子、自分に取つては可愛い孫を預つて世話したいとは思ひながら、息子や其の妻に氣を兼ねてゐる老母の心の奥が、福松には明かに見え透いてゐた。

十一

翌る日も曇つてゐた。福松は仕事場の方を休んで、香屑父子とともに、蓮系の曼陀羅で名高い蓮華院に行くことになつた。

「福松を休ませると代りの職人を入れんならんよつて、私がお前とこへ行て方々を連れて歩いて貰ふのとは違つて、家の案内者は資本がかゝつてゐる」

老母は鼻の上に皺を寄せながら、こんなことを竹丸に云つて、福松の外出着を籠箆から出してゐた。

毎日、耳に付いて離れない鯁鮓を打つ響きから、久し振りに遁れるのが嬉しくて、福松は子供のやうにいそくと戸外に出た。

香屑は竹丸に手傳はせながら、馴れぬ洋服に着更へるのに手間取つて、稍暫く福松を待たせた。腰を屈めて白襯衣をもぐくと坊主頭から被る状が可笑しかったので、老母は若い女のするやうに、袖に口に當て、笑ひを忍んだ。

「大騒ぎやなア、お父つあんの洋服を着るのは……」

竹丸は老母の顔を見て、莞爾と笑つた。

やがて洋服の二人は、綿の羽織の福松と並んで、崩れた塀の内に桐畑の見える町端れから、山陵に沿うた野路を歩いてゐた。「西蓮華院みち」と細く刻つた古い石が、路の岐れ目の草の中に傾いて見えた。

「おやりになるくらゐなら、寧ろ洗禮を受けて了うた方が極りが付いて可えてせうな。昨夜のあのお話ですが」

香屑は急に思ひ出した風で斯う云つて、福松の容子を見た。

「母が喧ましようござりますし、それに今はもう、何れと云うて一つに凝り固まる氣にもなれませんので……」

痛いところを撫でられるやうな思ひをして、福松はこの話から遁れやうとした。——五年前、母や親類には隠して、大阪の天主教會で、ミドンを授洗者に、アングルを司教師にして洗禮を受けてから、安心を得べき宗教が自分には不安心の種になり、信者になつたが爲に虚言を吐ければならぬ場合の多くなつたのは、子供の時から正直と云ふことを第一の善事であるやうに思つて來た自分には何よりの苦痛であつた。——

巴里の神學校を卒業したアングルは議論が上手で、よく無神論者や無宗教者をへこました。其の議論に酔はされて、自分は夢のやうに洗禮を受けたのだ。——

アングルは自分を可愛がつて呉れた。一體に信者を冷淡に扱つた人だが、自分にだけはなかく親切で、ヴィエルツと孤兒とを連れて、家の仕事場に立寄つたこともある。其の時自分は母の手前を繕ふ爲めに、アングルの身分を明さずヴィエルツを奥様だと云ひ、孤兒が外國種なのを幸ひ、息子だと云つて、其の代りに自分の妻を、ありもせぬ兄の妻だとアングルに告げたのは、今でもまだ自分ながらに、自分の白々しいのを呆れずにはゐられない。——

母も今はもう解らぬながらに薄々覺つて、一寸祈禱をするぐらゐのことに、グツ／＼は云はぬやうになつたが、洗禮を受けるのを怖しいことのやうに思つて、なかく許さぬ。——許すも許さぬもない。五年前に洗禮は濟んでゐる。それを母に包み隠して、一方はまた尊敬するアングルにさへ結婚したことを明さずにおた自分は、何と云ふ弱い心であらう。何と云ふ虚言吐きであらう。——

けれども自分はまだ他の信者のやうに、洗禮を受けたまゝ、天理教に飛び込んだり、新教に行つたり、無宗教になつたりすることは出来ぬ。天主教も矢張り人間の拵へたもので、天啓教ではあるまいと云ふ疑ひは、だん／＼募つて來て、内々で日本譯の聖書を讀んで、勝手な解釋を附けて見もするが、虚言を吐きつゝもまだ暫くはこのまゝソツクリと止つてゐたい、むざ／＼遁れ去るのは惜しい。——福松は心の瘡痕と懷疑とに胸を押へつゝ、例の苦みに惱んで、怖い顔をしながら歩いた。

十二

——洗禮を受けてから一年の間は、兎も角熱心な信者であつた。解らぬ中にも解つたやうな氣がし

て、危い浮世の綱渡りに確りと取り付く紐を得たやうであつた。母も其の中には説き伏せて、母子二人で天使のやうな、神のやうな、清い一生を送りたいと思つてゐた。

自分は子供の時から、不品行と云ふことを一番の悪事と思ふ心があつた。小學校の先生の家へ夜學に通つて日本外史を教はつた時、こんな面白い本はないと思ひつゝ、後北條氏のところまでは夢中に進んだが、或る時先生から、頼山陽と云ふ人は大酒家の女好きで、日本外史なども放蕩をしながら作つたのだと云ふことを聞いてから、急に厭や氣がさして来て、十八史略に取り代へたことがある。

不品行が嫌ひであつたからであらう。何んでも早く妻を得たいと思ふ心が強かつた。古い歴史や物語を讀んでゐる中にも、人の結婚のことを書いてあるところは殊に注意した。さうして「何年何月元服、何某の女を納れて室となす」と云ふやうな句の短いのを飽き足らず思ひながら、熱心に前後の年代を調べて、花嫁の年齢を繰つては樂しみ、花嫁の年齢の何うしても分らぬのに失望した。

昔の人は早婚で、書物の中には十六、十七ぐらゐて妻を娶つたものが多かつた。稀には十四の花嫁も見當つた。

これ等の年齢を自分の年齢に合して見ては樂しんでゐた。

何かの本で、孔子が十七八で結婚したと云ふことを見た時は、聖人も早婚だなア、と思つた。日本外史を教はる傍ら、少く宛講義を聽いてゐた日本政記の、大義名分を説いた堂々たる論文や何かは、上の空で通り過ぎたが、「女御藤原何子を立て、中宮となす」と云ふやうなところは、容を改めて傾聽した。

十六、十七、十八、十九、二十歳になつても、母は自分に結婚をさせると云ふ事を、少しも念頭に置いてはゐないらしかつた。

二十一、二十三、二十五にもなると、親類や近所の世話好から、こんな女がある、あんな娘が居ると、度々云つて來たが、母は自分に相談もせず勝手に斷つてゐた。大阪の姉も來て早く嫁を持たしてはと母に勧め、其後手紙でもさう云つて來たが、母は笑つて取り合はなかつた。

其の頃自分は、不圖した機會でヤソに首を突ッ込んで見た。新教は商賣教で人氣取りをやるが、舊教は昔からの一本調子が少しも變らず、新教のやうに分派もないのは神の力だと云はれて、成るほどさうかと感心した。

母は自分に結婚をさせぬ、一生妻を持たさぬ、と決めてゐるやうに自分には思はれた。十六七から結婚を希うて、二十五六になるまでそれが遂げられなかつた自分は、もう駄目だと失望した。母が死んでから……三十、四十にもなつてから、それに釣り合ふやうな年齢の女を妻にしたのでは詰まらない。男が十六で女が十五、吉三郎と八百屋お七のやうな夫婦を理想にしてゐた自分は、二十五六になつてからの結婚が既に晚い……けれども今の今妻を得られるのならまだ可い、晚くとも辛抱する。しかし母があいではそれも駄目だ……斯う思つて、自分は二十六の時に全く結婚を斷念した。さうしてヤソに首を突ッ込んだ。

舊教に含まれた無妻主義がヒドク氣に入つた。

さうして洗禮を受けた。

十三

——其の後一年の間に、母は「六十歳つになる今日までに、醫者の藥を飲んだことは後にも先きにも二度よりない」と云つて人の眼の前に二本の指を突き出す……其の一本の指にあたる病氣に罹つ

た。

病氣は下痢症で、赤痢の疑ひのあつたのを、食物を賣る家から傳染病を出しては、營業を休まなければならぬ上に、得意を取られて再び開業すること難かしくなり、母子二人で路頭に迷ふやうな不幸が起るかも知れぬと云つて、病床に横つた母が窪んだ眼を光らしながら、かゝりつけの醫者を口説いたので、劍を下げた人が出入りすることもなく、交通遮断だの、避病院だのと騒がれることを免れた。五帖の塵紙が一晝夜でなくなつた母の劇しい上圍に驚きながら、自分は傳染病隱蔽の悪事を遂げたことが、心苦しくもあり、恐ろしくもあり、一方にはまた嬉しくもあつた。

正直を看板にすること、虚言を悪事と思ふこと……宗教を信ずることが、何んなに人間の生活を窮屈にして、多くの人の知らぬ苦しみを苦しまねばならぬものであるかと云ふ、自分の現在の疑懐の芽は、この時既に萌えかゝつてゐたのである。

母は今にも死ぬやうに云つて騒いでゐたが、病氣は絶頂を通り越すと、一日一日快くなつて來た。快くなつて來るといふに、全て人間が變つたやうになつて、突然自分に結婚を勧めた。大阪から介抱に來てゐた姉と一所になつて勧めた。けれども其の時はまだ相手の女がなかつた。

本復祝が濟んでから間もなく、母は相手の女を見出して來て、銀杏返しに結つた人の寫眞を突きつけながら、これを貰つては何うかと勧め、其の家のことや親兄弟のことを細々と話した。

自分は父無し子の我儘に育つて來て、子供の時から母に逆つて暴れたことが多く、二十歳を過ぎてからは、刀を抜いて母の坐つてゐる側の行燈に切り付けたこともあるが、自分に結婚をさして呉れぬと云ふ、第一の不平に就いては、一度も母の耳に恨みや憤りの響を入れたことはなかつた。……さう云ふことで母と争ふのが恥かしかつたのだ。

けれども病後の母が、急に態度を變へて自分に結婚を勧めた時は、「一生獨身で居る」と拗れて、なかなか聞き入れなかつた……母を困らした。

信者でないものと結婚することは出来ぬと云ふ、難かしい掟のあるのを幸ひ、早婚の理想を行ふことの出来なかつた自分は、宗教と結婚したつもりになつて、生涯を天主教の一兵卒として、清らかに送らうと決心してゐたのだ。

しかしこの決心は、死ぬまで變らぬものと諦めてゐた母の態度の俄に變つたので漸く動搖し出した……半分は拗れて逆ひながら、十六七の時から希うてゐたことの遂げられるのを喜ぶ狀がだん／＼露はれて來て、心の中では母に感謝する情が燃え擴がつた……宗教などは何うでも可い、早く女を得たいとすら思つた。

さうして、シモンには秘密にして結婚したのが、あの女である。

年子が生れ、次の年子が今また腹の中に居る。――

福松は、昨日までの我を振り返へつて、さまざまのことを考へながら、香屑父子とは別々になつて歩いてゐた。

蓮華院の家根が、紅葉混へた立木の間に光つて見えて來た。

十四

道の兩側は、豐作の稻を蒞り取つた跡が廣々として、ズツと向ふを見渡すと、黄色く穂を垂れた晩稻田が、ところ／＼に點を打つたやうに残つてゐた。畦に立つた濠梯の木は、葉が尠くなつて、赤い實が鈴生りに盛り上つて見えた。

雀の群が、田から田へ、羽音を立て、飛んだ。道の上を斜めに引いた電信線の上からは、小ひさな鳥の囀りが聞えた。

半丁ほど先きを行く竹丸は、竹の枝を鐵砲に擬へて、雀を打つ真似をしてゐた。

それから少しおくれた香屑は、路傍に株伐りをしてゐた百姓に物を問ふ状をして、福松の方を振り向いた。福松は考へことを止めて、急ぎ足で父子に追ひ付かうとした。

「彼寺でしたなア」

香屑は蓮華院の家根を指さしながら、福松の近づくのを待った。

右の方の丘に添うて、疎らに建つた粗末な民家の間に、白い壁の小學校があつて、運動場には蟻の巢を崩したやうに、多くの子供がうぢや／＼と遊び戯ふれてゐた。八字髯の生えた肥つた教師が、胸に両手を當て、後向きに歩きながら、一列の生徒を率ゐてゐるのも見えた。

「何處へ行ても子供と云ふものはドツサリ居るもんですなア」

香屑は斯う云つて、小學校の方を見詰めてゐた。

「生みますよつてなア……殖える一方、減るちうことはありません……貴家のやうに一人子のことば、まア尠い、三人から五人が當り前で、中には私とこのやうに年子がつけて出来るのもありませんよつて……」

「あの生徒等が大きくなつて、また盛んに生むんですなア。ハ、ハ、ハ、」

青い草のまだ多く残つてゐる、小學校の土手の下では、一年生らしい小さなお煙草盆に結つた子が四五人並んで立小便をしてゐた。

三人は程なく、「貼り札無用」と書いた白い板が、柱に高く掲げてある蓮華院の東門を入つた。

寂しい境内は、掃除がよく行届いて、砂の上に箒目が残つてゐた。扉を閉め切つた本堂には、參詣人なぞを持つ風が少しも見えなくて、平城朝藝術の威光を「特別保護建造物」の黒ずんだ表札に現はしてゐた。横の方から子守女が二三人、藁草履の音を響かして出て來た。

福松と竹丸とは、階段を上つて、扉の隙から堂の中を覗いたが、暗くてよく見えなかつた。太い柱が二本、真中ほどの間隔を取つて黒く立つてゐた。

香屑は堂の周圍を廻はりながら、軒から柱から、古建築の美を味ふと云つたやうな顔をして、

「古い建物は第一に家根が低う見えるのでよろしいな。近頃の建物は何うもひよる高く見えて可けません」

なぞと、ほと／＼感心に堪へぬと云ふ風であつた。

「こんなもん何んや、叩き壊して薪にして仕舞へ」

竹丸は高く叫んで、元氣よく堂の縁から飛び下りた。福松も大きな身體を不器用に扱して、笑ひながら、其の後から飛び下りてみた。

三人はぶら／＼と庫裡の方へ行つて、知り合ひの尼を訪うた。

十五

横の方の黒門を入ると、左へ寄つたところに黒塗りの腰高の障子を閉てた大玄關が見えて、拭き込んだ式臺の板は鏡のやうに光つてゐた。先きに立つた竹丸が、ツカ／＼と其處へ差しかゝらうとするのを見し、

「そんな方へ行くんやない。此方や／＼」

と香屑は周章てた状で呼び止めた。

右の方に小ひさな内玄關が、寒竹の樋陰しの陰にあつた。三人は其處の土間に立つて案内を請うた。
「お頼み申します……御免なさい」

斯う云ふことを三度ほど呼んだが、返事はなく、深閑として人の居る場所とは思はれなかつた。

障子が内からスツツと、音もないほどに開いて、十七八の若い尼が、光線の足りない室の黄色く古びた畳の上に、白い兩手を雅かに突いた。福松は紙入れから名刺を出して香屑の名刺とも、に尼の手に渡しながら、この寺に執事のやうなことをしてゐる知合の尼の名を付けて、

「お目にかゝりたい」と云つた。

白衣に腰衣のよく似合つた美しい人は、一禮して立つたが、稍暫くすると、再び現はれて、

「何うぞ此方へ」

と導いた。靴を脱ぎ、下駄を脱いで白に黒い小紋を置いた縁の畳を踏んだ三人は、若い尼の口から初めて漏れた鈴のやうな聲に、東京辯の響きのあるのを珍らしく思つた。

狭いのや廣いのや、三つの室を通り抜けて、泉石の數寄を凝した庭の片隅が見られる十疊の室に、三人は通された。室毎／＼の青地の紙門に、金粉で大きく桐の紋を置いたのも、三人の眼には珍らしかつた。

黒塗りの茶臺に載せた茶を持つて來たのは、前の若い尼であつたが、折敷に盛つた干菓子も捧げて出たのは、鮮やかな友禪の被布を着た、十一二のお下髪の少女であつた。

三人は、少女の輝くやうな目鼻立に見入つて、「この子も今に可惜尼になるのかなア」とでも思つたやうな様子をした。

斯う云ふ場所、斯うした風の氣高い動作に包まれて、福松の縞の羽織は見窄らしく、不調和に見えた。彼れは竹丸の次に畏まつて、袴を穿かぬ肥えた膝の崩れを氣にしてゐた。

香屑はゾボンと折つてキチンと坐り、坐像のやうに正面を向いたまゝ、兩手を膝に置いて、好きな煙草をも取り出さうとはしなかつたが、時々横目を使つては、動もすると足を踳らせやうとする竹丸の不行儀を睨んだ。

竹丸は福松と顔を見合はせながら、眉を蹙めて窃に脛の邊りを撫でた。

室の真中に据ゑた雲脚の貴人火鉢には、純白の灰が中高に均されて、匂ひの高い池田炭の、木目の正しい切口から、パチ／＼とおこり始めた。

十六

紙門が開いて、知合ひの尼の顔が見えた。尼は老いたる顔を處女のやうに艶々しく光らして、珠數を片手に元氣よく入つて來た。

「菊屋さん……香屑さんも久し振りやな……それは香屑さんの坊子かいな、見違へるほど大きくなつて……自分の年を取るの分らないで、子達の成人するに喫驚します」

なぞと打ち解けた風で云ひながら、皆なに挨拶をした。

「久し振りで此地へ参りましたもんですから、一寸御機嫌伺ひに出ましたので……」

と、香屑は恭しく云つて、膝の上に置いた自分の手の小指の長い爪を見てゐた。

福松も老母の傳言などを述べて、「お邪魔いたしましたと恐れ入りました」と結んだ。竹丸は丁寧にお辭儀をした。何と云はずに横を向いた。

「阿母さんも健康で結構やな。昔しの寺子友達がお前、一人減り二人減り、今では阿母さんと私と二人切りやないか、今度は何方が先きやら、心細いコツちゃ」

こんなことを云つて、莞爾々々笑ひながら、老いた尼は若い尼を呼んで茶の代りを命じた。

「御法用で毎日お忙しいことござりませう」

黙つてゐるのも、工合が悪いので、香屑は考へ／＼こんなことを云つてみた。

「忙しいと云うても、香屑さんの方の忙しいのとは違つて、自力やよつてな、格別のことあれへん。

何うしてもお宗旨は他方に限る、自力では人氣が無うて商賣にはならん……：：：けれどもな、この頃二三日お上でお加減が悪いので、私も何かと御用が多うて……：：：」

「お上でお悪いのでござりますか」

と香屑は驚いた風をした。

「御持病の痔やがな、二三日御寝なつてゐる……：：：先刻皆なの見えたことを申し上げたら、久し振りやよつて後程會はうと仰しやつた。御寝なつてゐても御念屈でなア。私始め他の尼も毎日お側へ出てゐるものでは、申し上げることもお珍らしいのや。今日は一つ皆なで面白いお話を聴かし申してお呉れ」

其處へ、若い尼が来て老いた尼に小ひさな聲で何か云ふと、老いた尼は合點をしてゐたが、若い尼の紙門を閉めて行くのを見送ると、

「サア皆さん何うぞ……：：：お目通りへ出て貰ひませう」

今までの軽い調子を重々しい調子に變へて、斯う云ひながら坐を立つた。

香屑は、一寸頭を下げて立ち上り、上衣の釦をかけ、ズボンの皺を伸ばした。福松は坐つたまゝ竹

丸を見て、

「私等は此處に待つてやう」

と、迷惑さうに、もぢ／＼した。

「何んの御當節やもの、總べてお手輕や。其の儘で結構、遠慮せずには皆な出てお呉れ。賑かな方がお氣に召すはな」

また軽い調子になつて、老いた尼は三人を促した。

「植木屋などは、お縁側からやが、法被股引でお目通りするんや。今時一々袴を穿かいても失禮にはならん」

こんなことを云ひながら、老いた尼は腰を屈めて先きに立つた。

暗い室をまた三つばかり通り過ぎると、前の若い尼が出て、銀色をした紙門の前に跪づいた。其の紙門の裡が、貴い尼公の病室であつた。

十七

白無垢の人が、赤い袴の上に起き直つて、房々とした白い毛の袴を撫でゝゐた。それが眼に映ると三人は敷居を距てた畳に坐つて、丁寧に頭を下げた。

福松は心の中で「芝居を観るやうな氣がする」と、毎も此處へ来る度に思ふことを思つた。さうして今日は、自分も俳優の一人になつて、端役を勤めてゐるやうにも思はれて可笑しかつた。

文臺、硯箱、緋總の付いた文匣。袴の傍にはそんなものが、いろ／＼と並べてあつた。香屑と竹丸とは、さう云ふ器の粗末なものを自分の寺で見馴れてゐるので、別に珍らしいとは思はなかつたが、

福松の眼には、芝居の小道具でも見るやうに映つた。

「此方へ入つて其處を閉めとくと可え」

と細い聲で老いた尼に云つて、鷹揚に三人を見渡した白無垢の人は、色の白い細面の尼姿で、眉や目に貴族の相貌が見えて、病に瘠せてはゐるが、薄い皮の下には常人と異つた血液が流れてゐるやうに思はれた。

三人は老いた尼の指揮で、膝行るやうにして敷居を越え、白無垢の人と同じ室に、赤い褥の端から疊一枚ほども距て、畏まつた。貴い人の前では膝の上に手を置くものでない、兩腕を膝の脇へ眞直ぐに垂れて、指先で疊を撫てる心でゐなければならぬ」と云ふことを竹丸は父から教へられてゐたので其の通りにして坐つた。

福松は勞働に節くれ立つた大きな手を膝に置いて、「白無垢の人が十六の年に京都から來て、得度した時に、多くのものが涙ぐんで薄命な貴女の身の上を語り合つた」と云ふ母のよくする話を思ひ出し、四十に近い處女の面ざしを偷み見ては、天主教の童貞のことや、童貞が宣教師の子を生んで、其の子を孤兒のやうに取り繕うてゐたと云ふことなどを考へ、この白無垢の人が眞個の敬ふべき清淨なる童貞のやうな御方ではあるまいかと思つてみた。

老いた尼と香屑との間に、詰まらぬ世間話が物靜かに語り合はれて、白無垢の人は楽しさうな顔をしながらそれに耳を傾けてゐた。

聞いたことのない名の人の身の上、行つたことのない土地の景色。そんな話は、少しも世間を知らぬ白無垢の人に解らぬ節が多いやうであつたが、説教で練り上げた香屑の滑かな辯舌と、物馴れてゐる老いた尼の軽い調子とは、人を慰さめる爲めに態々仕組んでゐるやうに、呼吸がシツクリと合つて

來て、面白いところが多かつた。

「先日東京のお邸からお送りになつたお寫眞……甥御様のや」

話の途切れた時に、斯う云つて老いた尼は床の間に飾つてある金縁の大きな額面を見た。それは福松や竹丸が雑誌の口繪なぞでよく知つてゐる何某公爵の爵位服を着けた半身像で、この室に入つた時に直ぐ眼についた見事なものであつた。

話はまた公爵のえらいことを譽めるので暫くつゞいてゐたが、それには白無垢の人も少しづつ口を出して、公爵の外國旅行中にあつた逸話などを話した。

白無垢の人が「疲れたので少し息む」と云つて、若い尼の介抱で、赤い褥の上に横になつたのを機會に、香屑は恭しく暇を告げて坐を退つた。竹丸も福松もそれに倣つた。老いた尼も若い尼も、狎だけをお側に殘して、皆次の室に出た。

三人は元の十疊で質素な齋の饗を受け、それが済むと、臺に載せた尼公からの下され物を、若い尼が捧げて出た。

香屑と福松とには扇子一本づつ、竹丸には赤い表紙の附いた手帳一冊で、別に小ひさな曲物が一つ、「お上がお手づからお摘みになつた杉菜を、一々氣永に袴を取つて佃煮のやうにしたのやが、これだけ拵へるにも一月からかゝつた」と老いた尼は勿體らしく披露した。

蓮華院から西大寺へ廻つて、三人は夕方に奈良の市へ歸つた。鐵道の踏切を越える頃から、細い雨

が音もなく降り出して、線路に敷いた新しい小石は、一つ／＼磨いたやうに濡れて光つた。

三人は人車を探したが、戸を閉めた家の疎らについた町角に、「公設人力車停車場」と白く塗つた細い棒杭が傾いてゐるだけで、近い邊りには轍の痕をさへ留めなかつた。

雨に濡れた土の匂ひが、古い／＼市の歴史を語るやうで、法衣の下に黒威の腹巻を見せ、裏面眞深に、大きな薙刀を横へて、高い木履を踏み鳴らしつゝ、この市をのさばり歩いた強い僧徒の状が思ひ浮べられた。

市は夕闇に包まれた。

只一つ見える、雨の中の淡い灯影を志ざして、三人は傘屋のある町へ廻つた。

粗末な番傘を一つ宛手にした三人が、空気ランプの明るい菊屋の店に辿り付いた時は、雨が本降りになつて、傘めた傘からは滴が瀧のやうに落ちた。

福松は蓮華院の尼公からの下され物を一纏めにした風呂敷包みをば、上り口に抛り出して、濡れた手足を拭いた。香屑も竹丸も「やれ／＼、これで安心だ」と云つたやうな顔をして其處に腰を下した。菊屋にはまた一人泊り客が来てゐた、それは福松の姉のお信で、二十年前に出戻りになつて、連れ子の一人娘を育てながら、長い獨身をつゞけ、大阪に手料理の看板をあげて、可なりの繁昌を見てゐる四十恰好の中婆さんであつた。

お信は老母とともに三人の歸りを迎へて、莞爾々々しながら、

「降りまして、難儀でしたやう。私はお蔭で早う着いて助かりました」

と福松の抛り出した風呂敷包を拾ひ上げて、結び目を解いたり結んだりした。

「高淳さんは何うしてはつたなア」

老母は何よりも先きに、蓮華院の老いた尼のことを聴かうとした。

香屑と竹丸とが離座敷で着更へてゐる間に、福松も羽織を脱ぎ帯を解きながら、手短に蓮華院の様子を語つた。

「行儀よう坐らせられるのが、何より苛い。行く度にもう二度とは来るまいと思ふが、また忘れて行ては酷い目に遇ふ」と顔を顰めて、老母と姉とにあまえるやうな風をした。

お信が福松の濡れた羽織を衣紋竿に掛けてゐる間に、老母は風呂敷包みを披けて扇子と手帖とを取り出し、杉菜の佃煮を入れた曲物を見つめて、不思議さうにしてゐたが、福松から謂れを聴くと、

「お幸がさう云ふ珍しもの好きやつたよつて、供へてやると喜ぶやう」と佛壇の方を見た。

十九

老母は、八疊の片隅の簞笥に並べて置いてある大きな佛壇の、塵埃だらけになつた油團を撤つて、黒塗りの扉を開いた。

金色の位牌や佛像や燈具が、其處にごちや／＼として見えた。老母は其の中の小ひさな位牌に紙へ書いた戒名の貼つてあるのを正面に直して、杉菜の曲物を供へた。

「福松がヤッになつて出てから、佛壇がお留守になつて、滅多に開けたこともない」
老母は厭味らしく云つて、位牌の紙切に見入つた。

「こんな紙を貼つとくのなら、姉さんの位牌を一つ拵へたら何うだすな」

お信は斯う云つて、佛壇の前進み寄り、遊び事のやうに、下の抽斗から灯打箱を出して燧石をカ

チ／＼とやつたが、火口が濡り、燈具に油もなかつたので、

「え、面倒臭いな、乗りかけた船や、仕方がない」

と笑ひながら、臺所へ行つて燈明の用意を調べて来た。

鶴の形をした燈具に明りが點いて、佛壇の中の物がハッキリと照し出された。

「お幸の位牌はお前、私も新しいのを拵へてやりたいのやが、あの紙はお幸の遺言狀の端へ香屑さんに戒名を書いて貰うたのやよつて、魂が宿つてるやうに思はれて、取り代へるのが惜しいのや」

老母は斯う云つて、線香を取り出し、燈明の火でそれを點けて、細く舞ひ昇つた煙の中に、ゆらゆらと漂うてゐるやうな亡き娘の戒名の字を讀んだ。

香屑も、竹丸も、便所に入つて其處に十分間ほどを費やして来た福松も、お律を連れた妻も、お花を抱いた乳母も、皆出て来て、一族一家は佛壇の前に集つた。

「お幸が死ぬ一月程前に此家へ来たがつて、お醫者に聞くと兎てもそんなことは出来うんと云たので精を落した顔をして、もう奈良の土を踏のんかなア、ちうて泣き出した聲がまだ耳の奥に残つてゐる」

老母はシヨボ／＼とした眼に一座の顔を見渡して、聲を呑み込み／＼、

「あの時釣臺にでも、臺せて今一度此家へ連れて歸つてやつたら、本人も私も念が届いて良かったのや」

と残念さうにして、亡き娘の噂さの出る度に云ふことをまた云つた。

「お濱も連れて来ると好かつたなア」

老母はまた、大阪でお信の留守を預つて商賣をしてゐる孫のことを思はずにはゐられなかつた。雨滴の音がし／＼と寂しかった。

二十

この夜、香屑父子と福松とが離座敷へ寢に行つてから、老母とお信とは窮屈さうに入疊の片隅へ枕を並べて、さまざまのことを語り合つた。

「福松のヤソは何うなつたんだすいな。貴方もさう喧ましよう云はいで、爲るやうにさしとかはれ、ヤソかて昔と違つて別に悪いことはあれへんし、あの子は小ひさい時から短氣で肝癪持ちやが、平常は誠に和しう好う出来て、茶屋酒一つ飲んだことなし、仲間の集會に出ても、道樂の附き合ひは喧嘩しても避けて来るんやもの、女郎買ひや藝妓狂ひの代りやと思へば、少々金は要つてもヤソは廉價いもんや……三味線太鼓でこりや／＼と底抜騒ぎをする代りに、アメンと云うて俯いてゐりや可えのやもん……」

「私は何にも喧ましよう云やへん。去年あたりは西洋人とも附合つてたやうやし、此頃も時々妙な手つきをしてヤソのお經のやうなことを口の中で云うてるが、私は知らん振りしてるのや、仕事にさへ精出して呉れて、悪遊びさへせにや、それで可え、もう家内もあり子供も出来てるんやもの、老人が口を出すことはない……けども私の眼の黒い中、改宗だけは御免や」

こんな話もあつた。

「大阪から此地へ来ると、宛て火が消えたやうや。こんな生きてるか死んでるか分らんやうな土地では。商賣も先々見込がないよつて、そろ／＼大阪へでも出る分別をしたらよろしいな。家の店見なはれ、場所が好えので、今では正午頃から夜半過ぎ迄お客の絶え間無しや……こんなことと愚圖／＼してると今に喰ひ込みませぬな」

「俺も疾からさう思てるのや。この夏なぞは餘程悪かつたし、今でも仕事忙しただけで儲けが尠い。何しよ斯う粉が高うては、饅頭も玉賣りだけでは引き合はん……と云うて、喰べる店を出すのは此處では可かんし、寧ろ大阪へでも出たらと思てるのやが、競争の劇しいところへ出ては、却つて元も子も無いやうになれへんかなア」

こんな話もあつた。

「竹丸が此地へ修業に来るので、下宿屋に居ても爲めにならんよつて、家から學校へ通はしてやらうかと思ふのやが、さうなれば死んだお幸も喜ぶやらう」

老母は、先刻から云ひ出しかけては、云ひおかれてゐたことを漸う云つて、お信が何う云ふかを探つた。

「姉さんが生きてゐて喜ぶのなら、喜ばし甲斐もあるが、草葉の蔭から喜んで呉れたのでは詰りまへんな……一體貴方は人を世話することが好きで、一生懸命に世話しといては、後で何うの斯うのと怒るのが辭や……何うせ人の世話は利益にならんことよつて、初めからボンと跳れ付けるに限りませす」

お信が床へ俯伏しになつて、細い煙管で煙草を吸ひながら、煙りとともに吐き出すやうに云つた言葉は、老母の耳に耐らんほど冷酷に響いた。

「世話すると云うても赤の他人を世話するのやなし、現在の孫やないか、それに月々の寄宿料も學資も送つて呉るのやもの、別に損は行かへん」

老母は突ツかゝるやうな語氣で斯う云つた。

「そんならまアやつて見なはれ、學資は送つて来るにしても、家に寢泊りして學校へ通ふのでは何か

に付けて世話も焼けるし、寄宿料が一月二月おくれでも親類であつて見れば、さう催促も出来んし、終ひに兩方で面白くないやうになつて喧嘩や……後で喧嘩するほどなら、前にボンと斷つて喧嘩した方が可え……後の喧嘩を前にするだけのことや」

お信の言葉は、何處までも冷かて落ち着いてゐた。

離座敷から福松が臺ランプを手にして今日の新聞を探がしに來た。

二十一

福松は錢箱の傍でこそくくやつてゐたが、目的の日附の新聞が見つかり、それを片手に、臺ランプを老母の枕元に置いて、其處に跪きながら、

「いよゝゝ竹さんを預つて呉れつて、香屑さんが今さう云うたが、いろゝゝ話を聽いて見ると、あの後妻が來る時に、竹さんを修業に出して家に置かんと云ふ約束になつてるのやさうで、義理にも一年か二年は他へ出さんならんちうことや」

と小ひさい聲で云つて、今日の新聞に出てゐたやうに思ふ私立英語學校の小ひさな廣告を探した。

「それはまた妙な約束をしたもんなや」

お信は馬鹿くしいと云つたやうな顔をして、煙草の煙を吐いた。

「あの若い後妻を貰ひたい一心から、そんなことを云ふたのやな……一體香屑さんは今年幾つやらうな。この前に聞いた時は四十八とか九とか云ふことやつたが、お幸の嫁づいた年から繰つて見ると何うしても合はん……それで昨夕も一寸聞いて見ると、今度は四十七やと云うたが、聞く度に年が違つてるのは可笑しいやないか……あれはもう随分老人やぜ」

老母も思々しうにして、こんなことを云つた。

「死んだ姉さんが、香屑さんの年を聞くと厭やな顔をしたので、私も委しいことは知らんが、何んでも初めは未やちうことやつたが、後では亥になつた……姉さんともダイブ年が違つてたのやもの、今度の後妻は娘のやうやらうぜ……厭やなことなア、あんな好色家……」

お信は蛇でも見た折のやうな顔をして、姉が死んでから間もなく自分を後妻にと望まれた時、竹丸の爲めにもなるからと、老母が先づ乘氣になり、自分も長い獨身の寂しさに飽いてゐたので、少しは心の動かぬでもなかつたのを、淺間しいと思ふ情が強かつた。

「あんな不男の坊さんでも、悪口を云ふとお幸は怒つたさかい、何處ぞ好えとこはあつたのやらう。夫妻の情はまた別かも知れん……お前でもあの時お幸の後へ直つて、見い、萬更でもなかつたのや」

老母は微笑みながら、囁くやうに云つて一寸舌を出した。

「もう竹さんが十六——姉さんの死んだ時は十二やつたかな——其の時から云うても、七八年待てば息子の嫁が貰へるんやもの、老人が若い後妻などを引つ張り込んで、その爲めに一人息子を態々他家へ預けるやうなことをせいで可いやないか……不自由なら妾でも置けば濟む。後妻と名がつくと何かに面倒で五月蠅いになア」

お信は自分の長い、獨身生活を振り返つて、男と云ふものは年を老つても、何うしてさう獨身で居る事が出来ぬ意氣地なであらう、などと考へてもみた。

「蓮華院の尼公様のやうに一生あゝして暮らす人のことを思へば、十年や二十年獨身でゐるのは何んでもない……けども私はさう云ふ人を見ると氣の毒で仕様がな……香屑さんが若い後妻を貰つたのも無理はないはな」

と福松は同情の多い言葉を、戯談らしく云つた。

「竹丸は當分預つてやることにしやうやないか」

老母は突然話を横道へ持て来て、可愛い孫を手元に置く事に決めやうとした。

「それがよろしいやらう。學校は當分此處へ入れて、中學へ入る下地に英語をやらせませう」と福松は新聞の生徒募集廣告を指さした、お信も最早反對はしなかつた。

二十二

翌る朝、香屑は竹丸を預つて貰ふことが決つたので、重荷を下したやうな氣がすると云つて喜んでゐた。

「祖母さんや、叔父さん小母さんの仰やることを能う聽いて、閑暇のある時はお律ちゃんを守らせてあげるのやぞ」

斯う云ふことを、老母や福松や妻やお信の居る傍で竹丸に云ひ聞かして、

「何分どうか宜しうお願ひ申します。家で我儘一方に育つてまゐりましたのやよつて、一つ十分に嚴しうなさつて……」

と、同じことを幾度も、云つて圓い頭を下げてゐた。

明日香屑が田舎へ歸ると云ふ日の夕方に、竹丸は福松に連れられて、新聞の廣告にあつた英語學校に行つて見た。

三軒長屋の眞中の、綺麗に拭き込んだ格子戸に「△△英語學校」と筆太に書いた大きな標札を掲げ、丸鬚に結つた若い妻君が取次に出て來たのは、學校と云ふものは皆西洋建築に運動場の附いた廣いも

のでなければならぬやうに思つてゐた竹丸の心に、奇異の感じを抑へることが出来なかつた。二階へ通されて見ると、六疊二室の真中に形の揃はぬ机を幾つも並べ、正面に小ひさな塗板を懸けて、それに細く書いた横文字が半分ほど消え残つてゐた。

階下からは肉類を焼く匂ひが、若い女の婀娜しく笑ふ聲とも、乾いた空気に傳はつて来て、福松や竹丸にはまだ経験のない新式の夕飯が始まつてゐるらしかつた。薄暗くなつて来たのにランプも點かず、茶も出なければ、座蒲團もない冷い畳の上に小一時間も空しく待たされた竹丸は、何處へ行つても「ぼんちく」と敬はれる郷里の人々の懐しい顔を幻のやうに思ひ浮べてゐるやうな状態で、心細氣に福松の方を見た。

本の包みを抱えた商人風の若い男が、足音高く階子段を上つて来て、燐寸を磨つてランプを點けながら、見馴れぬ二人をシロく見た。それに次いでまた一人二人と書生風の人や、稍年を取つた勤め人のやうなのが来て、五六人が机を圍んで下讀みを始めた。外國語を知らぬ福松、初めて外國語を習ひに来た竹丸の耳には、交るゝ讀方を練習する人々の聲が音楽のやうに響いたが、幾度もくく出るコンチネンと云ふ語だけは、耳の奥まで押し込まれたやうな氣がして、何の意味であるかを想像してみた。

漸く夕飯が濟んだと見えて、肪切つた顔に入字髻を生やした三十恰好の先生が階子段を上つて来て塗板の前に坐つたが、福松から竹丸の入學を頼むと、鷹揚に點頭いて、

「來年の中學入學期までには無論出来るやうになります……本は私の友達の手へた新綴字書と云ふのがありますから、それとナシヨナルの一をお買ひなさい……新綴字書はこゝに一冊あります、今夜はこれで少し習つてお出でなさい、ABCは讀めるんでせう」

と云ひながら、「第三高等學校教授從六位文學士何某著」とある鶉卵色の表紙の薄ッべらな本を出して福松に渡した。

「其の著者は私の友達です」

先生はこれをまた云つて、咳を一つすると、横を向いて先づコンチネンの組から教へ始めた。

やがて新綴字書の初めを一寸教はつた竹丸は、遁れるやうにして福松とも狭い格子戸を出たが、云はれた通りの本を途中で買つて歸ると、老母は夕飯を喰はずに出た孫の爲めに、初入門の心祝ひだと云つて、尾頭の付いた魚を膳に載せて待つてゐた。

二十三

香屑は其の翌日田舎の寺へ歸つた。土産物を入れた行季の中には、老母から貰つた「東大寺」の銘のある古瓦の破片や、藤園の刻つた牛の根付や、蓮華院の尼公から頂いた扇子や、物産陳列所て買つて来た反物や、菓子や、そんなものがある／＼と入つてゐた。

皆なに送られて、店の上り口で靴を穿く時まで、「何分竹丸を宜しうお願ひ申します……竹、確りして勉強せにや可かんぞ」と五月繩く云つてゐたのを、竹丸が追ひ出すやうに急ぎ立て、停車場まで行季を提げて隨いて行つたが、父の顔を列車の窓に見送つて歸つて見ると、離座敷はもうチャンと片付いてゐて、自分の坐る場所の様には思はれなかつた。

「さア此方がお前の勉強場や、離座敷は福松の居室やよつて、他のものが入るとあの難かし屋が怒りよる」

老母は斯う云つて、母家の八疊の片隅に足の折れたのを釘で不器用に打ち付けてある古机を据ゑた。

竹丸は離座敷から其處へ来て、ぼんやりと机の前に坐り、昨夜買取り「ダー」などを披いたが、犬の走つてゐる畫も、鶏の卵の畫も、ハッキリと意識して見るのではなくて、眼は何時しか硝子障子の外の、亡母が田舎の寺から苗を持って来て植ゑたと云ふ銀杏の樹に注がれ、先刻まではお客の身分であつたのが、今はもう食客になつたことを心細く思ふ状であつた。

「今から里心を起しては仕様がないな。先刻は追ひ出すやうにしてゐたが、別れて見るとまたお父つあんが戀しいのやないか」

「戀しいのはお父つあんやあるまい、他に綺麗な良え女があるやう」

「多田の山奥にか……穴熊のやうな別嬪では始まらない」

「そんなことを云ふけど、あんな山奥に何うかすると眼の覺めるやうな美え女が居るもんや、なア竹さん」

仕事の合ひ間に座敷へ上つて来た福松と、まだ一兩日は滞留してゐると云ふお信とが、竹丸の背後でこんなことを云ひながら、出がらしの茶を飲んだ。

「竹さんは出世する人相がないでもないが、悪い相もあるよつて、正直を守つて慈善でもせんと可いんなア」

福松は思ひ出したやうに斯う云つて、折柄後を振り向いた竹丸の顔に睨むやうな眼の光を浴びせた。竹丸は眩しさうにして、

「そんなことが分りますか」

と心配らしく問うて見た。

「氣にしては可かんが、少し剣難の相があるのと、前齒の間が隙いてる人は親に早う別れるな」

云ひにくさうにして云つた福松の言葉には、力が籠つてゐた。

「厭やなアこの人は、碌なこと云やへん。ヤッに入るとそんなことまで分るのかいな。私の人相なぞ見るのは眞平やぜ」

お信は顔に蜘蛛の巣でもかゝつた時のやうに、両手で忙しく額や頬を撫で廻はした。

「豆腐屋ッ」

竹丸は戸外を通る豆腐屋の聲を聞きつけ、突然斯う叫んで、「先刻祖母が、豆腐屋が来たら呼んで呉れと云うた」と二人の顔を見た。

「竹さん、家はお前とこと違つて商賣人やよつてな、物賣を呼ぶにも丁寧には云はにや可かん。豆腐屋でも「お豆腐屋さん」と云はんと、此方よりも先方で喫驚する……今は四民平等やないか、小ひさな物賣でも呼棄にすると云ふことはない」

と福松は染々教へるやうに云つた。

二十四

春日のおん祭が近づいた。奈良の冬は追々寒くなつて、興福寺の塔に眞白な霜を見る朝もあつた。

竹丸はナシヨナルの一を少しづつ習ひ始めて、「犬」と云ふ字や「子供」と云ふ字の英語を覚えて来た。香屑から福松へ宛てた手紙が二度ほど来て、「竹丸事嘸御厄介と存じ候、この上ながら何分宜しく願上候」などと書いてあつた。大阪のお信から老母へよこした手紙には、「早く大阪へ出て商賣をする様になされ度、手頃の空屋見當り候は、早速御知らせ申すべく候」と云ふ風の唆かすやうな文句があつた。

福松は新聞の廣告で、宗教に關係した本の標題を見る度に、それを爲替で注文しては、仕事の暇に獨りでゴソ／＼と讀んだり、夜分に先輩の信者を訪問しては話を聴いたりしてゐたが、何うしても痒いところへ手の届くやうに得心が行かぬので、大阪へ出て商賣をするやうになれば、彼地にはえらい宣教師も居やうし、少しは手筈へのある研究も出来やうかと思つて、其の時節の來るのを楽しみに、時は老母に向つて大阪へ轉居する利益を説いてゐた。

——この宇宙にある物質、それは太陽や諸星や地球や、其の地球の上に育つ動物や草木やが、ぶつかり次第に、自然と出來たものだとは何うしても思はれない。若し自然に出來たとすれば、無始無終の時間空間にぶつかつては遠くの昔に何んとかならねばならぬ。

大きくしては天體のこと、小さくは人間の身體の構造、そんなことを細に考へると、何うも物質の外に、無始無終に渡つて何かあるやうに考へられてならぬ。天體は只あつたもので、人間は遺傳と五感とで丸めた肉と骨とだけの代物だとは思はれない。

自分は其處がハッキリと知りたいのだ。神と云ふものが在ることを確に究めたい。……：：：：大洋の真中にある孤島に漂着した時、人は見え、家もなく、土地は耕されずに荒れたまゝであるが、只古新聞が一枚あつた。既に新聞がある以上、人は見え、人の居る形跡はなくとも、無人島とは認められない。と云ふやうな細かい比喻でなく、眞個に神が居る——無人島でない——確な證據が見たい——福松は斯う云つたやうなことに、絶えず頭を悩まして、基督教研究の傍ら、教の上では排斥する易者のやうなことも凝り出して、淘宮幹枝術の通信教授を受け、人の身の上を案じたり相貌を觀たりしては、人心究理の上から、神の存在を確める助けにしやうなどと考へてもみた。

劍難の相があると云はれた竹丸は、時々それを思出して氣味悪がつてゐたが、金物屋の店で、ドギ

ドギと研ぎ澄した出刃庖丁などを見ると、それが獨りで飛んで來て自分の胸に突立つたら、赤い血がダラ／＼流れるだらうなどと考へて、眼をそむけて通り過ぎることもあつた。斯云ふことがあつてから多く時間の経たぬ中に、福松の宗教談をチョイ／＼聴かされると、田舎の寺で父が村の翁媪を集めて説教してゐるのを立聽するやうな面白味はないが、其の代りに父の説教にはない力があつて、何處かへザリ／＼と引き込まれて行くやうな氣がした。

福松から少しづつ、宗教の話が説かれること、老母に嫁の悪口を聴かされること、夜學に行つてリダーを習ふこと、が、竹丸の毎日の日課であつた。この日課の中で嫁の悪口だけは厭だと思つた。

二十五

おん祭の日は朝から晴れてゐた。菊屋の忙しさは十一月の三日にも増して見えたが、其の中を繰り合はして、老母は孫に競馬を見せてやると云つて、竹丸を春日の社頭に連れ出した。

頭髪を結つたり、鐵漿を付けたたり、顔を洗つたり、衣類を着更へたり、いろ／＼の用事をいろ／＼の人に云ひ付けたたり、誰それが來れば斯う云ふの、幾時になれば何をすると、一人て一々氣をもんで、焦々しながら、いよく家を出るまでには随分時を移した。

外へ出たり、家へ入つたりして、老母の出かけるのを待ちあぐんでゐた竹丸は、老母が「さあ行かう、私が出るよとなると何から何まで世話焼いとかんならんよつて、出るまでに疲勞して仕舞ふ」と獨言のやうに云ひつゝ、敷居を跨いで、二三間歩くと、また何か思ひ出した様子で家へ引き返したのを見て、呆れた顔をしてゐたが、一人て先きにアラ／＼と一丁ほど行くと、老母は後から苦しうな息づ

かひをして追つて来た、乳母がお律を連れて其の後から来た。
通り過る町々には、皆祭の影響が見えてゐた。特別の装飾を凝した店もあつた。着飾らした子供の
手を引いて行く夫婦も見えた。町の角に荷を置いて、赤い風船玉を飛ばしてゐる商人の顔も祭らし
かつた。

「昔はこんなものやなかつた、もつと賑かて立派やつたが、御維新後だん／＼淋しうなつたのや、
それでも近年また少しづつ、良うなつて、催し物も出来るやうになつた」

老母はこんなことから、頻りにおん祭の由來などを話して、今日の祭は名高いけれど、若宮の祭で
大宮の祭でないから、祭の格式は低い。大宮の祭は三月に申祭と云つて、それは／＼神々しい祭があ
つて、勅使が見える。お前たちは人間の見る餘興の催し物を祭だと思つて眞個の祭を知らぬやうだが、
神様にいろ／＼の御馳走を供へて、舞樂や大和舞を御覽に入れるのが祭で、お前の田舎の鎮守の祭の
やうに、神様をそつち退けにして、人間ばかり食つたり、飲んだり、神樂や馬鹿囃しも神様には横を
向けて、人間だけで觀てゐるのは眞個の祭でない。と云ふやうな意味を、長々と熱心に説き立て、
おん祭の有り難味を竹丸の腹の中へ押し込まねば止まぬといふ風を見せながら歩いた。

「昔はなあ、お前やお前のお父つあんどのやうな人は春日の祭を拜むことが出来なんだのやぜ。祭の日
は門に「僧尼不淨の輩は入るべからず」と云ふ札が懸つて、坊さんは入れんのだ。……今はそんなこ
ともないが、それでも勅使の見える時は私等でもお宮の傍まで行かれないので、遠くから管絃の響を
聽いて、あゝ今がお祭の最中やなと思つてただけや、其の神々しさちうたら……」

老母は自分の所有物でも誇る様な状態で、いろ／＼のことを竹丸に聽かしたが、竹丸は近頃チヨイ／＼
と福松から教はつてゐる幼い宗教の知識から割り出して、老母の云ふことを心の中で批評してゐた。

一の鳥居まで行くと、競馬の埒が結ばれて、其の前には人垣が築かれ、其の傍におでんや飴や手遊
品の露店が、大きな傘を立て、幾つも設けられ、群集の足から立つ塵埃を浴びてゐた。裾を捲くり上
げて腰巻を見せた色の黒い娘が、串に刺した三角の苧藪を嚙つてゐるのも眼についた。
競馬はもう始まるらしく、烏帽子を着た古風な騎手の半身が、人垣の彼方に揺られ／＼と見えてゐ
た。

二十六

横の方へ廻つて、足場の悪いところを這ふやうにしながら小高い丘に上ると、其處には椅子をおい
た觀覽席の設もあつて、それを仕切つた繩張りの外に立つてゐる多くの人が動もすると繩を切つて椅
子の場へ流れ込まうとするので、聳の無い若い巡査が大きな聲を出して制止してゐた。
「お前は初めて觀るのやよつて、前の方へ出さしてお貰ひ」

と云つて、老母は人込みを掻き分けるやうにして竹丸を前へ押し出し、自分も其の後から隨いて出た。
無理に押し退けられた人々は苦笑ひをして老母の小ひさな丸髷を見た。乳母はお律を負つて後の方に
立つたまゝ首を伸してゐた。

太鼓が鳴り響いて、競馬は始まつた。近在の農夫から借り集めた足の太い駄馬は、眞似のやうな厚
總を懸けられて烏帽子を着た若者の鞭に驚かされながら、三つの平首を並べてバタ／＼と駈け出した。
一の鳥居から、二の鳥居の近くまで、其處に決勝點があつたが、何の駄馬が勝つたのか分らなかつた。
間もなく馬も人もゴチャ／＼として元の出發點に戻り、太鼓の音を待つてまた駈け出さうとした。
竹丸は詰まらなさいうな顔をしてそれを見てゐたが、老母は頻りに競馬の講釋をして、こんな上品

な競馬は何處にもない、なぞと云つた。

椅子をおいた観覧席の真中には、洋服を着たえらさうな人が腰をかけて、其の左右には同じやうな洋服を着た人が四五人と、緑色の袍に冠を頂いて笏を持った人とが居た。笏を持った人が首を動かす度に、其の不調和な金縁の眼鏡は、松の梢から差し込む冬の弱い日影にキラ／＼と煌めた。

幾番の競馬が済むと、人々は皆バラバラと丘を下りた。一の鳥居の傍は、一きはの混雑で身動きもならぬほどであつたが、老母は其の中を厚がましく押し通つて、竹丸と乳母とを芝生の茶店まで連れ出した、其のあたりには猿芝居や覗き眼鏡や蛇つかひの囃しが喧ましかつた。

夕方からは、福松が老母に代つて、竹丸に祭を見せた、晝間に競馬を見た丘の下を通つて少し行くと、左の方の草地に御旅所が出来てゐて、荒木の柱に杉の葉で家屋を葺いた清かな假殿が、高く枝を張つた太い樹の下に建てられ、其の前には舞臺の臺が設けられて、金模様のある見上げるばかりの太鼓が左右に並べて据ゑてあつた。

御旅所の周囲は皆幔幕を張つた幄舎で、福松と竹丸とは左手の方の狭い入口から、白丁を着た、番人に切符を渡して、多くの陪観者と、もに幄舎の席の上に坐ることを許された。庭燎は方々で燃えて、舞臺の高欄の赤い色や擬寶珠の金色が輝いて見えた。假殿に向ひ合つた稍遠い幄舎には、新らしい青座が敷かれ、金屏風に雪洞の灯が美しく映つてゐるところを頭を下髪にして白衣に緋の袴を穿いた十六七ぐらゐの神巫女の鮮かな姿が動いてゐた。

假殿の直ぐ左の幄舎には、四つの相引が並べられて、黒の袍に紫の指貫を看けた宮司の男爵を始め緑の袍に白の指貫で、金縁の眼鏡をかけた禰宜と、同じ色の袍の主典が二人、合せて四人は繪巻物に見るやうな風で殿めしく着坐した。

伶人の奏樂に連れて舞樂は始まつた。陵王だとか納蘇利だとか還城樂だとか、福松や竹丸には覺えにくい名の雅樂が、幾つも／＼舞はれた、左方は赤、右方は青、見事な装束や、恐ろし氣な假面が眼につくだけで、舞樂に籠つた意義は解らなかつた。

二七七

青い直垂を着た人が、先きの圓い桴を持つて、腰を捻りながら力限りに舞樂の太鼓を打つ状と、緋の袴の神巫女が幄舎の中を往來する容子とは、最も竹丸の眼を引いた。

「この間の蓮華院の若い尼様とあの神巫女とは何方が好い」

福松は、神巫女に見入つてゐる竹丸の肩を叩いて、笑ひながら、斯う云つた。竹丸は顔を赧くして、眼を他に外した。

「尼になつても神巫女になつても、若い女は悪うないもんやが、腹の中には皆糞囊があつて汚いものを入れてると思ふと厭になるな」

福松はまたこんなことを云つて、大きな欠伸をした。舞臺では舞樂が漸く終つて、大和舞が始つた。萎びたやうな人々が妙な装ひをして現はれ、舞臺の端の方を靜に歩いては思ひ出したやうにクルリと身體を廻はす状は、餘りに動作が單純で、舞とも踊りとも思はれなかつた。

「身體をクル／＼廻して四這ひになつて尻を向け合ふたのが舞の始りやと云ふから、この舞は舞が始まつてから間もない頃のものやらう、成程古さうなものやなア」

「神様ちうと何うしてあゝ古いものばかりお好きでせう」

「さうや何んば神様でも面白いものは面白からうにな。あの舞臺で一つ新作の振事でも演つたら、御

機嫌が好いかも知れん。それにこんな篝火を焚いとくより電燈の方が神様にも明いやらうな」

二人が小ひさい聲でいろ／＼と眠氣覺しの話をし合つてゐる中に、長い／＼大和舞も終つて、いよいよ還御と云ふ次第になつた。四人の神職は假殿の前に進み、二人づゝ左右に向き合つて柏手を鳴らした。夜はもう更けて幄舎の幔幕も陪觀人の袂も、露を帯びてしつとりとしてゐた。

庭燎は一時に消されて、東の山の杉の木立から上つた下弦の月が、蒼白く假殿の半面を照した。神職が二人恭しく階段を昇つて行くのが影のやうに見えて、伶人の奏樂は澄み切つた空氣に漂うた。

假殿の奥へ入つた神職は、御靈代を抱いて、警蹕の聲に連れつゝ扉の外へ出た。御靈代は神職の姿といもに白い壁代のやうなものに覆はれて、直ちに拜むことは出来なかつたけれど、月影が薄く壁代に神職の冠の形を映し出して、四邊の状は人々に神代の昔を思はせた。陪觀人の中には藪の上に俯伏して御靈代の渡御を送つてゐるものもあつた。

福松と竹丸とは御靈代の後に隨いて若宮の方の上つた。伶人の道樂は奥深い木立の無言を破つて、神々しい一列は白い壁代を真中に、暗の坂道を徐ろに進んだ。木陰を漏れる月の光が、さまざまの影を壁代の上に描いてゐた。

若宮の廣前に着いて、御靈代が高いところに臈氣に拜まれる神殿の奥に納つた時は、もう夜半を餘程過ぎてゐた。此處まで拜みに來た陪觀人は極く少くて、福松と竹丸とが暗の奥に鳴り響く柏手の音を後にして二の鳥居のあたりまで來た時は、二人の外に誰れもゐなかつた。

福松は沈み切つたやうな状をして、何事をか考へ／＼歩いてゐたが、時々思ひ出したやうに「まことの神」と云ふ言葉を口にしてゐた。渡御の警衛を勤めた巡查の角燈の灯が、飛ぶやうに後から下りて來て、靴音は斜めに横徑へ入つた。

二十八

平凡な幾日か續いた。

寒くなるに連れて、饅飩の賣れ高が殖えるので、老母は毎日帳面を調べて喜んでゐた。おん祭の頃から「何うも身體の工合が良い」と時折云つたのを、誰れも氣に留めて聞くものはなかつたが、或る夜賣上げ勘定の時に注文帳を見て居て、

「同じことが二つ記けてあるがな何うしたのやなア」と云つたので、福松が傍へ寄つて見やうとすると、

「あ、私の眼が悪いのや、一字が二字づゝに並んで見える。何う云ふもんやろ」

周章てた状で云ひ直して笑つたから、皆なもともに笑つたが、福松は笑ひながらも、變なことを云つたなと氣遣つて、この時から内々で老母の身體の容子に注意してゐた。

外出から戻つて來て、何時になく悄氣た顔をしながら、福松の仕事場へ來て、「町を歩いてると先方から來る一人の人が二人づゝに見える。今家へ入る時に下水を跨がうとすると、溝が二つに見えたので、足の遣り場が無うて轉んだ」

と云つたのは、それから四五日後であつたが、其の折は腹の突き出た肥つた身體の帶のあたりを泥塗れにして、掌を少し擦り剥いてゐた。福松はいよいよ心配して、直に醫者へ行くことを勧めたが、老母は「醫者なぞに分るものか」と首を振つて他の話を始めた。

其の後も時々一つのもの二つに見えることがあつて、氣も追々悪くなるやうなので、流石に醫者嫌ひの老母も到頭我を折つて、前に下痢症の時にかゝつた人に診て貰へば可いと云ふのを、自分に行

くと云ひ、人車に乗って行けと云ふのを、歩いて行くと云つて、一人で家を出て行つたので、福松は後から竹丸にさう云つて、見え隠れに尾行さした。

生れてから醫者の薬を飲んだことは二度よりないと云つて、人の眼の前に突き出してゐた二本の指が三本になると云ふことは、老母に取つて病氣其のもの、苦痛よりも苦痛であつた。

「何處も悪いのやないのやら。醫者も分らんと云うた。大方心の疲れかも知れんな……明日小便を壘に入れて持つて来いと云うたが、私はそんなこと厭や、もう行かへん」

老母は、醫者の許から歸つて来て斯う云つた。福松も妻も、竹丸も乳母も、其の傍を取り巻いて、いろ／＼と聞いて見たが、老母はこれだけのことを繰り返すだけで、皆ながまだ執念く聞くと、「心配せいで可えちうに……私の生家は此家と違ふ皆長命や、こんなことで死ぬもんか。好い加減に死んで呉れると可えと思つてそんなことを云ふのか知らんが、私は死なん、死んでも死なん……百歳まで生きる。生きいでか」

眼に角立て、斯う怒鳴つたので、皆なは口を噤んで傍を離れた。福松だけは押し返して、

「そんな厭味を云ふものぢやありません、死ぬとか生きるとかは別として、身體の悪いのを無理に辛抱して何になります」

と叱るやうに、宥めるやうに云つて、更に良い醫者に診て貰ふことを懇々と勧めたが、老母はさげしむ状でニツと笑ふと、持つて歸つた薬瓶と散薬の包みとを投げ出すやうに其處へ置いて、店の間から奥座敷に引つ込んだ。

二十九

縣立病院での診察の結果は、糖尿病といふことに決つた。

厭やがる老母を無理に病院へ連れ込んで、白い壁に添うて置かれた白い寢臺の上で、白い診察衣を着けた院長の手に肥つた身體を任せざるまでの福松の骨折は一通りでなかつた。

「全て狂人やな」

怒つた顔をしてゐる老母に付き添うて、休憩室に引き取つた福松は、斯う云つて冬の最中に額の汗を拭いた。眞四角な休憩室は、磨き上げた鏡のやうに美しい床の上へ母子二人の姿を浮ばせて、窓には冬枯れの春日野が映つてゐた。

「お幸も死ぬ前には氣が觸れたよつて、私もいづれ狂人になるやらう」

「院長さんに喧嘩を吹きかけるやうなことを云ふので、困つて仕舞うた……狂人なら狂人で可いが、賢狂人やよつてな」

福松は染々と困つた顔をしてゐたが、老母は、さまを見ろと云ふ風で、

「さうやよつて私は病院なぞへ来るのは厭やと云ふたのや。醫者と云ふものは碌なことは云はんものでなア……米を喰べては可かんなんて、日本人がお米の飯喰べいで何うなるもんか」

と室の外に誰れか居るなら聞いて呉れと云つたやうな高聲を出した。こんな容子では院長の勧めた入院が兎ても／＼駄目らしいので、福松は到頭それを口へ出さずに老母と睨み合ふやうにして家へ歸つた。

こた／＼してゐる中に年は暮れた。――

總べてのことを皆昔風に慣れて来た上に、取り分け甘いもの、好きな老母に、一切の澱粉質を禁じて、肉類ばかりして生命を繋がさうとするのは、一家を擧つての大仕事であつた。

「私は死んでも可え。お米の飯やお菓子が喰べられんのなら、生きてゐても仕様がな。井戸へても身を投げて死ぬ……何うせ死ぬものなら喰べさせて死なした方が孝行と云ふもんや」と叫んで、飯櫃の蓋に手をかけたのを、福松が駈け寄つて振ぎ放したのは、見るに堪へぬ出来事の手初めであつた。

お律が餌の付いた團子の串に刺したのを持って、「うま／＼／＼」と老母の傍へ見せに行くと、怖い目をして孫の顔を見てゐたが、いきなり團子を奪ひ取つて自分の口へ入れたので、お律はワツと泣き出して、乳母の膝へ駈けて行つた。

小ひさい孫は皆、母よりも親しんでゐた祖母の傍に寄りなくなつた。

飯櫃を納つて置く戸棚には、堅固な錠前が下されて、其の鍵は福松が始終懐中に入れてゐた。

「御飯にしますよつて、鍵を出しとくなはれ」

時分／＼に斯う云つて、妻が福松の傍に来るので、職人どもは顔を見合はして笑ひを忍んだ。

「おいもう十二時やぜ、そろ／＼鍵にしても可さうぢやないか」

職人は福松の居ないところで、こんなことを云うた。

大阪の姉と多田の香屑との許へは、福松から屢々老母の病状が報ぜられた。其の手紙の中には、「鳥獸の肉または魚類の外には何も食せしめてはならぬ」と云ふことにて、西洋人の居候を置きたる如くまことに困り候上、何分昔人間の事故肉類を嫌ひ申し候」と云ふやうなことを書いて、平和な病人のやうに取り繕ひ、見苦しく淺間しい出来事は成るだけ知らさぬやうにした。

三十

「離座敷を明け渡しますよつて、彼處で寝てゐたら可えてせう。始終起きて来ると癒りませんぞ」

機嫌の好い折を見て、福松は老母に斯う云つたが、容易に聴き入れやうとはしなかつた。

「何んば病人でも、私が居ると此處の家は闇黒や。それに寝てばかりゐるほどの病氣でもないよつて、斯うして起きたり寝たりしてゐる方が好え」

と老母は近頃餘程寢れの見えて来た顔に笑を浮べて、健康な時にしてゐただけのことは、成るだけ人手に渡すまいとした。

八疊の座敷の押入れの中に据ゑてある、大きい巖疊な榨造りの帳簾筒の一番下の深い抽斗が金庫の代りに用ゐられてゐて、老母は幾十年の間この帳簾筒の前に夜のものを敷いて眠つて来た。夜中に鼠が天井を走る音に眼を覺しても直ぐに押入れの戸を開けて、帳簾筒を見ない中は何うしても再び眠られない習慣のある老母は、幾ら病氣になつても帳簾筒の前より外に臥床を移す事は出来なかつた。

其の帳簾筒の抽斗から盗むやうに紙幣を一枚抜き取つた老母が、窃と戸外へ出たのは誰れも氣が付かずにおたが、懐中を膨まして歸つて来た姿を福松が先づ見付けたので、妻を呼んで容子を窺はせにやると、老母は臥床の上にキッチンと坐つて、

「今日は好え天氣やなア」

なぞとやつてゐた。人の好い妻は、近頃老母のすることが皆自分に當り散らしてゐるやうに思はれて怖ろしいので晝は仕事場に、夜は子供の添乳に隠れて、滅多に病床へ近づいたことはなかつたが、今斯うして眞正面からつく／＼と姑の寢れた状を見ると、氣の毒と云ふ感じが流る／＼やうに涌いて来て、今までの自分の不行届の所作が、慙るふ心でいろ／＼と顧みられた。

「氣分は何うだす、少し撫りまへうが」

「いいえ、気分は何んともない……お前は毎日忙しいので疲れてるやろう」
老母は例にない温かな物の云ひやうをして、膨れた襟のあたりを氣にしながら、懐かしさうに嫁の顔を見た。

——死期が近いのではあるまいか？ 妻の心には斯う云ふ感じが閃めいた。

「斯うやつて一人で居ると淋しいよつて、用は無うても仕事場へ出てゐたいのやが、私が行くと職人までが、また来た、何しに來たと云ふやうな顔をして私のすることを一々見るので、氣が引けて自分の家のやうな氣がせん……私はこの頃身内よりも他人が好きになつた」

老母の眼はまた懐かし氣に嫁の上に注がれて、其の手は矢張膨れた懷中を押へながら咳を一つ二つすると、

「私も年は寄るし、身體も悪うなつたよつて、世帯を福松に渡して帳簿筒の鍵も譲りたいと思ふのやが、まだ死ぬやうなことも無からうと思つて、斯うやつて自分にしてるのや……そんなことが福松の氣に入らんのやあるまいか。お前から聞いてお呉れ」
と云つたが、妻は俯伏いたまゝ答へる術を知らなかつた。

「お前は何時やつたなア、再來月あたりやないか……お前が産するし、私が病人では仕様がなけれまでもには屹度快うなつて見せる」

それを聞くと、妻は八月ぐらゐの腹を袖に蔽うた。

三十一

妻は茹で前の方が氣にかゝるので、好きほどに老母を慰めて仕事場に下りた。此の家へ來てから今

日始めて姑の心の奥から絞り出したやうな優しい言葉をかけられたのが嬉しくて、早速三輪の生家へ其の由を書き送らうかとさへ思つた。

「何を買つて來たのやなア……取り上げんと可かんぞ」

福松が斯う云つて、喰しい眼に妻の顔を見たので、妻は始めて自分が老母の傍へ何をしに行つたかと云ふことに氣が付いたが、あんなに優しい言葉をかけて呉れた人に逆つて、其の生命に代へてまで喰べたがるものを遮ることは何うしても出來ないと思ひながら、

「何も買つて來やはれしまへん。お錢を崩して來やはつた様子や」

と吃りながら云つて、恐れる風で夫を見た。

「お錢を崩して何うするのやらう。帳簿筒の鍵を持てるので何をするか分らん」

福松は饅飩を切る庖丁を手にして突ツ立つたまゝ暫く考へてゐた。妻は遁れるやうにして夫の前を去つた。

「祖母が焼芋を……」

と小さな聲で云つて、竹丸は急いで物を喰ふ眞似をしながら、足音を忍ぶ状で福松の傍へ來た。妻も職人も皆此方に向いて竹丸の滑稽な容子を笑つた。

「先刻懷中へ入れて來たのは焼芋やつたのか。仕様がないなア、そんな物を喰べては……子供ぢやあるまいし」

福松は獨り言を云ひながら、三足ほど上り口の方へ歩きかけたが、また後返りをして怖い顔をした。まゝ仕事にかゝつた。

井戸端へ行つて釣瓶から夥しく口喰みをやつた竹丸は、「外へ出て御馳走を喰べて來やはつたな」な

ぞと人々に冷かされてゐたが、口元を拭き、座敷へ行つて見ると、老母はケロリとした風をして蒲團の上に坐つてゐた。

「竹さん、私が此處で寝てるので、お前の勉強の邪魔になると可かんよつて、裏の物置なア、彼處は今あないに汚いが、元は人の住居に借したこともあるのやよつて、あれを片付けてお前の勉強場にしたら何うやらと思つてるのや。彼處なら静かだ良いやう」

老母は背後の机に凭れてゐる竹丸の方へ大儀さうに首を捻ぢ向けつゝ斯う云つた。

竹丸は近頃の老母の素振が、前のまゝの優しみを有つて居らぬやうに思はれるといふに、この間讀書に飽いた時、紙を小ひさく噛み圓め、曾て田舎の寺の三門の仁王の顔へ投げ付けたやうに入疊の天井の節穴を狙つて投げたのを、老母に嚴しく叱られたのや、便所へ行つて手を洗はなかつたのを見咎められたのや、「他の書生さんは皆一生懸命になつて勉強してるが、お前は根がないのか一時間と續けて机の前に坐つてたことがないなア」と厭味を云はれたのや、そんなことがゴツちやになつて老母の傍に机を置いてゐるのが烟つたくてならなかつたので、

「さうした方が良いでせう。これから直ぐ物置を片付けて机を持つて行きます」と云つて嬉しさうな顔をした。

勉強をしてゐるやうな風を装ひながら、ゴロリと横にでもなつて、福松や老母には秘密で買つて来た小説本などを自由に讀むことの出来る場所を得るのが竹丸に取つては、福松からよく聽いされてゐる天國と云ふものに近いて行くやうな氣がした。

三十二

其の物置は三疊に足らぬほどであつた。

裏口を出て、鑑鈍の茹で汁の白く流るゝ細い下水に沿ひながら、漬物屋と下の便所との間の、悪い臭のするところを二三間行くと木戸があつて、それを開けると直ぐ右手に物置の入口が見えてゐた。

若い者が四時頃に仕事の終るのを待ち兼ねて、老母は苦しさうな息遣ひをしながら、自分に指揮して物置を片付けさせた。壊れた蒸籠や、行燈の古いのや、破れた蝙蝠傘や、弓の折れた提燈や、口の缺けた大土瓶や、先きの赤錆びになつた鍬や、そんなもの、塵埃だらけになつてゐるのをいろ／＼と取り出して、若い者は老母の云ふ通り漬物部屋の片隅や仕事場の天井にそれ／＼納ひ込んだ。福松も妻も乳母も、皆其處へ来て立つて見てゐた。竹丸は獨り奥座敷で本箱や机を片付けたり、蒲團を取り出したりして、遠方へ引き越してもするやうな状をした。

「一軒の家にはカラクタ道具の多いものやなア。棄てるのも惜いし、残しといつても役には立たんし、仕様のないものや」

老母は、若い者が重さうに擔いで行く、瀬戸物の火鉢の龜裂の入つたのに冷い灰の固まつたまゝになつてゐるのを見ながら斯う云つた。

「こんなものは好え加減に棄てるとか人に與るとかしたら何うだす。場所塞げになるだけで何にもならん」

福松はまだ仕事着のまゝで、爪の間に入つてゐる鑑鈍粉を穿り／＼云つた。

「私の身體のやうなものでなア、役に立たなくても、龜裂が入つても、全て壊れん中は、ソツクリとさして置いて貰はんらん。皆なの邪魔になるのは氣の毒やが……」

老母が情なきやうな聲で斯う云つたのを聞くと、福松は一寸眼の色を變へた容子であつたが、直ぐ

元の平和に返つて、

「去年まで此地にゐた私の知つてる西洋人なんぞ、それや旅先でもあるが、小ひさい家を一軒借りて、蒲團と旅行靴と湯を沸かす土瓶に七輪があるくらゐで、身軽なものや。さうやよつて轉居をするにも面倒はなし、土瓶や七輪は近所の人に與つて、轉居先でまた買つて新しくなつて好いのや。轉居をする時がラクタ道員に高い運賃をかけてゐる人もあるが、運賃だけ出せば先方で新しいのが買へやうにな……人間は何でも身輕にして生活したいものやア……家のやうに永年同じ土地に住んで、こんな商賣をしてゐるものは仕様がなけれど……」

と、係累の多い、複雑な生活をしてゐる自分の身の上を思つてみた。

妻は姑と夫との言葉に氣を留めず、古盥の中に入つて出て來た手遊品の喇叭を拾ひ上げ、塵埃を吹き落して、傍に遊んでゐるお律に與りながら莞爾と笑つた。

其の中に物置は片付いて、掃除も済んだ。天井の無い屋根裏は黒く低くて、周囲の荒壁からは人の動く度にザラ／＼と泥砂が落ちた。南に向いて曲りくねつた小窓の障子を妻が手早く貼り更へて眞白にしたのと、新しく敷かれた薄縁とが、黒い空氣の中に目立つて光つた。

竹丸は其處へ荷物を運び込み、小窓の前に机を据ゑて坐つてみた。福松は妻とともに、窮屈な入口を潜つて、低い床に腰をかけたが、

「今夜からまア此處へ隠居してみるのが可い」と、四邊の汚いのを見廻はした。

「酷おますなア、竹さんをこんなところへ押し籠めて」

妻は斯う云つて、狭苦しい中の物の置場所を少しづつ直してやつた。

三十三

二月堂の水取も済んで、「寒さも最うこれまでぢや」と人々は云ひ合つた。老母の病床に炬燵の入れないことも折々はあつた。福松は方々へ時候見舞の手紙を出して「……私方も老母の外皆無事に候間御安心下され度……」などと、例のキチンとして四角な字を書いた。

雨の晩で、竹丸は夜學を怠けて、二分ツンのランプに郷里の父からの葉書を笠にして薄暗い光の下で、東京の小説雑誌を讀んでゐた。ツメ／＼として、暗い、汚い、窮屈な物置の起臥も、一二ヶ月馴れて來た上に、何をしても人に見られる憂ひがなく、何を讀んでも人に叱られる虞れのないのが、初めから嬉しかつたけれど、時にはまた、蝸牛の這つたらしい痕がうね／＼と残つてゐる煤けた荒壁や屋根裏を見廻はしつゝ、天井の高い廣々とした郷里の住居を思ひ出さずには居られぬ時もある。

短篇小説を一つ讀み終つて、自分が其雑誌の紙の中から脱け出して來た人のやうなつもりで、染々と考へながら、不圖自分の通つて居る夜學校の友達が、「今度の日曜に君のとこへ遊びに行く」と云つたことを思ひ出して、こんな汚いところへ友達を連れて來ることは出來ないから、何と云つて斷らうかといろ／＼工夫を廻らしてゐると、傘に雨滴の當る音がして入口の戸が外から開いた。

それは福松で、大きな身體を持って餘してゐるやうな風をして背中を屈めつゝ、

「今夜はお客様に來たのや」

とミシ／＼音をさして、竹丸の傍へ上り込んだ。竹丸は雑誌を机の下に押し隠し、氣味の悪さうな顔をして、自分の敷いてゐた座蒲團を福松に進めた。

「今夜また一人人間が殖えるのや」

斯う云つて福松は、座蒲團を肥つた膝の下へ押し入れたが、入口ではまた雨滴の傘に當る音がして、乳母が茶道具と菓子とを運んで來た。

火の氣の熱い、瑕だらけの箱火鉢に炭をつぎ足して新らしい薬籠を載せ、其の横に茶道具を擡げたので、あたりが俄に景氣付いて明るく見えた。竹丸は漸く、人間が一人殖える、と云つた福松の言葉を悟つて、怠け者の自分に厭味を云ひに來たのではないことが分つたので、安心した状態で火鉢の炭を吹きおこした。

「家の妻には妙な癖があつてな、私が大坂へ行てる留守にお律が生れてから、私在家に居ると産が重いのでやさうな。それでお花の時は晝間やつたが、私は態々仕事を止めて遊びに出たのや。今夜も産氣が付くと祖母が私に何處かへ行けと云ふのや、が雨が降つてるので此處へ逃げて來た。此處に暫く居てまだ生れなんだら、一所に芝居へでも行て見やうかなア」

福松の顔は心配らしく、宿命を信ずるとでも云つたやうに見えてゐた。竹丸は自分の英語の力が、この學期から中學に入るにはまだ不十分な上に、中學の一年級や二年級の生徒が皆自分より年下で、身體も小ひさいのに氣が引けてゐたので、當分英語ばかり習つて、中學を通らずに上の學校へ入ることにしたいと云ふことを、福松に相談して見やうと思ひながら、ツイ／＼云ひおかれてゐたのを、今夜漸く云ひ出して、

「さうした方が却つて出世が早いと思ひます」

と顔色を窺ふやうにしてゐると、福松は好い加減に聽き流して、

「表から行ても裏から行ても同じことなら、近道の方が良えな」と云つて、雨の音に耳を欬てた。

三十四

「もう生れたやらうが」

重苦しい口調で斯う云つて、福松は模様を窺ひに出た。竹丸も其の後から隨いて、雨に濡れながら傘の下に追ひついた。相合傘の二人は、裏口の横手の黒板塀の外に立つて、内の物音を聞かうとした。黒板塀の中が離座敷で、産婦は其處に産婆とも居るのである。

雨の音に混つて、内の話聲が時々聞えた。咳をしたのは産婆らしく、高く笑つたのは産婦らしくつた。「まだ／＼生れさうもないな」と福松は思つた。

裏口の戸が強い音を立て、突然開いたので、二人が其の方を見やると、内から射すランプの光に映されて、右に傘を持ち左に小鍋を提げた乳母が出て來て物置の方へ行かうとした。

「まだなか／＼生れさうには見えんが、話なんぞしてやうやな」

福松はツカ／＼と乳母の傍へ寄つて、小さい聲で斯う聞いたので、乳母は横合から不意に現はれた人の姿に驚きながら、

「おやお二人でこんなとこに何してゐらしたの……もう間がありませんよ。あの産婆さんは可笑しな人でね、お腹を撫りながらお妻さんにいろ／＼の話をして笑はしてゐるんですもの。私は東京にゐた時随分お産の手傳に行きましたし、自分にも二人生まれましたが、皆新式の西洋産婆でね、あんな産婆さんてありませんよ……ずうつと斯う痛んで來て、少し休んでまた痛んで來るんですから、其の間になら笑つても居られますが、痛む時に話なんぞしかけられると厭やでせうよ」

乳母はべら／＼と喋舌つて、夜食の饅頭を入れた鍋を竹丸に渡し、

「産婆さんに上げた餘りですよ、お二人で仲好く召しあがれ、喧嘩しないでね、ホ、ホ、」と笑ひながら、小走りに腰を振つて行つた。二人はまた黒板塀の傍に立つて、内の物音を聞かうとしたが、今度は咳も笑聲もなく、雨の音が只人の眠りを誘ふやうであつた。

二人は物置へ戻り、茶を飲んだり饅頭を食べたりして、物をも云はずに顔を見合してゐると、やがて入口の戸が開いて、乳母はまた其の醜い顔を見せた。

「生れたか」

「え、今、坊ちやんですよ」

福松は直ぐ立つた。竹丸も立つた。乳母と三人で裏口から威勢よく店の間まで行くと、其處には職人どもが頭から蒲團を引き被つて寝てゐた。

廊下から離座敷へ入らうとした時、中から産婆の聲で、

「皆さん一寸待つてお呉れやす。まだ少々片付きませんよつて」

と云ふのが聞え、續いて嬰兒の啼聲が、福松の耳には珍しい音樂のやうに響いた。

許されて中へ入つた時は、血腥いやうな感じがするだけで、室はスツカリ片付いてゐて、疲れた顔をした妻が新しい蒲團へ仰向に寝てゐる傍に、病を押して起きて来た老母が赤い着物に包まれてゐる嬰兒を抱いて、産婆と並んで坐つてゐた。福松は何ものも眼に入らぬ風で先づ嬰兒を見たが、竹丸はキヨロ／＼と室中を見廻はして、大きな盥といもに縁側に出してある油紙の包みの硝子障子を透して見えるのに眼を付けた。

「お手柄／＼」

老母は斯う云つて、眠りがいつてゐる嫁の顔を見た。

三十五

「このお子さんは臍の緒を二重に頸へ巻いて、やつたよつて、三度目にしては少し生むのに手間取れたが、其の代り賢いお子さんに決つてます」

産婆は小ひさな盃に砂糖湯を拵へ、ガーゼを小さく丸めて人形の頭のやうにしたのを、それに漬しながら斯う云つた。

「臍の緒を二重に巻いた子は賢いと云ふことだすな……何しよまア男で好かつた。女やつたら私は起きて来やへん」

近頃孫の嫌ひになつた老母も、家の後嗣を得たことが嬉しく、自分の病を忘れたやうで、甘いもの喰べたいことも思ひ出さずに、砂糖湯の染みたガーゼの丸を吸うてゐる嬰兒の、平家蟹のやうなグニヤ／＼した顔に見とれてゐた。

「この家は昔から養子をしたことがないさうで、私の代になつて女の子ばかりで他家から養子を貰ふやうなことがあると、先祖へ申譯がないと思つてな、今度また女やつたら何うしようかと心配してゐました。例も産の時に私が居ると重いと云うて追ひ出すが、私はそれで女が生れるんやないかとも思つて、今夜は裏の竹さんとここに居て、一生懸命に男の息を産屋の方へ吹きかけてた」

福松は洵宮幹枝術の書物を繰りながら、言葉に力を込めて斯う云つた。

「随分御幣擔ぎでゐらッしやること、オホ、」

乳母は何時の間にかお花を抱いて来て、隅の方から笑つた。

「人間の智慧では兎ても分らんことだすもの、旦那の御心配なさるのは無理がありまへん。何も氣休

めだすものなア。私、方々のお産に上つて毎も思ふのだが、十月お腹に居る間にチャンと斯うやつて身體の機械が不足無く出来るのは不思議やおまへんか……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～欠伸をなさるでせう、おならもすれば今に咳も出ますし、小さうても爲るだけのことはなさるのだすよつてな、怖いやうなものだすな……：：：物を喰へることも教へて貰はずに知つて、この通りチウウ、砂糖湯を吸うて、だす」
産婆は自分に造つたものでも誇るやうに鼻を蠢かした。乳母は嬰兒の傍に膝行り寄つて、折柄眼を覺したお花に、

「ほら赤ちやん！赤ちやんが居たでせう」

と云つて、生れたばかりの弟を見せやうとしたが、お花はべそをかいて、乳母の懐に嚙り付いた。老母は抱いてゐる嬰兒をお花の小ひさな背中に付きつけ、

「姉弟の初対面や、お律も起して来ると好えな」

鼻の上に皺を寄せて斯う云ひながら、久し振りに機械の好い顔を見せた。嬰兒は物に怯えたやうに、赤黒い顔の肉をビクビクと動かして、新しい啼聲を立てた。

「其の兒は長命するらしいな……：：：：：：：：：：：：：：～それから坊さんか、神主か、何んでも長袖が性に合つてるやうや、いろ／＼と書物を繰り廣げてゐた福松は、机の側から眼鏡を光らしてこんなことを云つた。人々はそれを聴くと、齊しく嬰兒の顔に眼を注いだ。

「さう云ふと何うやら竹さんが一番面ざしが似てるやうやないか」

老母は啼き止んだ嬰兒を妻の傍へそつと寝させて斯う云つた。福松はまた他の書物を披いて、

「初めての男やよつて初男と名を命げやうかなア」

と頻りに考へ煩ふ状をして、自分の名との釣合なぞを思つた。

「初男……：：：松魚……：」

「竹丸は冷かすやうに云つて軽く笑つた。

三十六

初男が生れてから四五日は老母の病氣もだいぶ快い方であつた。福松も初めての男の子に慰められて前よりは仕事に勵んだ。妻の日立つのも例よりは早かつた。乳母も職人も、男の子が生れたと云ふことから、何とはなしに刺撃を受けて、動くにも働くにも尻が軽かつた。

一家は皆新たに殖えた小さな蟲のやうな人間に操られてゐるやうであつた。けれども、それは長く續かなかつた。老母が先づ嬰兒に飽いて、お律やお花を見ると同じく、五月蠅さうに初男を見るやうになつた。

「市役所へ届けに行きますが、「初男」と決めて可えてせうな」

福松が他所行き羽織を着て斯う聞いた時、老母は苦り切つた顔をしてゐたので、重ねて、

「初男と云ふ名が氣に入らんなら、他の名にしても可い。私は雅各と云ふ名が好きやよつて、寧ろさうしようかと思ふのやが、貴方が厭やがるやうし、讀みにくいので矢張初男にして置かうと思ひますが……：」

と云ひながら枕元へ跪づいて老母の氣色を窺つた。

「お前の子やさかい、何とでも命けたら可えやないか。私は何うせ死んで行く身體や、今年生れた孫にかゝることも出来んよつて何うでも可え……：：～けども其のヤコ……：：～何とか云ふのは止めとくれ、異人みたいな名を命けると先祖に言譯がない」

「雅と云ふ字と各と云ふ字を書いて、やこぶと讀ませるのですが、知らんものに一寸分らんので、私もそれは止めやうと思つてたのだすよつて、そんなら「初男」にして置きませう」

福松は斯う云つて直ぐ座を立つた。老母は何とも云はずに怖い顔をして、羽織の裾のたくし上つたのを見送つてゐた。

この日あたりから老母の病氣は餘程悪くなつて、

「私は十七日に死ぬ」

と云ふことを、幾度も／＼口にするやうになつた。

「私は百歳まで生きる筈やつたが、お米の御飯と甘いものが喰べられんやうになつたよつて、十七日に死ぬ。屹度死ぬ、嘘やない」

こんなことを云つて家の者を氣味悪がらした、産後の妻は、身體の回復するまで仕事場の方を構はぬことにして、子供の世話と老母の看病とを引き受けてゐたが、老母はまた嫁が嫌ひになつたやうで、優しい言葉をかけるやうなこともなくなつた。

晝夜の大部分を眠つて居る初男には手のかゝることが尠くて、後が出来た爲めに意地／＼して泣いてばかりゐるお花の方に世話の焼ける場合が多かつた。乳母の乳房を棄て、動もすれば母の乳房に行きたがるお花は、家中での憎まれものになつた。老母も一番にお花を嫌つて、孫の頭を擲ると云ふことを此頃始めて経験した。

「花ちゃんには可哀さうですれ、後が出来ると皆な斯うですもの、無理はありませんわ。初めから私のお乳ばかり上げとけば好かつたんですが、私が律ちゃんを見て貴方に花ちゃんを預けたりなんかしたものですから、何時までも阿母さんのお乳を覚えてゐて、こんな泣蟲になつたのですれ」

乳母だけはお花に同情して、妻が初男に乳を吞してゐるのを、しげ／＼と見ながら斯う云つた。
「私は十七日に死ぬ。屹度死ぬ、嘘やない」

老母はこれより外の言葉を多く云はなかつた。

三十七

時候は追々好くなつて來たが、老母の病氣は段々悪くなつた。
公園の櫻が咲いて散つた。

「私は十七日に死ぬ、屹度死ぬ。嘘やない」

其の十七日は近づいた。

「私も最う後三日の生命や、この世の思出に鯛の刺身と山の芋の煮たので御飯を喰べて、其の後に羊羹で玉露を飲みたいな」

老母は及びも付かぬ空想を語るやうな口調で斯う云つて、諦めても諦め切れぬ凄しい顔をした。

其の日は丁ど復活祭に當つてゐたので、近頃ますます／＼教を疑ひ始めた福松も、平常とは異つた感情の動くのを覺えた。御堂が遠方なので、朝々の彌撒聖祭には出たことが尠く、四大祭の参詣すら思ふに任せなかつたが、斷食や物齋の續いた後に行はるゝ御復活祭だけは、四大祭の中で一番多く参詣した。花や幡で飾り立つて御堂の内へ、彌撒聖祭の時よりはズツと綺麗な服を着けた宣教師が、長い祈禱をする状や、嬉しさうにして集つて來た信者の光輝に充ちた顔を思ひ出すと、春日のおん祭には仕事を休みながらこの大事な日に斯うして饅頭を刻んでゐる自分の業が空怖ろしくもなつて來た。
「あんなに喰べたがつてゐるのやよつて、欲しがるものを皆宛てがうて見やうやないか」

福松が斯う云つて妻に相談すると、妻は稍暫く考へて、

「毒になるといきまへんな……毒が薬になるちうこともおますけど」

と云つたが、強くは反對することもなくて、老母の望むだけのものを調へ、正午の食事の時にそれを持ち出した。

「さア御馳走が出来ました。ドツサリお喫りなされ」

斯う云つて妻が元氣よく、病人の枕元に其の幾十年來喰べ馴れて來た膳を据ゑた時は、薄くなつた髪を坊主枕に埋めて、老母はすやくと眠つてゐたが、衰へや瘦せが起きてゐる時よりも寐顔によく見られた。妻はホロリとして暫く其の痛まし氣な容子に見入りつゝ、

「御飯だすぜ、今日は貴方のお好きなものばかりや」

と稍大きな聲で云ふと、弛んだ臉を一寸開けたが、直ぐにまたそれを閉ぢて眠らうとした。

「お米の御飯も持つて來ましたぜ、山の芋も、鯛も……」

老母はそれを聞くとパツチリ眼を開いて、枕元を見ながらドツコイシヨと、嫁に扶けられて身體を起したが、暫らくは膳の上と嫁の顔とを見比べるやうにして、容易に箸を取らうとはしなかつた。

毒なものを喰べさして私を殺す氣ではないか——

こんなことを考へてもぬるやうに妻には見られた。

「私は十七日に死ぬのや、毒になつても構はん。この世の思ひ出や」

老母は決心した状態で、いきなり箸を擡んだ。けれども、長い間夢にばかり見てゐた米の飯も、芋の煮たのも、飯櫃から盗んで喰べた時や、隠れて買喰をした時ほどの味はないやうであつた。妻は不思議に思ひながら、喰べ残しの多い膳を下げた。

醫者の嚴禁を犯して、病人に澱粉質のものを與へたことを、何かの罪滅しをしたやうに思つてゐた福松は、妻から、老母が生命に代へても欲しがつたものさへ多く喰べ得なかつたことを聞いて、さまさまの意味にそれを考へ、「私は十七日に死ぬ……」と云ふ病人の此頃の口辭を自分の口の中で云つてみた。

三十八

十七日は來た。福松は一種の恐怖を抱いてこの日を迎へた。前の晩の寢る時に懷中時計の針を正して置いて、それを枕元に置きながら、眼を擦り……時刻ばかりを氣にしたが、十二時を過ぎた折に、

「十七日！」

と、小さな聲で云つて隣りの蒲團を見ると、妻は初男の圓い頭を抱へ込むやうにして、他愛もなく熟睡してゐた。近頃父親の蒲團に寢て男の乳を探りながら眠りに入るやうになつたお律は、片足を疊の上に投げ出して細い肘を立てた。福松は耳を欬て、母家の模様を窺はふとしたが、手近の懷中時計の音がキチ／＼と耳に響くだけで、靜かな夜はいよ／＼靜かであつた。

眼がだん／＼冴えて來るので、ランプのシンを捻ぢ上げて何かの雜誌でも見やうとすると、妻や子の寢姿が一際明るく映し出されて、去年から一昨年、一昨年から一昨々年と、過ぎ去つたことが、さまざまに顧みられた。

讀み古した宗教雜誌の幾頁かを復習するやうに讀んでゐる中に、母家の時計は二時を打つて、福松は雜誌を手にしたまゝ漸く眠りに墜ちた。

朝、眼の覺めたのが五時、物に驚いた狀であたりを見ると、妻も子もまだ寢てゐた、急いで起きて母家に行くと、其處も夜中の光景で、老母の枕元には行燈の光がぼんやりとして、夜の看病を頼んである乳母は病人に背を向けてお花と一所によく眠つてゐた。足音を偷むやうにして、病人の頭の傍に立つと、病人は二つの眼をギョロリとさして、下から睨みあげる風にしたので、福松はギョツとして其のまゝ店の間へ職人どもを起しに行つた。

井戸端で顔を洗つて、裏の物置へ竹丸を起しに行くと、朝寢坊の竹丸が今朝は最う起き出で、朝露の滴る枇杷の樹の下で體操の眞似をしてゐた。

「昨夜は蚤で寢られなんだ……祖母は十七日に死ぬと云うてたが、今日眞個に死ぬのでせうか、嘘ですな」

竹丸は福松の傍へ来て斯う云ひながら、白い腕を捲つて、蚤に喰はれた赤い斑紋の三つ四つ並んでゐるのを撫でた。

「此處は最う蚤が出るかな。あんまり蚤が多いやうなら、今夜から彼方の八疊へでも来て寢ると可え」福松は荒壁の傾きかゝつた物置の外形をつくくくと見やつて、其の中で甥を起臥させることが、俄に殘酷であるやうに思はれて來た。

「今日はお前何處へも行かずに居ておくれ、祖母に若しものことがあると困るよつて」

福松はまた斯う云つて、竹丸の居ると云ふことが、今の場合に甚だ心強く、一廉の頼りになるやうに感じられた。

「十七日に死ぬなんて、そんなこと分れへんでせう。祖母は何故あんなことを云ふのですかなア」と竹丸は、祖母の生死と云ふやうなことを深くも考へてゐない風で、手を伸して枇杷の一葉を拗り、

それを噛んで青い汁を吐き出した。

「昔のえらい坊主なんぞは、よく自分の死ぬ日を前から云ひ當てたさうやが、それは自殺すると同じことで、或る日を決めて其の日に死なうと思ふと、無理にでも死なれるやうになるのやなア、始終座禪なぞをしてると、そんなことが出来るさうやし、病氣によるとさう云ふ精神が働くこともあると云ふから、それで私も祖母が「十七日〜」と云ふのを心配してるのや」

職人が起きて來て、大桶に水を汲み込む音が聞えた。

三十九

十七日は無事に過ぎた。老母は馬鈴薯が喰べたいと云ひ出して、その煮たのを食つた後は、平常よりも溫和しかつた。「死ぬ」と云ふことをこの日は一度も口へ出さずに、「十七日」と云ふものを忘れてゐるやうであつた。

横着な病人！

福松はこんなことを思つてみたが、まだ全く安心は出來ぬと考へて、絶えず容體に氣を付けつゝ、刃物なども成るだけ其の邊に置かぬことにした。夜になつてから、病人がヨロ〜と起き上つて臺所の方へ出たので、一同が「そらッ」と云ふ眼の色をして容子を見てゐると、頻りに戸棚を掻き探して何かの時に用ゐた縁鑿の溶いたのが深い皿の底に凝固つてゐたのを取り出し、暫くそれを見詰めて、ニヤリと氣味の悪い笑ひ方をした。

「そんなものを出して何にするんです」

福松が斯う云つて、引手繰るやうに其の皿を取り上げると、老母は少しも拒む風をせず、またニ

ヤリと笑つて、

「竹さん、お前の亡母は死ぬ一月ほど前に縁鑿を飲んだことがあつたな」

と、背後に立つてゐる竹丸の顔を振り返りながら云つた。竹丸はヒヤリとした思ひをして、長病で氣の狂れてゐた亡母が自殺を圖つて縁鑿の溶かしたのを飲んだ時の記憶を喚び起し、毒液を一口飲んで唇を青く染めた母が今一口飲まうとしてゐるところを父に見告められた折の騒ぎが、何處となく今夜の光景に似てゐるのを考へずにはゐられなかつた。

子と親とは同じ血が通うてゐる……氣が狂れる……自殺を圖る……縁鑿……

こんな思ひが、福松や妻や竹丸の胸の裡に黒潮のやうに流れた。縁鑿の皿と並べて戸棚の中に置いてある赤錆の付いた大きな饅飴庖丁を、福松は見付け出して、それを高い棚の上に抛りあげながら、

「こんなところに居ても仕様がな。彼力へ行きませう」

と老母を促した。老母は點頭いて、前のはだけた寢衣を引き摺り、一同に取り巻かれて病床に歸つたが、直ぐまた起き上つて便所へ行つた。

「便器で取つて貰うたら可えてせうになア」

「便器は大嫌ひや。私は若い時産をしても便器にかゝつたことはなかつた。大嫌ひや」

今まで幾度も云つたことが、福松と老母との間に繰り返された。

こんなことで、兎に角十七日は無事に過ぎた。

十八日。——この日は正午少し前に、長い間取引してゐる粉商の手代が来て、福松と値段の應對をしてゐたが、

「それでは約束が違う、私の方は少しぐらゐのことを何う斯う云ふのやないが、嘘を吐くのは嫌ひや

よつてな、正直にやつて貰ひませう」

斯う云つて福松の氣短な高聲が聞え、續いて、

「決して嘘を吐くのやない。帳面が證據だす」

「自分の勝手に記けた帳面が證據になるかい。祖母を呼んで来ると分るぞ」

なぞと叫ぶ調子がだん／＼只ならぬ模様になつて来たので、老母は聞き兼ねて店の間へ這つて出たが、顔を眞赤にして仕事着の腕を扼してゐる福松の背後へ廻ると、傍にあつた粉屋の秤の大きな鐘を重さうに窃と引き寄せ、何うかすると其の鐘を執つて相手に擲りかゝりさうな、半狂氣の福松の手の届かぬところに置いた。

四十

「この子は短氣で、怒ると親でも擲るのは貴方もよく知つてゐて、わざ／＼逆ひなはるのやなア」

老母は嘆れた聲で斯う云つて、粉商の手代を窘めやうとした。

「別に逆ふたのではありませんが、考へ違ひをしてお出でになるものですよつて……」

手代はお世辭笑ひをして、眼の前に福松の大きな身體が今にも飛びかゝらうとする勢ひを見せて突ツ立つてゐるのを、木像が何そのやうに、全て頓著しないで、専ら老母ばかりを相手にする風をしてゐる／＼と病氣見舞の言葉などを並べた末に、

「宜しうござります。外様とは違ひますよつて、今度だけは特別にして前の通りに願うて置きませう」と今自分に運び込んで、仕事場に積み上げた十袋ほどの饅飴粉を見やりながら、腰を探つて煙草入を抜き取つた。

「まだそんなこと……吐かしゃがる……決つてるものを特別にするも糞もない……もう要らん……持つて歸れ……貴様んどこばかりで……」

福松の吃り／＼云つて詰め寄るのを、老母は病體の苦しさを忍びつゝ押し宥めて、手代には「早く歸れ」と目配せした。其處へ妻も来て夫と手代との間を隔てつゝ、手代を立ち去らした。

「彼奴擲り倒してやらうかと思つた」

福松は今戸外へ行く手代の後姿に残りの怒聲を浴びせて、老母と妻との顔を見比べながら、太い兩手を持ちあぐむやうな状をしたが、直ぐ伏目になり、額に皺を寄せたまゝ土間の眞中に突つ立つて、深く考へに沈んだ。

「粉商が悪いのだすなア」

妻は子供でも慰めるやうに云つて、仕入帳や秤を片付けた。老母は先刻自分の手で錢箱の横に隠した秤の錘を引き出し、苦笑をしてそれを妻の方へ押しやつた。

「こんなもので擲つたら頭が碎けて仕舞ひますがな、無茶な人や」

妻が重さうに錘の紐を提げて振り試みてゐるのを見て、福松も苦笑ひしつゝ、

「私は彼奴の云ふことが間違つてるのも氣に喰はなんだが、それよりも彼奴が「エ、エ、」と云ふて、禿げかゝつた額を私の眼の前に突き出して、私の云ふことを問ひ返へすので、ツイ其の額をコッインと喰はしてやりたうなつてな……私は何んな話をしてゐても、相手があんまり顔を近くへ突き出して來ると、コッインと一つやりたくなるのや」

と云つて、額の肉をピリ／＼と動かした。

「お前の亡父つあんが矢張そんなことを云うたが、此の家には何うしても少し發狂筋が混つてゐるな

……まアあんまり年寄の病人に氣を揉まさんやうにしておくれ」

老母は顔を顰めて、柱に捉りながら立ち上り、縁鑿の入つてゐる戸棚の方へ行きかゝつたので、福松と妻とは顔を見合はして其の方へ隨いて行つた。

「水が一杯飲みたい」

斯う云つて老母が湯呑の入つてゐる戸棚の抽斗に手を掛けたと思ふと、ドシンと音がして板の間に倒れた。

「危険ッ」

と、福松は先づ駆け寄つて扶け起さうとした。妻は錘を棄て、夫に力を合せた。只ならぬ様子に、職人ども、皆其處に集つた。

四十一

「何うしたんです」

「氣を確かに持ちなはれ……皆此處に居ますッせ」

斯う云つて福松と妻とは、老母に取り付いたが、返事はなかつた。

「おばーあん……おばーあん」

福松が老母の耳朵に口を寄せて呼んでみると、微かに眼を開いて、唇をピク／＼と動かした。

若い職人は醫者を呼ぶべく表へ走つた。竹丸は裏から、乳母は座敷から、周章てた状で出て來た。一家の突然の動搖に驚いてか、お花は乳母に縋り付いて泣き出した。初男も母の背中から人形の笛のやうな啼聲を立てた。お律は焼團子を手にして、一同の動くのを不思議さうに見てゐた。

妻は背中の子を揺りながら、夫とともに老母を座敷の病床に運ぶことにかゝつた。福松が頭の方を妻が足の方を持つて静かに動き出した時は、「死體？」と云ふ念ひが一同の頭に働き始めた。

病床の枕元には、馬鈴薯の煮たのが三片ほど小皿に残つて老母を迎ふるやうに見えた。福松夫婦は其處に老母を安臥させた上、

「おばーあん……おばーあん」

「氣を確かを持ちなはれ……皆此處に居ますッせ」

と再び三たび呼んでみると、今度は稍大きく眼を開いて、唇をピク／＼さしながら、咽喉の奥で何か云つたやうであつたが、意味を聞き取ることは出来なかつた。福松は小ひさな聲で、

「筆……筆……筆を持つて来い」

と妻を促して、店の硯箱から平常老母が帳面を記けるのに使ひ馴れてゐた「狸毛小楷」を取り寄せ、十分に墨汁を含まして、巻紙とともに老母の手に握らさうとしたが、それはもとより悪な企てであつた。

「口で云ふことが出来んのなら、紙へ書いて見なはれ」

また耳朶へ口を寄せて福松が斯う叫んだけれど、そんな複雑な言葉を受け入れるだけの官能は最早缺けてゐた。

「氣を確かを持ちなはれ……皆此處に居ますッせ」

この言葉が幾度も／＼妻の口からお經のやうに繰り返へされた。

醫者の來た時には、微かに眼を開くことも、唇を動かすことも無くなつて、「人」は漸く「物」に化らうとしてゐた。醫者は仔細らしく方々を診察した後、

「腦溢血を起したものと見えます」

と云ひながら、一寸枕元の馬鈴薯に目を付けて、聴診器を納めた。

老母の顔に白布の覆はれたのは、醫者が歸つてから二時間ほど後であつた。福松はぼんやりと裏口から出て、枇杷の木の下に立ちつゝ、必ず到着すべきところに到着したと云ふやうな感じを浮べ、云ひ知れぬ心の淋しさに、溢れて流るゝ涙を止めることは出来なかつた。

「叔父さん叔父さん」

と呼ぶ竹丸の聲がだん／＼近いて來るので、福松は涙を收めて家へ入ると、大阪と多田とへ打つ電報の下書が出来てゐた。

夫婦と竹丸とは、各々膝の上に一人づゝの子を載せて老母の枕元に坐つたが、電報の次に何を何う云ふ風にすべきものか、容易に分らなかつた。福松は幾枚かの葉書を取り寄せ、先刻の「狸毛小楷」を力無げに揮つて、……老母儀長々病氣の處養生相叶はず……と夢のやうに書き出した。

近所の人々がぼつ／＼集つて來た。

四十二

眼を赤く泣き腫した妻が、近所の人の應對を一人で引き受けてゐた。印刷物を朗讀するやうな甲辭が人々の口から順々に繰り返へされた。今朝からの顛末——病人の眼を覺ました折りの容體、食事の模様、粉商の來た時の騒ぎ、戸棚の抽斗を開けやうとして卒倒したこと、病床へ運び込んでから物を云はふうする氣色のあつた有様——を一人／＼に語り聽かしてゐた妻は、二三時間の中に幾度かの練習を経て、話の段取から身振手振がなかく／＼巧みになつて來た。

逆さ屏風を立て廻らした中に、小机を据ゑ、其の上に冷水と新らしい狸毛小櫛とを備へて、老母の唇に水を塗るやうな支度は、近所の人の注意で初めて調うた。

「末期に水はもつと早うするものだったのに……南無阿彌陀佛……」

饒舌で名高い大工の妻が斯う云つて、福松を最初に、妻や竹丸や、お律から、何も知らぬ蟲のやうな初男にまで手を添へて一々水を取らした時は、流石に哀みの空氣が室中に漂ふのを覺えた。それが濟むと福松は更に老母の頭のあたりに振りかけて、物に恐るゝやうな體で禱りをやつてみた。

主、願くは哀憐を垂れて頼もしき救ひの場へ此の僕を引き受け給へ。アーメン。

主、エノクとエリヤとを通常の死より救ひ給ひし如く、此の僕の靈魂を今救ひ給へ。アーメン。

洪水よりノエを救ひ給ひし如く……

カルデヤのウルよりアブラハムを救ひ給ひし如く……

エジプト人の王ファラオの手よりモイゼを救ひ給ひし如く、此の僕の靈魂を救ひ給へ。アーメン。

主よ、願くは彼が少かりし時の罪と迷ひの過とを忘れ、却つて大いなる御哀憐を以て主の輝ける榮光の中に彼を認め給へ。天を彼れの爲めに開き、天使をして彼れと共に喜ばしめ給へ。主よ、此の僕を御國に受け取り給へ……

主よ、世に向ひては死したれども、主に活きん爲め此の靈魂を主に托せ奉る、彼れが肉身の弱き

に因りて犯したる罪を大いなる御哀憐もて救し給はんことを我等の主基督に由りて願ひ奉る。アーメン。

福松は老母が息のある中に少しでも教を信じて告悔をしたものと見て、天主教式の葬儀をしようかとも先刻から思つてゐたが、自分の信仰さへ衰へて來たのに、今更教會へそれを申し込んで行くのも厭やであるから、そんな物好きなきことは見合せにしようなどと考へ直しつゝ、老母の生きてゐる中には、朝夕や食前食後祈禱さへ思ふに任せなかつたのが、死んで五官の働きの止まつたのに乗じて、大びらで臨終の連禱や、靈魂肉身を離れて後の祈禱やをすることの出来るのを、一種の勝利のやうに、心地よく感じられた。けれどもまた思つてみると、信仰を隠したり、制令を守らなかつたり勝手氣儘の我流信教をして來た自分の今までの行ひが空恐ろしくもなつて、

宗教を弄ぶ者！

と云ふ心に甚だしく責め立てられるのを覺えたので、そこへ祈禱を止めて慙らう状態で側の人の顔を見た。

四十三

明る日の正午頃までには、遠縁の親類や近在の知邊までが大抵集つて來て、商賣を休んだ菊屋の家中は、捏ね返へすやうにごたくとした。入口に掛けた簾には、福松の四角張つた字で「忌中」と書いた紙が、暖い晩春の風にひら／＼と動いて見えた。

多くの手傳人の中に權力争ひが始まつて、大工の妻と三味線の師匠とは口を利がなくなつた。人力

車夫の女房が子供を二人も連れて来て三度の食事をさせると云ふ事や、指物屋の婆さんがお茶を自宅へ持つて歸ると云ふことや、そんな風の互ひに中傷し合ふやうな告口を聞いて、仲裁したり、當り障りのないことを云つたりするのが、昨日から一家の主婦になつた福松の妻には、五月蠅くて難かしい役目であつた。

土地の風習に通ぜぬ乳母は、云ふこと爲ることを一々手傳の女等に笑はれ、斥けられて、「出しや張りの江戸ッ兒……五月の鯉の吹き流し口大きくて腸はなし」などと罵られたのを憤り、子供の守をするだけで他の用には少しも構はず、苦い顔をして手傳の女等の爲ることを見てゐた。それをば陸へ廻つて慰めるのもまた妻の仕事の一つであつた。

お律とお花とは平常に異つた賑かさを喜ぶ状態で、例よりは泣かずに能く遊んで、手のかゝることが尠なかつた。

「祖母何處へ……」

「寢んね」

手傳人とお律との間には、こんな問答が度々あつた。其の度毎にお律はチヨコ／＼走りに逆さ屏風の中を覗きに行つて、枕邊の小机の上の燈明と供物とを不思議さうに眺めた。

離座敷では親類たちが、福松とお信とを中心にして、葬式の評議を始めてゐた。多田の香層からは法用で來られぬと云ふ電報が來たので、父の名代として竹丸が其の席に列なつた。

「私は一切宗教の儀式に依らず、坊主も神主も無しに行らうと思ひます」

福松は斯う云ひ出して、近眼鏡を掛けた眼をクシヤ／＼とさした。一座は皆黙つて俯ぶいてゐたが、「それも薩張りして好いな」

と云つたお信の言葉に、二三人は呆れた顔を上げてニツと笑つた。

「ヤツならヤツでしたら可えやないか。素人ばかりの葬式ちうもんは聞いたことがないな」

「新教なら教會へ頼みに行く」と直ぐして呉れますが、舊教では本人が生きてる中に少しでも教へを信じて罪の懺悔をして置かん可けませんのです……けども佛式でやることは皆さんが何と仰やつても私は嫌ひですし、神道も厭ですから、何うしても坊主や神主のない葬式をするより仕方がありません」

福松は一句／＼に力を込めて斯う云ひ張つた。

「ズツと前、まだ奈良縣の出來ん時、大阪府令で、神官僧侶に依らぬ葬式は成らん、若し犯したものは罰金に處すると云ふことがあつたが、あの規則がまだ残つてゐまいかなア」

こんなことを云ひ出したものがあつたので、一座は暫く小首を傾けたが、福松は、

「罰金を取られても構はん……坊主のお布施を出すと思へば濟むぢやありませんか。眞逆罰金を取られた上に、葬式を行き直せと云はれるのではありますまい」と平氣な顔をして云ひ放つた。

四十四

福松の強情は親類たちも皆心得てゐるので、強くは逆はずに、大きな駄々子の云ふことを通させな。けれども、坊主も神主もない葬式と云ふものが、舊慣を重んずる此の土地では如何にも珍しく變な。長命はせんならんものですか、こんな妙なことにでも出くわしますよつて……」

「煙草盆の吐月峰のやうに、一節ある人間のすることは變つていきますな……何しよまア孫子の代までの話の種だす」

なぞと、蔭口を云ひ合つて笑つてゐた。

福松は勝負事にでも勝つた時のやうな気分になつて、竹丸を相手に新工夫の葬式の準備や順序を研究した。提燈や旗や花の数を多くして行列を賑かにすること、焼香をしたり、玉串を獻げたりする代りに水を濺ぎかけること、會葬者に出す膳部には魚類を使ふこと、香奠の返禮には蒲鉾を配ること。こんな次第をば、巴里コムミュンの委員が新政府の綱領を定めた時のやうな心になつて取り決めた。方々から来る供物の上包みに「御佛前」と書いてある「佛」の字を、福松は一々「靈」の字に書き改め、尙「御香料」と云ふ文字をも他の字に代へやうとして考へてゐたが、適當な思ひ付きがなかつたので、これは其のまゝにして置いた。

二十日は葬式の日であつた。十八日から十九日、其のごたくした間を、福松の一家は長かつたやうにも短かつたやうにも思つた。葬式の日、早朝に蓮華院の高淳老尼が新しい法衣に朴の木蘭の日和下駄の下したてを穿いて出て来たが、導師の無い葬式をするよと云ふのを聞くと、驚いた顔をして、「寺子朋輩も到頭私一人になりました。この次は厭やでも應でも私や……息ある中に一目會ひたかつたなア」

と云ひながら、佛壇も開けてない葬家の状を不思議さうに見廻して、尼公からの下され物や自分の供物の置場所困つてゐた。

老尼はやがて幼な友達の遺骸の枕邊に座を構へて、自分だけの寂しい回向をした。讀經の聲が離座敷に聞えると、其處に居た親類たちが一人立ち二人立ち、果ては一同が老尼の後や横に畏まつて、有

り難さうに首を垂れた。骨立つた白い手に繰る水晶の珠數が燈明の光を映して、幽遠の趣きを添へた。「葬式にお經は付き物だすな……これがないと砂糖氣のない牡丹餅を喰ふやうで……」

讀經の濟んでから、こんな話が親類たちの間に語られた。福松は苦い顔をして次の間に控へてゐた。午後一時過ぎ、黒塗りの駕籠を真中にした行列は、市を南から北へ突き切つて、雜木林に圍まれた丘の上の墓場へと辿つた。老尼は加はらずに人車で墓へ先着することにして。法衣の人または衣冠の人の一人をも混へず、鉦一つ叩かぬ葬式は、出るにも歩くにも拍子抜けがして工合が悪かつた。市の人は何事かを私語合つて、この妙な式の葬送を見てゐた。

大きな佛堂の後を通つて、一二丁行つたところを左の方へ曲ると、直ぐ田圃路になつて、疎な雜木林の若葉してゐるのが見えた。會葬者は此處から一列になつて、袴の裙を氣にしながら歩いた。

丘の上の石塔と石塔との間へ井戸のやうに深く掘つた穴の前に棺を据ゑた時は、鉦の音も引導も讀經も祭詞もないのがいよゝ物足りなかつた。棺は無雜作に穴へ吊り下されて、ねば／＼とした赤土が、人夫どもの鍬でソソグザイな懸聲と／＼に投げ込まれた。

四十五

新らしく立てられた墓標を背にして、西の方を眺めると、市の一角が若葉の中に見え隠れして、寺の白壁と監獄らしい赤煉瓦とは、一際鮮やかに浮き出したやうであつた。煙も見えず物の音もなく、どんよりとした晩春の日影の下に市は眠つてゐた。生駒山まで續く青い／＼麥畑の中には、黄色い菜種の花も混つて美しかった。

「こんな景色の佳いとこに居られるのなら、死んだ方が可えかも知れんなア」

「遠慮は要らん、可えと思ふのなら直ぐにでも死になはれ、序に會葬を片付けて仕舞ふから」

「景色が佳うても腹は膨れん。この墓場を皆な取り拂うて料理屋でも始めると可えな」

「そりや面白い思付きや、△△さん一つ市會の方でやつて見たら何うだす」

古い石塔の上に帽子を置いて額を拭いてゐる人や、腰提げの煙草入を抜き取つて煙管に煙草を詰めながら火を求めに歩いてゐる人や、巻煙草を銜えて燐寸を幾本も無駄にしてゐる人や、多くの會葬者はそれ／＼足場の好いところに立つたり蹲踞んだりして、無駄話に時を移した。唯一人の洋服姿の△△と云ふ市會議員は、墨紗を巻いた絹帽を見せびらかしつゝ、話の中心に推されてゐた。

何時を終りとも分らぬ變な葬式は、棺が穴に下された時、早や袴を脱いでそれを風呂敷に包んだのをぶら／＼振りながら歸つて行つた會葬者もあつたが、多くは新しい墓標の前に遺族が拜禮を濟ませる折まで残つてゐた。墓標の周圍にはいろ／＼の花や白張提燈が順序も意匠もなく、ごちや／＼と立て並べられた。

會葬者に挨拶を濟ました福松は、子供を連れて妻や乳母や、竹丸やお信や、他の親類たちといもに新墓の前に立つて、うね／＼とした細道を下りて行く多くの人の紋服の後姿を見送つてゐたが、

「私等もほつ／＼歸らうか、氣の毒やが老母は今日から一人ぼっちゃ」

とお信の顔を見て、ほろりとした容子になつた。

「これからの葬式はこれに限るな。私も死んだら斯うして貰ふ。坊さんが來て寢言を云ふ芝居みたいな葬式は厭やないかなア」

お信は斯う云つて、元氣よく傍の水桶を引き寄せ、残つてゐた水はスツカリ墓標の上から注ぎかけた。

「水が好きでしたよつて、これから墓参りの度にドツサリ水を持つて來て上げまへうな」

妻は蝙蝠傘の先きで赤土の上へ「水」といふ字を幾つも書きながら、首を捻ぢ向けて水に濡れた墓標の墨の色を見た。乳母は墓前の花を欲しがらるお律を賺し兼ねて、

「あの花々祖母ちゃん、あれ取ると祖母ちゃんめんめ」

と幾度も同じことを云つてゐたが、お律は、

「祖母、家てれんれ」

と承知せずに、到頭泣き出したので、困り切つた乳母は泣く子を負うたまゝ、お花を抱いた竹丸とともに駆け出すやうにして歸途に就いた。それを機會に一同も新墓に別れを告げて若葉の丘を下りた。

多くは無言で歩いて家に歸り着くと、留守番をしてゐた大工の妻が、心得てゐたと云ふ顔をして一同の身體に鹽を撒いた。親類達はそ／＼に仕度をして、其の日の中に逃げるやうな鹽梅で歸り去つた。

急に寂しくなつて日は暮れた。福松の頭には、行末のことがいろ／＼に考へられた。

四十六

「四十九日も濟んだら、いよく大阪へ移るのやなア。老母が居やはらんと此地で商賣するのがだん／＼難かしくなるやらう」

斯う云つてお信は、老母の病床のあつた八疊のランプの下で、食後の煙草を可味さうに幾服も續けて吸つた。

「四十九日ツて……、佛式でも何でもないのでそんなものはありやへん。移らうと思へば、明日に

でも移られるやないか」

福松は帳簿笥や用笥笥や、今まで自分の権力に及ばなかつたところを無暗に引き開けて、中のものを掻き探しながら、無雑作な返事をした。

「けれども四十九日の間は、魂魄が家の棟を離れんと云ふよつて、まア二月ぐらゐはこのまゝにして居た方が可え。其の間に私が大阪の用意をしとくよつてな」

お信は莞爾々々として、弟の性急に探し物をする後付きを見てゐた。福松は老母が婚禮の時の祝ひにでも貰つたらしい大きな扇子箱の蓋を開け、古手紙の束にしたのを取り出して、昔風の手蹟の讀みにくいのに眉を顰めてゐたが、其の中から、老母が旅先の亡父に送つたらしい長い長い手紙を發見して、拾ひ讀みに讀みながら、半分ほどのところで、プツと噴き出して其のまゝ背後のお信に渡した。

「老母にもこんな時があつたのやなア。堅苦しいことばかり云うてはつたけど……」

眼をクシヤ／＼さしつゝ俯いて、墨の色の乾き切つた長い手紙の、今では何處の紙屋にも無さうな天地を赤と青とに染めた半切れを披けて、「一筆しめしあげまぬらせ候借とや」から「あら／＼かしく」までを漸くに讀み終つたお信は、感心したやうな風をして、また初めから讀み返へした。

「其の返事は無いか知らん」

と福松は別の抽斗から、古い帳面や貸金證文のやうなものを出して見た。

「この手紙は婚禮をした翌年のらしいな。老母は十七で來たのやと云うたよつて、十八の時の手と見える。お濱より二つ下やが、お濱は兎てもこれだけ書けん。昔の人は自慢するだけあつて何でも能う出來たものと見える。今の學校なんぞ詰らんやないか、お濱でもあれで高等を卒業して桃山の女學校へ一年半もやつたのやが、それであれや。老母はあの蓮華院の尼さん等と一所に一年ほど寺子屋へ

通ふたやけやさうなが、手でも文句でも十八の娘にしては立派なものやないか、年寄つてから却つて手が落ちたなア」

お信は長い手紙を巻き收めながら、獨言のやうに云つた。

「老母にも十八があつたかと思ふと可笑しいな、何うやら美人やつたらうか」

「若い時は瘦せてたちうことよつて、醜うはなかつたやらう。今のお濱より美かつたかも知れんな」

「それで親爺がごツそりまゐつたんやなア、ハア、ハア、」

姉弟は親し氣にこんなことを云ひ合ひつゝ、全て顔を知らぬ亡父と今日土に入つた老母との、若かつた折のことや、自分たちの生るゝに至つたまでの由來をさまざまに想うてみた。

「老母の大切にしていたものが出て來た」

と云つて、福松が古ぼけた袱紗に包んだ小ひさな巻物を出したのを、お信は煙管で引き寄せて見た。

それは何々之命を最初に書いた菊屋の系圖で、正しく引つ張つた朱線を辿つて來ると、「命」から福松の父の何兵衛の難かしい名乗を書いたところまでの間には、高位大官の人の名が徒に多かつた。

四十七

「市子の口を寄せて見やうかなア」

福松は帳簿笥の金の入つてゐる抽斗の錠前へ、老母の臨終の後に其の蒲團の下から出た一括の錠を一つ宛、あれかこれかと當があつて見ながら斯う云つた。其の錠のガチャ／＼と鳴る下には、古ぼけた赤い小巾着の手擦れのしたのがアラアラ揺いてゐた。

「お前にも似合んことを云ふのやなあ、市子の口なんぞ好い加減な嘘ばかり吐きよるのやないか。口

から出まかせを哀れな調子で喋舌つてから、急に正氣になつた風をして、「何うです能う合ひましたか」なんて、阿呆らしやないか」

と云ひつゝ、お信は系圖の巻物を元の通りに巻き納めて、一寸頂く眞似をした。

「これを見て斯うせんと、老母が勿體ないちうて能う怒つたな、ホ、ホ、」

「世間のことは何んなものでも疑へば疑へるし、信ずれば信じられるのや。私等が亡父と老母の中に出来た姉弟やと云ふことでも、さう信じてるさかい良えやうなもの、生れた時は知らんのやから、疑ひ出したら仕様がないやないかなア。……極端にたとへて見るとまアそんなものやよつて、自分が此處に斯うして居ると云ふことでも疑へば疑はれるので、疑うてると實際がない。さうやから市子の口でも、てんで馬鹿にしてかゝれば阿呆らしうて聽いておられんが、物はためしや。……遺言をする間もなく頓死したのやよつて、老母は定めて残念やつたらう。市子の口を寄せたら、是非とも聽いて置かんならんことが聽かれへんかなア」

福松は抽斗の中の紙幣の束を半ば手探りで數へて、元の通りにヒシンと錠を下した。

「床の下に千兩箱でも埋めてあつて、それが市古の口で分つたら、うまいなア」

とお信は笑つて取り合はず、目を据ゑて弟の手の鍵を見詰めた。店の間では、いろいろ御馳走になりまして……また御用がござりましたら……」などと、近所から手傳に來た人が一人／＼妻に挨拶して歸つて行くのを。妻が「お使ひ立て申しまして……」と、謝辭を云つて送り出してゐるのが聞えた。

他人が皆歸つて仕舞つて、菊屋の家は全く平常の狀に復つた。老母の居ないと云ふことが、人々の頭に始めて染々と考へられた。

「何やら忘れ物でもしたやうだな」

若い職人は蓮を敷いた仕事場に腰をかけて、煙草を吸ひながら斯う云つた。

「今夜は皆一つ所に集つて寢やうやないか……眠くなるまでは一同で面白い話でもするのやなア」と福松は家中の人を入疊のランプの下に呼び寄せた。老母の生きてゐる中は、店の間の數居から一足も内へ踏み込む事を許されなかつた職人ども、今夜は入疊の次ぎの四疊半に竝んで畏まつて、天井から壁、壁から戸棚と、キヨロ／＼見廻した。

「家の用が少し片付いたら、私は西京見物から、播州巡りをして、歸りに大阪へ寄つて芝居を観て來うと思つてゐる」

福松は斯う云つて、寂しい笑ひを浮べた。

「老母が居やはらんよつて、何處へ行くのもお前の勝手やが、私は見物と云ふことが嫌ひでな。行かうと思へば何處へでも行かれるけど、知らん土地を見ても一向詰らんもんや」とお信は吐き出すやうに云つた。姉弟の意見はまた相反した。

「一昨年あたりは、老母を見送つたら思ふ存分ヤソを信じる、と云うてはつたがヤソより見物の方が先きですか」

妻の言葉に、一座は皆笑ひ顔をした。

四十八

市子の口を寄せることは、一同が反對で止めになつた。市子が詰らんことを喋舌つて、家中の仲違ひをさせるやうなことがあつてはならん」と云つたお信の言葉には、福松も例のやうに我意を張るこゝ

とは出来なかつた。お信はいろ／＼と家の内外のことに氣を付けて大阪に歸つた。

二三日、三四日、五六日と經つ中に、福松は妻の容子の何處となく變つて来て、元氣の好くなつたの意識せずには居られなかつた。黙つて仕事場へ出て、用があれば低い切口上で物を云つて、子供を慰す時より外には滅多に笑ひ顔をしたことになかつた女が、此頃では朝から輕躁いでゐる風に見えることも多く、顔に血の氣が増して来て、放たれたる女性と云ふやうな趣きが、折に觸れてよく分つた。夜息む時でも何者にか牽制されて縮まつてゐたやうなのが、樂々と足踏み伸して眠る形が現はれた。

「思ひ思つて拵へといたお菜やのに、喰べはらんのか、薄情な人やなア」

食事の時に妻の口から、こんな遠慮のない、親し氣を聴くのは、老母の生きてゐる中にはないことであつた。けれども、人々の間に老母の逸事の語り合はるゝことのある度に、妻が毎も眼に涙を一杯溜めるのを見ると、福松は、其處に一つの矛盾と衝突と、それから女の涙と舞臺に於ける俳優の動作とを思つた。

妻の方ではまた福松の云ふことや爲ることが、急に優しくなつて来て、前のやうに無理な癩癩なぞを起すことの尠くなつたのを喜びながら、籠を出た小鳥の勢ひの夫の上にあるのを見てゐた。

夫婦は互ひに其の心持と素振との變化を見合つて、幾日かを過した。

商賣は相變らず續けてゐたが、職人に任した限りで、福松の仕事場に出る事はなくなつた。妻だけは前の通り、茹前をやつたけれど、身體の疲れることや股の凝ることが尠なくなつたと云つてゐた。

夏の初めに福松は西京見物に立つた。先づ汽車を宇治に下りて、茶島に沿うた明るい、繪にあるやうな路を黄檗の山門前に辿り、色の褪めて赤毛氈の茶店に腰を下して、玉ラムネを飲みながら、幽遠

な寺の狀を眺めた。

山門を入ると、右の方に食堂と云ふものがあつた。扉が少し開いてゐたので、それを押して冷かな三和土の上に立つと、中央に長く卓を据ゑて、十幾人前の食器が一人分毎に四角な白木綿で掩はれてある外には、何物もなかつた。試に白木綿の端を撮んで捲り上げると、茶碗が一つに胡麻鹽の入つた猪口が一つ。これで食慾を充し、養分を取つてゐる人の身を、福松はつく／＼と考へた。

食堂の閑寂を破つて、何處よりか十三四の色の白い雜僧が現はれ、無言のまゝ手を振つて「立去れ」と云ふ意味を見せた。

「此處へ入つたは悪いんですか」

「勿論」

簡単な只一言を浴せて、大きな男を逐ひ出した雜僧の沈着切つた風に、福松は自力宗の妙味を思ひつゝ、「人は皆他人の體稟種で角力を取るのが好きと見えて、宗教も他人でない人と人氣がない。クスリト教も自力の舊教は流行らずに新教が繁昌するなア。聖靈の能力なんぞと云うても、氣で氣を養ふ斷念教や。兎角宗教はこんなものか」

口の中で斯う云つて、淋しい山門を出た。

四十九

宇治橋の袂の家で晝飯を食へた時は、生れてからまだ知らぬ身體の寛ぎを覺えた。何日までに歸らなければならん、歸つて仕事着に身を固めなければならん、と云ふ懸念のなくなつた福松は、食後の爪楊子を使ひながら、新緑の宇治を恍惚と眺めた。

廢都といふ感じから既に四邊の暗さを覚えさせる奈良に比べて、宇治は夜のあけたやうに明るかつた。濁り氣のない物の色は、一つ／＼に鮮やかな艶を帯びて、強過ぎる光覺の腦を刺すに痛みを感じずるほどであつた。

暗黒に活きる蝙蝠の、光明を恐るゝ——繫縛に慣れたる奴隷の、解放に驚く——フリーソートの怖れ——

こんな趣きが、福松の上にも見られないではなかつた。清らかな風が仕立下しの單衣の襟を吹いて、水垢の匂ひは、昔この川に先陣を争うたと云ふ勇士の物語を懐はせた。

宇治から京都へ来て、三條小橋の宿屋に着いたのは、長い初夏の日の黄昏頃であつた。湯にも入り、飯も済んで、唯一人電燈の下に坐つた時は、寢るに早く、外へ出るのは太儀であつた。三十幾つになるまで知らなかつた旅と云ふものゝ味を初めて嘗めてみたやうな氣がするとも、亡き母のことが少しづつ、思ひ出されて來た。「可愛い子には旅をさせ」とよく云つた老母の聲色を、耳の傍で私語されるやうな感じも起つた。

二三日かゝつて洛中洛外の見物をしてゐる中にも、僅か十三里を距てた、眼と鼻との間のやうな土地をば、三十を越えるまで踏むことの出来なかつた自分の過去の自由のない生活を思ふことが先きに立つて、名所の印象は深く刻まれなかつた。

明日播州巡りに立たうといふ晩に宿屋の女中の持つて來た葉書は、三人の子を生ませるまでは二度より多くは見たことのない妻の手蹟で、「家のことは案じずに緩々見物なさくべく候……一兩日、のかた初男がよく笑ふやうに相成り申し候」といふやうな意味のことが書いてあつたが、福松はそれを見ると急に里心を起して、其の夜の汽車で

歸りたくなつたのを抑へつゝ、幾度か寢返へりして一夜を明し、朝の一番で駆け付けるやうに家へ歸つて、仕事にかゝつてから間もない妻や職人どもの意外に思ふ顔を見た。

往復二十六里を動いたに過ぎぬ三四日の旅も、福松には長い／＼間のことのやうに顧みられて、宇治や京都の話はなかく／＼盡きなかつた。

其の中に産土神の夏祭は來た。福松は老母の生きてゐる中に一度も行ふことの出来なかつた自分の魂名の聖人ドミニコの命日に今年だけは天下晴ての御馳走をしやうと思つてゐたので、朔日の夏祭を祝ふことを止めてそれを四日のドミニコの日を持ち越して、今は信仰の衰へた身にも、一種の勝利を誇る機會を得やうとした。

「聖ドミニコといふのは、六百年程前の聖人で、佛教の珠數のやうなコンタスといふものを始めたお方が、私は洗禮を受けた時にパテルからこの聖人のお名を魂名に命じて頂いたのやよつて、聖ドミニコの日には御馳走をせんならんや」

福松は斯う妻に説き聞かして、否應なしに産土神の夏祭に御馳走をする習慣を止め、其の日の朝早く平常よりは倍も嵩のある盤臺を景氣よく擔いで來た出入の魚屋をば、「家は四日が祭りぢや、今日は何も買はん」といつて驚かした。

宇治から京都へかけての短い旅、夏祭の廢止、ドミニコの命日の御馳走——福松には人生の勝利を思はしむることが多かつた。

五十

八月の中旬に奈良の店を閉ぢて、九月から大阪に移ることに決めた。職人は皆大阪へ連れて行つて

呉れと望んでゐたが、大阪での商賣に奈良の職人は役に立たんと、お信からの手紙にあつたので、残らず暇を出すことにしたけれど、福松はそれを言ひ渡し兼ねて、一日二日と過してゐた。いよいよ今日限り仕事を廢めると云ふ日になつても、暇を出されることを知らぬ職人どもは、皆大阪の人になり得ることを楽しんで立ち働いた。

福松はそれが苦勞の種になつて、暇を出された職人どもが饅頭を打つ棒を持つて自分に擲りかゝる夢を見たこともあつた。

賣子の始末やら、得意先きを同業者に分配することやらで忙しかつた福松は、また胸の裡に絶えず職人に暇を出すことが蟠つてゐた。仕事を廢めてからも、職人どもはゴロ／＼として大阪行きの日を待つた。近在の農家から雇はれて來てゐる二人は、大阪行きの日取の定まる時まで家に歸つて待つてゐると云ひながら、伊賀の方から來てゐる他の二人とも、木辻の彼女にも暫らくお別れや、彼女が泣くやらう」などと戯ふれて、尻を上げやうとはしなかつた。ズツクの鞆などを買つて來て大阪行の支度をしてゐるものもあつた。

「可哀さうやから連れて行てやらうか。他家の奉公人と違つて家のは長い間居るのやよつて……」福松は斯う云つて妻の意見を聽いてみた。

「大阪の姉はんはんに任してあるのやよつて、姉はんが可かんと云はるのを無理に連れて行ては悪おますやろ……一生置いてやると云ふ約束をしたのやなし、此方の都合で暇を出すのに遠慮が要るもんだすか。癩癩持ちの癖に氣の弱い人やなア」

「それぢやお前からさう云つて暇を出してお呉れ、給金の外に心付けを少し餘計與れば可えやらう。私は其の間何處ぞへ行て來る」

と云つて福松は、老母の大切にしておいた帳簿の鍵を妻に渡して、逃げるやうに家を出た。

博物館へ入つて、觀たくもない佛畫や唐鞍や刀劍の類を見歩いてゐる中に、大分時間が経つた、それから物産陳列所へ行つて、表に陵王、裏に奈良坂の繪のある團扇を二本買つて、最う大抵好からうと考へながら、福松はぶら／＼と自宅の方角に足を向けた。さうして、入口の溝を跨ぐとまた一寸躊躇はれたが、思ひ切つて障子を引き開け、大急ぎの體で奥座敷に入つた。

「何處を歩いて來たんだす……職人の方は何でもないやおまへんか、心付けを與つたので皆喜んでました。いづれ旦那にお目にかいてお禮を申しますと云うてました、一同で送別會とかをする事になつて出て行きました。今夜一晩泊つて、明日からそれ／＼身の振り方を付けるさうだす……お乳母はんにも送別會に來いと云うて、引ツ張るやら押すやらキヤツキヤ云うて騒いでましたが、到頭竹さんを連れて行きました」

妻は、膝の上に眠つてゐる初男の顔と夫の顔とを見比べるやうにして、笑ひながら云つた。

職人のことが片付いてから、家の處分がまた福松の頭を悩ました。地面も家も自分の所有であるだけに、其の始末も面倒であつた。表だけでも普通の町屋に造り變へて貸家札を貼るやうにする爲めに大工の入つたのは、八月の末であつた。

五六年の間毎日顔を見ないことになつた四人の職人の姿の一時に消失したこと、大工が來てガ／＼と音をさせること。福松の弱い神経は眼に耳に、さまざまの刺撃を受けた。

五十一

荷物は皆先きに大阪へ送つた。大阪の家は狭いからと云ふお信の注意によつて、是非入用のものだ

けを持つて行くことにして、其の他のものは、預けたり賣つたりした。

「こんな時、人に預けたものは、何うかすると與つたと同様になつて、後で取戻しに行きにくいなるものです」

と乳母が自分の経験を教へたので、廉くとも成るだけ賣つて金に代へることにしたが、大きな佛壇を何うしやうかと云ふことだけは容易に決らなかつた。

「こんなものを大阪三界まで擔いで行くのは人間の恥や……それに邪魔になつて仕様が有るまい」

福松は斯う云つた末に、この先祖傳來の寶物をも賣り拂つて金にすることを主張した。

「佛壇を賣るのは厭やだすな。彼家も最う佛壇を賣つたかと云はれるのは、家が潰れたと云はれるのと同じことだすよてな……賣るのなら三輪へ預けときまへう」

妻は塵埃だらけになつた黒塗りの大きな扉を見上げ見下しつゝ云つた。

「構うもんか、石塔を賣つた人さへ世間にはあると云ふことやもの、位牌だけ残して後のものを皆賣つて仕舞はふやないか」

こんなことを云つてゐる中にも、張板や石臼や大釜や、そんなものを譲り受けたいと望んで來る人があつたり、知合ひの道具屋が大きな萌黃の風呂敷を持つて出來たりするので、夫婦はまたそれらの應對にかいた。子供等は器物類の取り散かつた中を走り歩き、這ひ廻りしながら喜んで遊んだ。

「お子さん方は皆このお家のことを忘れて仕舞ひなさるのですれ……律ちやんだけは少しぐらゐ覺えてるでせうか……駄目でせうれ」

乳母は斯う云つて、拂塵の柄で茶の空罐を叩いてゐるお律を膝に抱き上げた。

「覺えてゐるもんか、大阪の姉は親爺の死んだ時四歳やつたやうなが、少しも覺えがないと云うてる

ものなア」

「家の孫は皆祖母の顔を見覺えずに大きくなるのだすなア」

夫婦は忙しい中で斯う云ふことを語り合つた。不用の器物は皆道具屋に評價をさした上で、それに幾らかの割増しをして望む人が引き取つたが、代價を受取つて品物を渡しながら、眼に馴れた道具の住み慣れた家から出て行くのを、夫婦は今更に惜しさうな顔をして見送つた。

「こんなものは若し要ることがあつたら、大阪で買へば可えぢやないか」

「また買ふほどなら持つて行きまへう」

斯う云ふことで、夫婦は屢々小競合をした。六枚ある張板を皆賣つて仕舞はうとするのと、半分だけ残して置かうとするのとで、暫く争つた後に乳母の仲裁で二枚だけ残して置くことになつたのを、妻がまだ後で窃と代價を返して今一枚を買主から取り戻した。

送るものは送り、預けるものは預け、賣るものは賣つたので、家の中がガランとして荒れ果てたやうに見えた。其處に福松は大欠伸をしながら仰向けに寝轉んだ。

佛壇だけがまだ片付かずに、元のまゝの黒い姿を様子の變つた室の中に見せてゐた。

この家に寝るのも今夜限りと云ふ時になつて、佛壇は此處に置いたなりに、家の差配を頼む人に保管して貰ふことに決つた。「若し中のものが紛失すると可きまへんよつて」と云つて、差配は佛壇の錠前を堅固なものに取り更へ、扉に大きな封印を附けた。

五十二

其の夜は福松も、妻もおそくまで寝なかつた。幾枚かの葉書を書き終つた福松が蚊帳の中に入つて

からも、妻は蚊に喰はれながら、子供にさせて行くもの、縫ひ上げを取つたり、附紐をつけたりしてゐて、隣家の時計の十二時を聞いた。福松は蚊帳を透して来るランプの光に、布目の縦横に映るお律と初男との顔を見たり、蚊帳の外に青く見える妻の顔を珍らしさうに眺めたりして、暫く蒲團の上に頬杖をつけてゐた。初男が時々眼を覺して啼き出すので、妻は度々蚊帳に入つたり出たりした。

「この家で寝るのも今夜だけや、能う寝工合を覺えて置かんならん」

夫婦はこんなことを幾度も云つた。店の間からは、乳母と竹丸との舂や齒ぎしりが寝苦しさうに聞えて、戸外には風がザッ／＼と吹いた。

「好い加減にしといて寝たら可えやらう、まだ明日もあるやないか。都合で午後の汽車にしても大事ない」

と屢々夫に促されて、一時の鳴るのを聞くと、妻は漸く針を收めた。それからまだ夫婦の話し聲は暫らく絶えなかつた。

翌る朝は一同早く起きた。子供の眼を覺さないやうに足音を偷んで、大人が皆手水を使ひに井戸端へ集つた時は、曙の雲の色が、露を帯びた引窓の硝子から薄く見えて、四邊はまだ薄暗かつた。ツイ此頃までは種々の物のゴタ／＼してゐた場所が、廣々と片付き切つて底の漏る古バケツの外には何もないのを、一同は今更のやうに見廻しながら、交々其の古バケツに水を汲んで、口を滌ぎ顔を洗つた。轆轤の音が耳に浸みるやうで、お喋舌の乳母さへ黙つて突ツ立つてゐた。

福松と竹丸とが今一度家の中を隅々まで見廻つて、壁に残つてゐる汽車の時間表や、柱曆の古いのや、老母の手蹟と見える何やらの覺書のやうなものを剥がして来て、それを揉み圓めながら店の間に來た時、妻と乳母とは落着かぬ状で上り口に腰をかけてゐた。

子供が皆眼を覺して「大阪の子に負けぬやうに」と母が前から選り出して置いて、昨夜おそくまでかゝつて着丈や何かを直した衣類を着せられてゐる中に、福松は蒲團や蚊帳を疊んで手早く荷造りを始めた。子供に次いで大人も皆他所行に着更へて、子供のと一所に拔殻を蒲團の荷の中に圓め込んだ。差配を頼んだ家から持つて來て呉れた簡単な朝飯を済ますと、竹丸は一足先きに荷物の人車と一所に停車場に向つた。夫婦は乳母とも子供を連れて、近所の家へ暇乞に廻つた。

「いろ／＼お世話になりました……何分後のところを宜しうお頼み申します」

「……お達者で……一年に一度、おん祭ぐらゐには是非ともお歸りなはれ」

「大阪へお越しになりましたら何うぞお寄りなはつとくれやす」

「お律ちゃん、お花ちゃん、左様なら。初坊は寝んれだすか」

なぞと云ふ言葉が果しもなく繰り返されて、女同士では各々涙を拭いてゐた。福松も妙に胸が迫つて來て、多く物を云ふに堪へなかつた。

見送りは辭退したけれども、停車場まで來た人が二十人ほどあつた。此處では女連も訝々した調子で笑ひ話をし合つた。子供は汽車を珍しがつて、向ふ側の線路を走る機關車を指さして喜んだ。

いよいよ汽車が動き出した時には、女連の眼にまた曇りが見えた。構内を離れる時まで窓から首を出してゐた妻は、大佛殿の家根と春日の森とに向つて恭しく拜禮をした。初秋の太陽はイラ／＼とした光を奈良の市に投げかけてゐた。

汽車がまだ物静かな大和路を走つてゐる時から、斯う云う言葉が度々一行の唇を漏れて、此頃少しづつ物を云ひ始めたお律の機嫌を取る種にした。龜の瀬隧道に入った時は、子供が皆怖がつて大人に嘸り付いたが、直ぐ明るくなつて鐵橋を渡ると、水田の色さへ異つてゐるやうに見えて、「もう河内に入つた」と福松は云つた。春日山に連なる山々の姿が見えなくなつた代りに、生駒の連山が奈良から見てゐたとは反對の側を近く眼の前に現はした。

汽車に飽いて來た子供の鼻を鳴らす度に、「ソラ暗い暗い、怖い怖い」と云つて先刻の隧道を思ひ出さしては威嚇してゐたが、八尾、平野を過ぎると、いよいよ大阪の烟突が見えて來た。

「大阪が見える！」

子供も大人も皆新しい心持になつた。

湊町のプラットフォームに入つた時、迎ひに出てゐたお信の笑顔を眞ッ先に見付けたのは竹丸であつた。預けた荷物は其のまゝにして置いて、一行はお信を先頭に、汗を拭き、ゾロ／＼と賑かな町の片陰を撰つて歩いた。

「お律ちゃん、お阪は毎日おん祭や」

斯う云つてお信は、福松に抱かれてゐるお律の顔を振り返つた。

「大阪の町は狭くて穴へ入つて行くやうな氣がしますね。東京は一寸した町でもこの三倍はありますよ。下谷の御成街道なんぞ、こんな町を十ぐらぬ並べて入れてもまだ餘りますね」

お花を負つた乳母は、兩側の店の物を忙しさうに見て行きながら云つた。

「またお乳母はんが東京を自分の物のやうに云はる」

啼き出しかけた初男に、胸を開けて乳首を含ませつゝ、妻は乳母の後から冷評した。

「僕も東京へ行きたいな……」

手廻りを入れた靴を持つ役目になつた竹丸は、一番後から詰らなさうな顔をして斯う云つた。

「家へ行ても何んやよつて、其の邊で晝御飯を喰べて行かう」

とお信は更に狭い横町に曲つて、一同を三階造りの大きな家に連れ込んだ。其處にはちやぶ臺に七輪を嵌め込んだのを控へた幾組の人々が、大汗になつて胃の腑を充すことにかゝつてゐた。犢鼻褌一つになつた大男が、盃と手巾とを兩の手に持つて、赤い額を拭きつゝ飲んでゐるのもあつた。兩肌を脱いで脹らかな白い乳房の露はるゝに任せて、鍋のものを突ついてゐる銀杏返しの女もあつた。隅の方では、二人の人が一つの盃に注いだ酒を兩方から吸つては戯れてゐた。

「さア暑いよつて皆な肌を脱いだら可え。子供を早う裸體にしておやり」

お信の指揮で一行も皆先客の仲間に入つた。乳母だけは襟をキチンと合して、形を崩さず小ひさな扇を使つてゐた。

食事を済した一行が赤い顔をして、物の煮える臭ひの涌き立つ家から出た時は、日盛りに近くて、繁華な町も流石に人通りが尠く、中形の浴衣に赤い帯を締めた氷屋の姉さんは、サイダーの瓶を並べた棚を背にして居眠りをしてゐた。

多くの幟や、旗や、俗惡な繪看板で亂雑に表を飾つた古臭い劇場の向ふ側に、「はりまや」文字を現はした赤硝子の行燈の見える小料理屋がお信の家であつた。

其の家は川に沿つた二階造りで、今出て來た三階に見たやうな客の居るのが、外から透き通つて分つた。

五十四

帳場には娘のお濱が、「はりまや」と赤く書いた團扇を手にして腰をかけてゐた。一行はドヤ／＼と其の前へ行つて挨拶した。料理場や客座敷で立ち働いてゐた男女の雇人は、皆眼を瞠つてこの不思議な客を見た。盆の上に井を載せて座敷へ出やうとしてゐた色の黒い禪がけの女は、「お出てやアす」と、通常の客を迎へるやうに云つたが、跡で氣がついて笑ひながら口を押へた。

お濱と妻との間には、樽俎折衝とても云つやうな、飾りの多い言葉が長々と交換された。

「狭うおますけど、此方へお上りやす」

とお濱は帳場の背後を指した、福松は最う其處に上り込んで、お信と二人で頻りに今度始める商賣のことを話してゐた。

「お律ちゃん賢いな、伯母さんが抱いて上げやうか、此處へお出で……」

お濱は濃い眉を動かさしつゝ、膚理の細な色の白い圓顔に笑を浮べて斯う云つたが、突然大きな口を開けて笑ひ出した。

「従妹やないかなア、私伯母の氣になつてゐるのや、ハ、ハ、ハ、ハ。けども伯母と云つた方が可えほど年が違つてゐるものな」

帳場の背後の三疊には、簞笥や針箱や葛籠や、そんなものをゴタ／＼と置いて、狭いところを一層狭くしてゐた、其處へ多くの人が子供を連れて上り込んだので、身動きも出来ぬほどの窮屈で、川に臨んだ側の障子を二枚外しても、汗は湧くやうに人々の身體から出た。

「家は廣いのやけれど、商賣に使はん間は此處よりないよつて仕様がな。家賃を百圓も出して、自

由に身體を息められるのは三疊だけや、今に隠居の方へ連れて行くが、まア一寸此處で辛抱してお呉れ」

狭いのと暑いのとに慣れ切つてゐるお信は、さほど汗もかゝらずに、打ち寛いだ状で煙草を吸つた。乳母はお花を抱いて、狭苦しい帳場の背後を氣兼ねらしく通つて、涼しさうに打水をした店の三和土の上へ下りたが、其處からまた逃ぐるやうに、入口の舞子の濱の景色を畫いた麻暖簾を分けて戸外に出た。お濱は帳場の臺に頼杖をついて、ツク／＼と乳母の出で行く状に見入つた。

猿股一つになつた竹丸は、危なつかしい欄干に凭れて濁つた水の面を眺めてゐたが、一尺の土をも餘さずにギッシリと建て續けた家と家との間を緩やかに流るゝ川には、家根舟や泥舟に混つて、白衣帶劍の人を乗せた小舟が、小ひさな旗を翻へしつゝ漕いで來た。

「竹さん、裸體でそんなとこへ出てると水上警察に叱られる」

と福松は早口に云つて竹丸に注意すると、竹丸は周章て、川の見えぬところに引つ込んだ。お信は笑つて。

「其處なら氣遣ひあれへん。それに時々御禮がしてあるよつて。大抵のことは見遁して呉れる……お晝か夕方にはあの舟をこの下へ着けて、「オイ飯を呉れッ」ちうて注文することがあるよつて、洗肉にお汁ぐらい付けて御飯を出して代は取れへんのか……この間も非番や云うて友達を一人連れて和服で來て、二階で一時間ほど飲んだが、勘定をと云うた時に、私が出て挨拶をして、「御勘定はまたお序の時で宜しうござります」と云ふと、「氣の毒やな」ちうて喜んでゐたが、そんなことがあるので、これまで川へ塵を棄てる罰金を取られたのを、此頃はあの舟の來たことを知らずに、腐つたものや何かを其處から抛つても、横を向いて、呉れるので重寶や」

と煙管を弄びながら、得意氣に語つた。何時の間にか福松の膝にお河童頭を載せて眠つてゐたお律は戸外を通る樂隊の音に眼を覺して、「家へ去なう」と泣き出して。

五十五

隠居へはお濱が案内して行くことになつた。二階では手が鳴る、下座敷では酔つた客が怒鳴る、其の煩はしい中を、お信がお濱に代つて帳場に坐つた。

一行は、お濱の後からゾロ／＼と戸外へ出て、芝居の繪看板に見入つてゐる乳母を手招きした。白い衣服を着た殿様が腹を切つて赤い血のだら／＼と流れてゐる繪を指さしつゝ、背中のお花に何か云つてゐた乳母は、駈寄つた竹丸に譬のあたりを突つかれる時まで、氣が付かずにおた。

町は少しく片陰になつて、人出は可なりも多く、家々は皆店先きへ打水をするのに忙しさうであつた。強い日光に焼け切つた土が打水を吸ひ込む折に發する一種の臭ひを嗅ぎつゝ、一行は屢々自轉車の鈴や車夫の懸聲に驚かされて、欄干のベンキの剝げかゝつた木橋を北へ渡つた。

其處に建ち並んだ入口の狭い同じ造りの家の二階には、人目を掩ふ幕が一様に張り聯ねられて、其の間からしどけない女の姿が、チラと見えて直ぐ引つ込んだ。大きな包みを抱へてそれ等の家に入つて行く、帶の赤い小女もあつた。

「店は毎日能う流行るやうだすな、お忙しおますやう」

「慣れますよつて、さう忙しいとも思ひまへんが、女と男で二十八人も使つてますのに、家は二人で男氣なしと來てゐますやう、それで一寸骨が折れますのや。阿母が寢ますし私が店で寢る時は阿

母が隠居で寢ると云ふ風に、一晩代りにしてますが、店で寢る時はそら何だすぞ、寢るのは大概一時ですが、皆なを二階へ追ひ上げるやうにして息まします時に人數を改めますのや。火を落してから外へ出たがるものは出してやりますが、一時半までには屹度戻つて來るやうに云うて、そいつが歸つて來るのを待つて、表の戸の錠を中から下して、私なら私が其の鍵をお腹のとこへ斯う抱いて、あの三疊へ寢ますのや」

「さうすると毎晩お息みになるのは世間の寢鎮つた時分だすな。それで能う身體が続きますこと」

「奈良と違ひませ、大阪の十二時は背の口だすものなア、この邊は一時二時になつても人通りが絶えまへんもの。それに一晩代りだすよつて、隠居へ寢る時は早う寢て早う起き、店へ寢る時は晩う寢て朝寢しますのや」

「店は朝おそいのだすな」

「十時頃からぼつ／＼お客が來ますが、中には朝歸りの人が、表の戸の開くのを待つて、まだ蒲團の一面に敷いてある二階へ上つて、自分に蒲團を疊んだり掃除したりして、何んでも良えよつて早う喰はして呉れ、なんて云ふのもおますさかい、さう朝寢もして居られまへん」

妻とお濱とはこんなことを話しながら、蝙蝠傘を相合にして歩いてゐた。

入口の狭い家に續いて、宿屋の多い河岸の町を少し行くと、路次が幾つもあつて、其の中の稍廣い路次を入つた二軒目が、播磨屋の隠居であつた。共同水道栓と斜めに向ひ合つた、窮屈な格子を開けると、細長い土間には漬物桶の臭ひが充ちて、奈良で見慣れた菊屋の道具が、荷造りのまゝ隅の方に狭苦しく積み重ねてあつた。

四疊半三室の細長い家、それが福松の一家六人の暫らく身を置くべき假の宿であつた。

「これが隠居と云ふものかなア」
 明日にも下宿を探して其處に移る筈の竹丸は、心の裡で斯う思つた。
 稽古三味線の音が聞える。

五十六

竹丸が過つて女湯へ入つて來たと云ふ事が、一同を笑はして、其の日は暮れた。
 「竹さんも隅へ置けんな、態と間違へた振りして入つて來たんやらう」
 お濱がこんなことを云つて調弄ふので、竹丸は眞赤な顔をして俯いてゐた。

「あの風呂屋は男湯の入口と女湯の入口が十間も離れて、全て別になつてゐるんやもの、知らん人が間違へるのは無理おまへん」

隠居の雇婆は眞顔になつて斯う云つた。

「あの細い入口から入つて行くと、上り口の横の鏡の前で、女の人が白粉を付けてたが、風呂の中には誰も居やへんので、何の氣も付かずに着物を脱いで飛び込んだのや。それから洗場で顔へ石鹼を付けて洗ふてる中に、二人ほど入つたと思つたが、眼を開て見ると、それが皆藝妓らしいので喫驚したけど、先方では何ともない顔をしてゐるさかい、この風呂屋は男も女も一所か知らんと思つたが、其中にまた二三人女ばかり來るよつて、氣味が悪うなつたので、上つて着物を引ツかけながら横手を見ると、別に男湯があるやないか」

竹丸は二三度も云つたことを、また辯解らしく繰り返した。

「金づくでは行かれんとこへ行て來たのやものなア、運の好え男や」

「この邊の賣物ばかり入る風呂やつたよつて無事に濟んだのやが、船場あたりの嬢はん達の行く風呂やと一騒動持ち上つたかも知れんな」
 人々は斯う云ふことを取りぐくに云つて笑つた。笑ひを收めた乳母は急に難かしい顔をして、

「此地の湯屋ではそんなことが始終あるんでせう。私も今見て來ましたが、竹さんの失策つた湯屋は眞個に男湯と女湯の區別が分らん上に、境界もございで行き抜けになつてゐるんですもの。東京ではあんな不取締なことはありませんよ」
 と大阪を賤しめるやうな調子で云つたが、誰も耳を傾けるものはなかつた。

夜、お濱は店を母に頼んで、福松と竹丸とを騒がしい千日前から、なまめかしい難波新地の方に連れ廻つた。物の光と物の音とに目と耳とを奪はれて、二人の男は一人の女の後から、人込みの中を泳ぐやうにして歩いて行つた。

お多福の像のお辭儀してゐるのを目標にした家のある、狭い、拔道に入つて、入口に大きな鏡を据ゑた寄席の磨き込んだ板の間から二階へ上ると、高座には頭の禿げた小作りの男が扇を使ひながら不作法な話で客を笑はしてゐた。

三人は二時間ほど後に、笑ひながら二階を降りて下足を取ると、其の直ぐ近くの、小さな座敷の幾つもある家に入つた。

「叔父さんも竹さんも、これいけまへんのやな。私一人で張合がない」
 お濱は懇意ならしい女中に、暗號のやうな言葉で誂へ物をした後に、片手で酒を飲む眞似をしつゝ

斯う云つた。

やがて運び出された料理を、自身の分まで皆二人の男の前に押しやつて、お濱は海膽の小皿を一つ

控へたゞけて、爛徳利の酒をコップに注いで、忽ちの中に三本ほどを空にした。

「偉うおまつしやる」

白い顔をほんのりと染めたお濱は、眼を据ゑて二人の男の着を突ついてゐる状を見た。

「お前、何時そないに修業が出来たのや」

「家で隠れて少しづつ飲つてる中に強くなりましたのや……阿母はんには秘密だッせ」

五十七

お濱は四本目の銚子を空にして、更に五本目を命じた。さうして、

「何うだす麥酒でも一杯飲みなはらんか。麥酒なら宜しおまつしやる」

と、二人の方を睨むやうに見てゐたが、返事を待たずに「姉さん麥酒」と大きく呼んだ。

「私麥酒も飲けんのや、これかてアルコールが入つてるものな」

福松は、女中が麥酒瓶と、大コップとを持つて来て、自分の前に注いで、見事に泡立つのを見つゝ、斯う云つた。

「男の癖に何んだすのや、私が毒味してあげますよつて、斯うして飲みなはれ」

お濱は手を伸して福松の前のコップを取ると、グツと一口に飲み乾し、コップを俯向けに二三度元氣よく振つて、また福松の前に満々と注いだ。

「麥酒を飲むほどなら、此方を飲む」

急に勇氣を出した福松は、最初に一杯膳の上に置き注ぎになつてゐたまゝの冷たいのを、顔を曇めて飲むと、其の盃をお濱に獻した。

「見事〜ハ、ハ、ハ、ハ」

お濱は盃を受けることを忘れて、嬉しさうに手を拍つた。

「竹さん何うや、貴方も叔父さんのやうに一杯飲んどくなはれ。お酌しますよつて」

「そら来たッ」とでも云つたやうな顔をして、竹丸は氣味悪さうに縮こまりながら、爛徳利を突き出してゐる白い手首を見た。

「そないに嫌はんかて宜しおまつしやる。私はこんな飲酒家でも、貴方とさう年が違へしませんぞ。貴方を識つてやないけど、家の道樂屋はんは、兎ても歸つて来やしまへんよつて、貴方に來て貰ひまへうかなア。従姉夫婦は何んとかやと云ひまッせ……このくらゐの老女房は世間に何んほもおますもの……なア叔父さん」

お濱は酔つた眼を福松の方に向けた。

「私は一寸姉貴に聞いただけやが、幸助ちうのは何處に居よるかなア。天下茶屋とかに居るちうのは眞個か知らん」

「あんな道樂屋はん、何處に居たて構へしまへんがな。それよりもツと飲みまへう」

「まだ其の藝妓とかい附いてよるのやらうな」

「そんなことまで知つてなはるのなら云ひますが、あんなやくざ男でも買出しと商賣にかけては格別だしたよつてな、阿母はんもさう云うていだすのや、藝妓さへ附いてゐんと、千圓や二千圓の借金背負うて来よつても、他から腕のない養子を貰ふより利益よつて、まア少し待つておめで……其の藝妓ちうのが醜女だすよつて、道樂屋も今に飽きよりますやらう」

福松は腕組をして聽いてゐたが、思ひ出したやうに飯茶碗を取り上げて、

「私はこれを貰ふ」

と云ひつゝ、開けた浴衣の襟を掻き合はした。

「厭やな話をし出したのでそんなこと云ひなはるのか。こんなことになるのも、貴方や死んだ祖母に何とも云はずに養子などを入れた罰かも知れまへん……最うそんな話は止めますよつて、もつと飲みまへう。貴方飲けるのに禁酒して居やはるのやないか、ヤッて……」

「そんな事あれへん」

「死後の何んとかは生前一杯の酒に若かず……ッて云ふやおまへんか、飲みまへう……。これから堀江へ行きまへうか、私彼處に馴染の家がおますのや、女の藝妓遊びも異つてまッせ」

福松が、酔うたお濱を賺すやうにして、竹丸といもに料理屋を出た時は、もう夜半に間もなかつた。三人が無言で暗い芝居裏を通ると、俳優の歸るのを見やうとして、丸鬚の人、束髪の人、銀杏返しの人、島田の人、桃割れの人が、ガヤ／＼と樂屋口に集つてゐるのが、ぼんやりと曇つた唯一つの灯の下に見えた。

五十八

福松が新たに店を開かうとする家は、大阪北の大停車場に近い少ひさな橋の袂にあつた、此處ならば遊廓に近く、大通で、人の往来も多いし、南と違つて同業者との競争も左程面倒でないからと、お信が方々を探し廻つた揚句に、選定したので、新建の木の藁りに充ちた二階家の壁が乾いたばかりのとこへ、饅頭蕎麥を主とした飲食店に相應しい設備をする爲めに、大工が二三人入つてゐた。

二階は九疊と云ふ變な疊數が一室、それを住居にして、親子五人と乳母との起臥の場所に充て、下

の二室を客座敷と料理場とに分けて、階子段の裏に、播磨屋のよりはまだ窮窟な帳場を設けた。客座敷の方は土間を多くして、輕便に腰をかけながら喰べられるやうな工合にし、坐り込んで緩りと喰べる場所は極く妙なかつた。

それらの工夫は、土地の人氣や店の性質から考へて、お信が一々指揮した。福松は階子段の裏の支へさうな帳場格子の、まだ木屑鉋屑の散ばつてゐる中へ、亭主らしく坐り込んで見て、

「人並みより大きく生れたものは損やなア、納りが悪うて……」

「眼鏡を取つた方が好えな……一寸、弱うなつた相撲取が最貴客から店を出して貰うたやうで、流るるかも知れん」

お信は彼方の棚や、此方の建付の、工合の悪さうなのを大工に直させるやうにしながら、帳場の方を見て斯う云つた。

「餘り大け過ぎて恰好が悪うおます。帳場にはもつと小作りの氣の利いた好え男が坐つてた方が似合ひますな、ホ、ホ、ホ」

初男を貰つて、開店の用意を見に來た妻は、入口の敷居を跨ぐなり斯う云つて笑つた。

「家の造作なら好きなやうに直せるが、身體に鉋はかけられんよつて、まア其の儘で負けとくのや、なア大工さん」

お信は上機嫌で、大工の煙草入れを借りて忙しさに二三服吸つた。

「田舎者でも身體が大きいので、町の人に馬鹿にいられず済むことがあるな。昨夜も千日前で掏摸みたいな奴に突き當つて、喧嘩を賣られさうやつたが、元氣を出して睨み付けてやると、此方の身體

が大いもんやよつて、少し考へて逃げて行きよつた」

「戦争の時は大男より小男の方が利益だすな。銃丸の中りが軽い上に、怪我でもすると大男はなかなか擔いで行て呉れまへん。擔架卒と云ふ奴は、小男の軽さうな怪我人を先きにしますよつてな」
從軍の經驗を自慢話にするので仲間に評判の高い、人の好きうな大工は、仕事の手を止めて、福松に斯う云つた。

「これ何うや……あんまり大きいな……ちう風に、合棒との相談づくで大男は一割損だす」

大工はまた何國かの訛を帯びた言葉で得意氣に云つた。

料理場の後から石段を五つ六つ下りると、直ぐ川端へ出られるやうになつてゐた。川は狭く水は清くないけれど、其處を洗場にするには甚だ便利らしかつた。

「この家で一番氣に入つたのは此處や」と云つて妻はそれを喜んだ。

近松の淨瑠璃にある蜷川。それがこの汚い川であつた。

五十九

新店の名を何と命げやうかと云ふことで、相談が始まつた。奈良で賣り込んだ「菊屋」の名を其のまゝ用ゐやうと福松は思つてゐたが、寂しい町の燻つた陰氣な家を想はせて可かんから、もつと氣の利いた陽氣な名にしやうと、お信は首を傾けた。

「店の屋號も時節／＼と變つて行くもんなア、何々屋と云ふやうな昔風な名は今あんまり流行らん家の「播磨屋」ちうのも古臭うて可かんのや」
考へ厭んだ末に、お信は斯う云つた。

「蜷川の側やよつて、しりみ亭」としやうか」

「家の苗字を假名で書いて、ましま」として置いたら何うだす」

「お前の名を屋號にして、おつれうどん」とでもして置かうか、ハハハハ」

「表へ出す行燈や看板や、店で使ふこま／＼した物にも、屋號を入れとかんならんよつて、戲談を云はずに早う佳い名を考へとくれんか」

お信は弟夫婦の狀を微笑みながら見て云つた。

「此處は天満の天神さんに近いやらう」

「さう近うもないが、同じ北區の中やよつて……この先きの通りを真直ぐに東へ行くと獨りで詣られる」

「天神さんの紋は梅鉢やよつて、家の屋號を「梅鉢」としやうやないか」

福松の半分は戲談らしく云つてみた屋號が、大分お信の氣に入つたやうで、

「さうや、それが可え、佳い名や」

と、右の食指で左の掌へ幾度か「梅鉢」の字を真似をした。「梅鉢」「梅ばち」「うめばち」といろ／＼に書いて見て、

「何うしても「梅ばち」と本字と假名で半分づゝ書く方が落着きが好えなア」と云ふことになつた。

家の造作やら開店の仕度やらで、福松の奈良から持つて來た金は三分の二ほど減つた。家主へ入れた數金のお信の方から出てゐるのを返へしたとして、いよ／＼商賣を始めるまでにまだ買ひ調べればならぬものを勘定して見ると、福松は少しく心細くなつて來て、大阪の物價の高いことや、總てを姉

任せにしてゐた自分の事業の行末やを考へずには居られなかつた。

「動くにも金、坐つてゐるにも金」

こんなことを獨言に云つて福松は、夢のやうに奈良から出て来て、夢のやうに姉の世話になつて、氣樂さうに戯談などを云つてゐる其の夢の覺めかゝつて来たやうな氣にもなつた。

開店を十五日と決めて、それまでがなかく忙しかつた。其の忙しい中を福松は天公主教會へ一度と、新教の教會へ一度と、大切な時間を二度潰した。

新教の教會では、鬚髯の多い有名な牧師の説教を面白く聞いた。さうして其の牧師と會つて話が見たくなつて、教會へ宛て、往復葉書で住所を聞き合はなぞして、夕方から、不案内の町の分りにくい番地を彼所此所と探し廻つた。

堂島川に近い、舊大名の藏屋敷の跡の一構への内に、近頃建てられた體裁の好い三四軒の同じやうな家、其の中の一つが牧師の住居であつた。

六十

浴衣を着た三十恰好の束髪の人が、玄關口で赤い提燈を點けて子供を遊ばして居たので、福松は其の人に名刺を渡して取次を頼んだ。其の人は會釋一つせず、名刺を受取つた手で子供を引つ抱へて奥に入つたが、直ぐ出て来て、今度は子供も連れず、提燈もない薄明りに、スラリと身長の高い、醜くもなければ美しくもない姿を現はして、

「何の用ですか、今忙しいんですけど」

と無愛想な口調で云つて、名刺を突き返へすやうに、白い手を夕暗の裡に差し出した。

「基督教のことと少しお伺ひしたいことがござりまして……」

束髪の方は黙つて引つ込んで、暫くしてまた出て来た。

「今教説を書きかけて居りますから、三十分間ほどお目にかゝつて質問を受けると申します……何うぞ此方へ」

待遇の稍丁寧になつたのを感じながら、福松は玄關に上つた。其處が直ぐ應接室で、粗末な圓卓子を圍んで三脚の椅子の置いてあるのが、茶の間らしい次の室から射すランプの光にぼんやりと映し出され、風通しが悪く蒸暑くて、呼吸が苦しかつた。

椅子に腰を下して、十分間ほど扇を使つてゐる中に下女が、番茶を持つて来て、それから黒の脊廣を着た牧師が怖い顔をして出て来た。教會の壇上に立つてゐるを遠くから見た鬚髯の多い顔と、今眼の前にある鬚髯の多い顔とは、別の人であるまいかなぞと、福松は何となしに思つてみた。人を眼下に見る風、それは天主教の宣教師などと全て異つた肌合を、福松はこの鬚髯の多い牧師の上に見た。

優しい親切な、ミドンやアングルやシモンが俄に懐しくなつて、同胞と名のつくこの鬚髯の多い人よりも、幾千里を距て、生れた二三人のフランス人の方が、兄弟のやうに思はるゝ理由を、福松は考へるともなく考へた。

「質問は何う云ふんですけど」

下女の持つて来た臺ランプを真中にして、暫く無言で對ひ合つた末に、牧師は急き立てる體で斯う云つた。

「奇蹟と云ふものは眞個にあるのだからござりませうか」

質問はこんなことから始まつた。牧師は髻を撫でつゝ、輕蔑するやうにザロリと福松の顔を見て、教壇から發する評判の高い朗かな音吐を餘程低めた調子で、

「アフリカで或る宣教師が、土人の子供を使にして或る人の許へ手紙と菓子を持たしてやつたが、使の子供は途中で其の菓子を喰つて仕舞つて、手紙だけを先方へ持つて行つた……ところが、其の手紙には菓子を進上すると云ふことが書いてあつたので、先方の人が使の子供に向つて、菓子は何うしたと詰問すると、子供は喫驚りして、「手紙が物を云つた大變だ」と周章で逃げ歸つたと云ふ奇蹟がある」と、桃太郎の話でも聽かせるやうな風に云つた。

「……ですすかられ、土人から云へば奇蹟でも文明人から云ふと何んでもないやうにですれ、人間から云ふと奇蹟であつても、神から云へば奇蹟ではないんです。解りましたか？」

牧師は嘯くやうに斯う結んだ。

六十一

「上からの能力ちからと云ふことを承はりますが、さう云ふものは無いやうに思はれます、方々で信者の様子を觀ますのに、神經質の人に熱心家が多うて、惡賢い横着者に熱心な人はござりません。まあ何處の教會でもドツサリある信者の中で、眞の熱心な信者は極く少數の神經家だけのやうに思はれます」

斯う云ふ質問が放たれた。福松の心では、上からの能力が若しあるならば、極く少數の神經家を救ふよりも多數の横着者を救ふ方が肝心であるのに、事實はさうでなくて、宗教と云ふものが、神經質の人の手遊品のやうになつてゐるのを見ると、氣で氣を養ひ、氣で氣を助けるに過ぎないものではあるまいかと云ふのであつたが、牧師には其の意味が能く通じなかつたらしく。

「僕の友人に山崎と云ふのがある、決して神經質ぢやないが、非常に熱心な信者です」と答は極めて簡單であつた。

「監獄に居る囚徒に聖書を一冊與つて置くと、熱心な信者になつた例は、昔から随分多いですが、何も知らない囚徒に佛教の經文を一巻や二巻與つても、佛教信者には決してならない」

牧師はまたこんなことを得意氣に云ひ足した。

「人間に靈魂があると申しますが、假臥のやうに一寸眠つて居ります時は夢を見ますけど、能う眠つた時……熱睡致しました時は夢を見ませんことから考へますと、靈魂と申しますのは物質の集合上の働きであらうと存じます」

「心理學に睡遊と云ふことがあります……フランスで或る家の娘が、夜中眠つて居る間に獨りて寢室から勉強室へ行つて扉の錠を開け、眞暗な室の机の上で畫を描いた上、元の通り扉の錠を下して寢室へ歸つて來ましたが、翌日眼を覺してから、睡眠中に描いた畫を見ると大變によく出來てゐたさうです……其の寢室と勉強室の間には溝があつて、夜中に娘が一人で行かれるところではないんださうです……これが睡遊と云ふものなんです、それから推すと熱睡中は夢を見ないと云ふ説も何うかと思はれるですな」

斯う云つて牧師はポケットから銀側梨子地片硝子の時計を出して見たが、まだ時間があるらしく、或る國の牧師が睡眠中に、眞暗な書齋で説教を書いたと云ふやうなことを話して、睡遊の例を示さうとした。

「神様でも、無から有を出すことは出來ん道理ですよつてなア、萬物をば何を元にしてお造りになつたのでござりませうか」

福松が稍苛々した風になつて、斯う質問すると、牧師はまた先刻のやうにザロリと福松の顔を見て「それは哲學を知らんと教へても解らんが……」と云ひつゝ、三度ポケットの時計を出してそれを手にしたまひ、

「極く簡單に云へば萬物の原は勢力で、其の勢力の原は神の意思です」

腰を浮かさうにしながら斯う云つて、掌の時計を見た。

三十分の質問が盡きて、福松は追ひ立てられるやうに牧師の前を辭した。眞暗な玄關の上り口で、額の汗を拭きながら下駄を探してゐると、來た時に赤い提燈を持つてゐた束髪の人が、臺ランプを持つて出て、

「お分りになりませんか」

と唱歌のやうな聲で云つた。

六十二

鬚髯の多い牧師を訪問して心に残つたものは、唯彼れの態度の傲慢と云ふことだけであつた。基督や聖ポウロは柔和しくと教へたのに。あの牧師は何うしてあゝゴツ／＼と威張るのであらうか。

先日初めてあの牧師の説教を聞いた時、「東京で或る學者を訪問したところが、玄關で二時間も待たした上、漸く面會した後も兩腕を組んだまゝ黙つてゐて、甚だ傲慢無禮であつたが、それに引變へ、米國の或る學者をホテルに訪問した時は、こんな青書生にも快く面會して、丁寧に握手し、始終笑顔で話して呉れた。東西の學者にはこれだけ心得方の相違がある」と云つたが、自分はこの言葉に感心して、あの牧師を訪問する氣にもなつたのであるに、今夜のあの傲慢な態度は何事であらう。

猿の尻笑ひ！

赤い提燈を點けて子供を遊ばしてゐた人の姿、あの人の名は咲子と云ふであらう。鬚髯の多い牧師の噂を、これまで自分は不思議によく耳にした。牧師は△△社を卒業後、其處で教師をしてゐる中に、其の時△△社女學校の生徒であつた咲子に戀をして、艶書などを取交したが、教師と生徒と婚禮することは出来ぬので、急に教師を罷めて牧師になり、首尾よく咲子を手に入れたのであるさうな。そんなことを知らぬ信者は皆、△△さんは政治家になるつもりであつたのを時勢に感じて牧師になつたのだと云つてゐるさうだけれど、時勢なんぞよりも、咲子の方が大事であつたに違ひない。

福松は斯う云ふことを考へながら、暮れてから間もない賑かな町々を歩いた。狭い往來の、涼しさうに打水をして格子先きへ縁臺をも持ち出して、絹團扇を使つてゐる若い人の、結立てらしい艶を含んだ髪や、白地の派手な薄い着物にふっくりと包まれた肉付の好さうな圓い腰や、そんなものが際立つて眼に付いた。

あの鬚髯の多い、難かしく眞面目腐つた顔をしてゐる牧師が、女に戀をした時の状！ それを考へると、福松は微笑まずに居られなかつた。

淺黄の風呂敷に包んだ四角なものを背負つた何家かの丁稚は、福松の思ひ出し笑ひをしてゐるのを町の灯影を見て、笑つて行つた。

蜷川の畔の新宅へ歸ると、今日取り付けた電燈が、悉皆眩しいやうに點火されて、新らしい柱や壁や造作をあか／＼と照してゐるのが外から見えた。

これが自分の家？

福松は斯う思つて、「梅ばち」と白く現はした赤硝子の鮮かな行燈を眺めつゝ、「來十五日より開

業」と大きく書いた自分の手蹟の紙の、翫々と風に動いてゐる入口を入つた。

奥の客間の明るい電燈の下の、新しい畳の上に、家族は皆落着かぬ風をして集つてゐた。お律とお花とは、珍しさうに福松の顔を見た。

二階を人が歩く音がして、お信と竹丸とは何やら話しながら階子段を下りて来たが、これも福松の姿を珍しさうに見て其處に坐つた。

「香屑さんも氣樂な人ヤナア、竹さんを預け放しにして」

お信は二階からの話の續きらしいことを云つて、

「今度のお嫁さんの實家は西京やさうやし、本山へは時々行くんやうが、其の序に私の許へも少しは寄つたら可さいなものやないか」

と附け加へた。一座は皆様子あり氣な顔をしてゐる竹丸とお信を見た。

六十三

竹丸は備後町の飯屋の二階の一室を借りて、其處から近い、中學程度の怪しい私立學校に入る事になつた。學校では竹丸を初級と云ふ繼子のやうな組に入れたが、直ぐ五級の丙組と云ふのに移した。其の組ではナシヨナルの二の初めの方を讀んでゐる、仲間が僅か六人であつた。

竹丸が保證人の福松に連れられて、學校の會計係に束修を納めた時、一圓紙幣一枚と五十錢銀貨一個とを恭しく紙に包んで水引を掛けたのを、福松が膨れた懷中から取り出し、扇子に載せて會計係の前へ置いたと云ふことが、珍らしい出来事として、係員の口から學校の全部に傳へられた。

竹丸の爲めに下宿を探したり、學校へ入る世話を焼いたりする方が、饅頭屋の開店の準備よりも自

分の性に適つてゐるらしいと福松は云ひ／＼して、時々飯屋の二階へ遊びに来ては、學校の模様を聞いた。鬚髯の多い牧師に會つた時の話を繰り返へしたりした。

下宿のこと、學校のことを始め、いろ／＼の消息を、竹丸からも福松からも委しく香屑の方へ知らして、福松は其の長手紙を書く爲めに、忙しい中の殆んど半日を潰したほどであつたが、香屑からは「何分宜しく願上候」と云ふくらゐのことを書いた葉書が一通福松へ宛て、來ただけであつた。

「香屑さんも氣樂な人ヤナア」

お信はこれを幾度も云つて、竹丸に一度家へ行つて様子を見て来るやうに勧めたが、竹丸はそれを厭ふ風であつた。

飯屋の二階は四疊半二室で、奥の方には獨身の小學校教員が居て、竹丸は口の方の室に、奈良の物置以來の机や本箱を据ゑた。教員は出入りの度に竹丸の背後を通るのを氣兼ねしくしてゐたが、二三日経つ中に馴れて来て、

「君共通に、しやうちやありませんか」

と、學校から歸つた服のまゝで、日に焼けた圓い顔の大きな眼を光らしつゝ、隔ての唐紙を外しかかりなぞした。

「其の方が涼うて宜しおますわい、それに限ります」

飯屋の老爺は、ガタピシする二階の物音を聞きつけて、階子段から首を出したが、斯う云ふと直ぐ引ッ込んだ。

室はからりとして、風通しが好くなつた。支那鞆や箱火鉢や煙草盆や白毛布や、自分に比べて持物の多い教員の身の廻りを、竹丸はつく／＼と見た。

「君の許へ色女でも来た時は、元の通り唐紙を箝めますからな……」
 教員は一閑張の机に凭れて、紙巻煙草を吹かしながら、莞爾々々笑つてゐたが、小ひさな窓の塗格子の間から、下の往來を透すやうにして見ると、

「君、君、美人、美人」

と周章てた状で竹丸を手招きした。カラツコロツと喧ましく下駄の響を立てゝゐるのは、遊藝の稽古の歸りらしい四人連れの娘で、鮮やかな紺飛白に各々の趣味を現はした帯の色のよく似合つたのが四つ並んで、浮き出したやうに、日陰になつた狭い町を行つた。

「あれが焼鹽屋の娘で……これが其處の荒物屋の娘で……あれが唐物屋の娘で……これが足袋屋の娘で」

教員は伸び上るやうにしつゝ、帯の色によつて一々娘の家を教へた。

「十六で……十七で……十七で……十六で……」
 と、教員はまた一々指さして、娘の年齢を云つた。

六十四

學校で一人、坂谷と云ふのと懇意になつて、竹丸は學課を棄て、置いて坂谷と一所に南地へ出かけ芝居の看板を見て廻つたり、千日前の觀せ物を覗き歩いたりした。晩飯を銘パンの買喰ひなぞで濟まして、夜も其まい、燈火の明るい南地を彷徨うてゐたこともあつた。

同じ形の行燈の一軒毎に點けられた長い町を歩いて、行燈に現はれた字を一つ宛讀んで行きながら其家に入入りする男の狀を見て、

「面白さうなところやなア」

「こんな家へは何うして入るんやらう」

なぞと云ひ合つてゐたが、坂谷は勇氣を出した風で、其の中の一軒の入口から二三尺ほど踏み込んで、直ぐ出て来て大きく笑つた。竹丸も其の後から行つてみたが、入口から先きへは一足も進むことが出来なかつた。——と云ふやうなこともあつた。

二人の墓口を勘定し合つて、寄席へ入らう、觀せ物を見やうと云つては、木戸口で立ち止つて、其處から先きへ進むのが恐ろしいやうに思はれ、銅貨を握つたまゝ、空しく疲れて歸ると云ふやうなことも多かつた。

其の中に坂谷は、机と本箱とランプとを竹丸の宿に運び込んで、其の四疊半に狭い思ひをしながら起臥することになつた。室代を半分づゝ拂ふやうになつたので、それだけ小使ひ錢が殖えたと竹丸は喜んでゐた。

次の四疊半に居る教員と三人で語り合ふ事は、多く近所の娘の評判であつた。教員は芝居の番附に書いてある役者の名のやうな形に、近所の娘の名を書き並べそれに「不如歸」の役割を附けた娘番附とでも云ふやうなものを念入に拵へて、机の抽斗に納つてゐたが、話の興に入るといふに、それを大事さうに取出して竹丸と坂谷とに見せたけれど、そんな物の意味も趣味も二人にはよく分らなかつた。

荒物屋い……焼鹽屋みち……唐物屋久枝……足袋屋かつ……なぞと、娘の家の商賣と娘の名とを讀みにくい圓い字で書いたのを見入りつゝ、二人は教員が一々娘の名までを知つてゐるのに感心して、えらい／＼と譽め立てると、教員は面白さうに笑つて、

「學校の古い學籍簿で調べたのもあるし、受持の子供の中に妹の居るのもあるしさ……分らないの

は好い加減な名を命けといて、分つてから直すんだ」

と云つたが、煙草に噎せて苦しさに年寄のやうな咳をした。

「書き出しが荒物屋ふい、座頭が足袋屋かつ、中軸が唐物屋久枝……」

教員は番付の位置によつて等級のあることを説明した。荒物屋ふいと云ふのが一番美人であるさうな。

「君、學校にもなか／＼美しいのが居るよ。高等だと好いんだが、尋常だから少し小さいがね、それでもなか／＼面白いことがあるよ」

横になつて、大きな字典を枕に引き寄せながら、教員は女教師や女兒に就いてさまざまのことを語つた。

「これは君、僕の學校のことぢやないがね、友人の居る學校のことだから、僕も熟く知つて居るんだが……」

と云ふ前置をして、或る學校の女兒が何時の間にか妊娠して校内の便所で流産したのを、袴と袂に入れて歸らうとしたが、途中で袂から滴るものゝあるのを、巡査に見咎められたと云ふ話が、最も強く二人の耳に響いた。

「君等は南地へ行つて一體何を見て来るんだね」

斯う教員に笑はれて、其の夜二人は南地に連れ出された。

六十五

教員は竹丸と坂谷との先きに立つて、千日前の裏の方の、暗い汚い町に入つて行つたが、傾きかけ

た軒に、無名の軒燈の瞬きをしてゐる、空家のやうな家の前に立つと、二人を小手招きした。

「此處が悪い家ださうだ。僕も入つたことはないがね、大阪に一軒切りないなんて云ふ人もあるよ」

大阪に一軒切りない家！竹丸は不思議な顔をして、其の家の入口の黄色く煤けた障子が浮き出したやうに、ぼんやりと内部の燈火を映してゐるのを見つめた。すると内部の燈火はスウツと動いたらしく、障子に映る光はなくなつて、黄色い紙の色が白く薄く見えるだけになつた。

通りかゝる二三人が、教員と坂谷との姿と、大阪に一つ切りないと云ふ家とを、暗に透して見比べつゝ、更に其の物を怪しむらしい眼を竹丸の方に向けた。

「さア行かう、こんなところに何時までも立つてるもんぢやないよ」

教員は通りかゝりの人に背中を見られたのを、襟ぐらでもしたやうに氣味悪がつて身を縮めつゝ、飛び退くやうに二三間先きへ行つた。

「入つて見んのですか、折角来て……」

坂谷は教員の後を慕ひつゝ、高聲で斯う云つた。教員は手を振つてそれを制し、

「大きな聲を出しちアいかん」

と、背後向きに歩いて、また二三間去つた。竹丸は何か恐ろしいものにも狙はれてゐる様な氣になつて、大急ぎで教員の行つた方へ逃げた。坂谷は一番後から、

「あれは何をする家ですか……料理屋……待合……汚い家ですな。あれで客が来るんでせうか」と一人喋りながら隨いて來た。炒豆屋に付いて横町へ曲る時、角燈がパツと光つて、白服の巡査はザロリ／＼と三人の姿を見て行つた。

「君、僕は教育家だよ！」

肩衣を着けた銀杏返しの娘が見臺を控へて三味線を弾いてゐる繪を、極く下手に描いた看板が、カ
ンテラの火に照らされてゐる小ひさな新内の寄席の前まで来た時、教員はホツと息を吐く状をして斯
う云つた。其の口調は、今まで教員の口から出た言葉の中で、最も威嚴を含んだものであつたやうに
竹丸は思つた。

三人はだん／＼明るい町へ出て、大きな板に席名を現はした女義太夫の寄席の前に立つた。

「小光は最う出たか知らん……」

斯う獨言をいつて、教員は兵兒帯の間から鐵側の時計を出して見た。

「小光姐はんはこの次だッせ……お入りなはい」

木戸番の男は難かしい顔をして、一寸三人の方を見てから、首を捻ぢ向けて内部の様子を伺つた。

教員は三人分の木戸錢を拂つて、二人を内部に連れて入りながら、光助に小光といふ姉妹の義太夫語
りがこの寄席へ出るが、二人とも女義太夫には珍らしい美人であることを話した。

「小光が妹で、光助が姉さ」

といつて教員は、襷を掛けた小女の出した坐蒲團の位置を足で直して、縁側に添うた涼しさうなと、
ろに坐を占めた。こんな場所に経験の浅い二人は、左見右見しながら、教員の左右に坐蒲團を控へた。

六十六

高座には白粉の濃い狎のやうな顔をした娘が、赤い裏の付いた肩衣を着けて、汗を拭き／＼唸り聲
を立てゝゐた。廣い場所の前方の方に客がバラツとゐるだけで、後方の三分の二ほどは疊の敷が一つ一
つ敷へられた。

「名瑠君！こいつも巧いがね、顔が拙いんで仕様がな」

教員は斯ういつて、入る時に銜へて来た巻煙草を棄て、更に新らしいのに火をつけた。坂谷は無
斷で教員の煙草を一本抜き取つて、慣れぬ手つきで無味さうに煙を弄んだ。「名瑠君！佳い名やなあ」
斯う思ひながら竹丸は、狂氣のやうに頭を振つてゐる高座の醜い娘を見た。

名瑠君が一段高く聲を張り上げると、拍子木がチョンと鳴つて、高座がクルリと廻ると、老
松に龜を描いた背景が、日の出に鶴のそれに變つた、見臺の前に平伏してゐる桃割れの頭を載せて出
た。

「これが小光だ！」

と教員は自分の妻でも紹介するやうに、勿體振つていつた。背景の蔭で叫ぶかゝん聲の口上が終つて、
桃割の側面だけが見えるやうに居ずまひが直ると、下膨れの艶やかな頬、パツチリとした眼、形の好
い眉、顔は白粉で無論白かつた。

「女義太夫といふと大阪では醜女に極つたやうになつてゐるが、中にはこんなのもあるんだよ」
教員は得意らしくいつた、一本だけ残つてゐた煙草を銜へると、空の紙袋を片手で細かく無意識に
裂きながら、静におくりを語り出す小光の、眼を瞑つた顔に見入つてゐた。

「いよう——八幡筋……三津寺の和尙……早う姉はんを出しな」
何處からかこんな事を叫んだものがあつた。八幡筋といふのは島の内の藝人などの多く住んでゐる

町、三津寺といふのは其處に在る寺の名であることを、教員から二人は教はつた。三津八幡神社の一
寸手前の指物屋の向ふの路次の入口に、「豊竹光助」「豊竹小光」と太い字で書いた二枚の標札の掲つ
てゐることをも教員は話した。

「彼女等の親爺は汚い奴だがね……」
と教員はまた話し出したが、自分の密々とした聲に、傍らの客が笑つて耳を立て、ゐるのに氣が付くと、俄に話を止めて煙草の灰を落した。

半時間ほど経つて、高座がまたクルリと廻ると、今度は色の黒い見るに足らぬ。年増が載つてゐた欠伸したり便所へ行つたりして、年増の語り終るを待つてゐる間が随分長かつた。其の中に他の客がぼつ／＼と殖え、空いてゐる疊の数は尠くなつた。

年増の次が光助であつた。妹の小光よりはズツと身體の成熟してゐたのが。眼の色にも顔の形にもよく分つたが、口の稍大きい外は、妹に比べて美しさに優劣はなかつた。成熟し切つた女の美！それを教員は少しづつ、説いたけれど、竹丸にも坂谷にも解らなかつた。

光助が語り終つて、老松に龜の背景といもに代つてクルリと現はれた女——今度は三味線弾きと二人——が、おくりをやつてゐる中に三人は座を立つた。

橋を幾つも渡つて歸る途々、教員は光助が東京の寄席から買はれて、近い中に上京すると云ふ噂のあることを話した。

「僕も東京へ行きたいなア」

三人の胸の裡には、齊しく斯う云ふことが浮んだ。

六十七

竹丸は、小光と云ふ、女を今までに何處かで見ることがあるやうな氣がしてならなかつた。で、其記憶を呼び起さうとしも、二三年以來の出來事をあれかこれかと、心の裡に繰り展げつゝ、教員と坂

谷との後からトポ／＼と、曲つて減つた日和下駄の足を運んでゐた。

「東京へ行きたいなア……光助が行くからには小光も行くやらう……あんな小娘さへ行くのに、僕も行きたいなア」

こんな感情に掻き廻されて、何處かで小光を見たこと云ふ古い記憶はなかく、浮んで來なかつた。小さいな橋を渡る時、暗の中の欄干に凭れてゐた顔の目立つて白い、團扇を持つた、浴衣の女は、香水の匂ひをプンと放つて、一番後から行く竹丸の袂を軽く引いた。

蓮華院の若い尼！去年の秋、父と福松とに隨いて奈良の蓮華院を訪うた時、取次に出た若い尼！それが今夜見た小光の顔にソックリであることを、竹丸は漸く思ひ出した。あの尼が髪を伸して淨瑠璃を語つてゐるのでは無からうかとまで思った。

蓮華院の若い尼！それは自分が女と云ふものを見て顔を赧くした初めのものである。——

斯う考へて竹丸は、これまで何の譯も無しに識り合つてゐた幾人かの女の顔が、蓮華院の若い尼を見てから、一つ／＼に品評しなければならぬやうに自分の心に反映して來てゐるのを覺えた。女と云へば不潔な下等なもの、やうに思つて、小學校へ往復の途で石を投げて追つかけたり、砂を浴びせて泣かしたりした同級女兒の鼻垂姿までが、今は最う大分大きくなつたであらうなぞと、或る懐かしさを以つて、想ひ起された。

備後町の宿へ歸り着いて、塵埃だらけになつた足や裙を手巾で拂ひ／＼、三人が騒々しく二階の階子段を上ると、思ひがけない福松が、竹丸の机に凭れて學校の規則書を見てゐた。

「何處へ行てたんや。學校から今月分の月謝の催促が來たが、まだ持つて行かんのか」
保證人宛にした葉書を出して、机の上に載せながら、福松は不機嫌な風で斯う云つた。

「教會へ行ってたんです……島の内教會へ……説教を聴きに……」
 竹丸は我ながら當意即妙と思はるゝ答へをして、後から其の日が丁度日曜日であつたことを嬉しく思つた。坂谷はせいら笑ひをして、背後から竹丸の状を見てゐたが、教員は眞面目腐つた顔をして福松に挨拶した。

「島の内教會……彼處の牧師、説教は下手やが、親切な人らしいな」
 と福松の機嫌は稍直りかゝつて來た。教員は自分の白毛布を折つて進めながら、
 「教會も良いですが、少し行くと直ぐ信者になれつて、五月蠅く勧められるのが厭ですな」
 などと白々しいことを云つた。

「其の勧められるのを避ける秘傳がありますな……それは教に就いて無理な難問を出すのと、信者の不品行を攻撃するに限ります……度々難問を出すと、終ひには怖つて相手にせんやうになりますし不品行を攻撃されると、疵持つ足で厭やになるものと見えます……ですから生れ變つた様に眞の信者はまア無いものと思はれます」

斯う云ふことを冒頭に於て、福松は得意な宗教の話を始めかけた。

鬚髯の多い牧師を訪問した時に質問した、少數の神經質な正直者に熱心なる信者が多くて、多數の横着者に不熱心極まる信者が多い、と云ふことに就いては、「神は先づ正直者を懲しめて横着者を省みさせる」と云ふ拔道のあることや、「信者の状態に眼を閉ぢて神又は基督を見よ」と云ふ説もあるが、自分は何うしても信者の悪いのは教が悪いのであると思つてゐることなどを話し、

「聖書にも、樹は實によつて知る、と云ふことがありますよつてなア」と此度もなく一人喋舌り出した。

六十八

梅ばち開店の日になつた。「殘暑の砌に御座候處四方のお客様方……」と書いた美しい口上ビラが朝風に翻つて、旗や提燈で飾つた店の前は、近所の子守等の遊び場になつてゐた。

客は十時ごろからぼつ／＼來た。お信は前の夜も其の前の夜も泊り込んで男ばかり四人の雇人を追ひ使つて、客に出す器具の整理を始めとし、何一つ抜かりのないやうに準備をしてゐたが、開店の日は早朝から原料の仕込など、一際忙しかつた。福松は大きな身體で狭い店をウロ／＼して、奈良で使つてゐたのは大分肌合の違つた雇人から「親方／＼」と立てられてゐた。子供といもに二階に追ひ上げられた妻と乳母とは、時々氣にかゝる狀で、階子段の中ほどまで下りて來て見た。

午後からは客が餘ほど多くなつた。夕方になると一しきり、飾かけの場所も坐るところも悉皆塞つて、四人の雇人では兎ても間に合はぬと思たれるまでに立て込んだ。品書の中では天ぶらが一番多く通つた。しッぼく（おかめのこと）も可なり出た。蜷川の泥水に臨んだ欄干の傍へ對ひ合ひに坐り込んで、しッぼくを下物に五六本の銚子を代へた後で、鰻飯と親子丼とを一つ宛喰べて行くのに、二時間費した客もあつた。

「木屋一チイ」

と福松は、雇人の慣れ切つた調子を無器用に眞似て、しッぼくの註文を符牒で板場へ通しなぞした。

「あんなのが可かんのやよつて氣を付けんならん。これが足らなんだりしてなア」

お信は福松を窮屈な帳場へ手招きして、親指と食指とで圓い形を作つて見せながら、密々と斯う云つて、長尻の二人連の方を願て教へた。

「聖書、神と財に兼ね事ふること能はず」とあるのは其處のことや、仕様がないわい」
 こんなことをいつて、額の筋をピクピク動かしつゝ、また本箱の側へ膝行り寄り、黒革の表紙の新約全書を取り出すと、馬太傳の第六章二十四節から高らかに讀み始めた。

「人は二人の主に事ふること能はず、蓋これを惡みかれを愛しみこれを親しみかれを疎むべければなり、なんぢら神と財に兼ね事ふること能はず……また何故衣のことを思ひわづらふや、野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞めず紡がざるなり。われ爾曹に告げん、ソロモンの榮華の極みの時だにも其の装ひはこの花の一つに及ざりき……」
 この故に明日のことを憂慮ふなかれ、明日は明日のことを思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり」

と、面白さうに讀み終つて、莞爾笑ふと、

「一日の苦勞は一日にて足れりや。もう寝やう」

斯ういつて欠伸を二つ續けてした。お信は呆れたやうな顔をして、暫らく弟の顔を見守つた。妻と乳母とは、蚊に喰はれるのも知らずに、こくり／＼と居睡りをしてゐた。

寐て起きて、翌日も店の景氣は好かつた。三日目からは福松が帳場へ坐つて、お信は道頓堀の店から時々來て面倒を見ることにした。

七日ほど経つ中に、福松は竹丸へ二度葉書を出して、新店の様子を見に來いと云つてやつた。後から出したのには、「今に日本一の富豪になる好景氣を御覽下され度候」などと戯れた文句を書いて、差出人を「北の新地梅ばち主人」とした。

竹丸からは返事も來ず、姿も見せなかつたけれど、忙がしいのに紛れて、福松は大阪に甥の居ると

いふことを、ツイ忘れてゐる日もあつた。

七十

裕を着なければならぬ氣候になつたが、竹丸は相變らず姿を見せなかつた。備後町の宿へ行つて見やう／＼と思ひながら、福松は店の忙しいのにかまけて、さア今出掛けやうといふ時を見出し兼ねてゐた。

「竹さんは着物を何うしてはるのやらうなア、裕は皆汚れてゐるやうに」

妻は乳母にこんなことをいつて、子供の守をしながら様子を見に行かうとしてゐたが、土地の勝手が分らぬので、二丁ほど北の大停車場の前へ乳母車を押して行くより外は、出歩くのが恐ろしいやうに思れて、今日行かう、明日行かうと日を過してゐた。

多田の香屑から葉書が來て、後妻に男の兒が生れたことを知らして來たので、忙しい中に家中の話の種が一つ殖えた。香屑の老いてます／＼壯んなこと、後妻は若いからまだ／＼生むこと、竹丸がだん／＼邪魔にされて事によるとあの寺の相續は出來まいといふこと、それでは檀家が承知すまいといふこと、なぞが頻りに語り合はれて、お信の來てゐる時には、そんな話が殊にはずんだ。

「……二男の名は桃千代といたし候」とあるを見た時は一同が笑つた。

「香屑さんは得度せん前に松千代丸と云うたんやなア……松千代丸に竹丸に桃千代か、宛て芝居や」

「この前に私が、死んだ老母と一所に多田へ行た時、女中が病氣で寢てたので、竹丸君が徳利提げて酒買ひにお出ましや、ホ、ホ、ホ、」

「あの邊の眞宗寺では彼の寺が一番大きいので、昔は随分パリ付かしたものでやろうが、今時もう止めたら可いな、桃千代なんて」

帳場の話聲が餘り高いので、來合せてゐた客は皆此方を見た。

桃千代の誕生の通知のあつた翌日、竹丸の葉書が思ひがけもない東京から來た。福松を始め一同は、單に「東京にて竹丸」としてある其の葉書を中心にして、いろ／＼と語つた。

其の葉書の來た日の夕方に、香屑があたふたと人車を乗り付けて來たので、梅ばちの店も二階も、一時にゴタ／＼とした。香屑が見違へるほど若い装ひして年にも恥ぢぬ派手な色合のものを身に着けてゐるのが、一同の目に立つて、妻と乳母とは陸へ廻つて其の批評ばかりした。

「此方へも「東京にて」とだけ書いた葉書をよこしよつたかな、困つたことをする奴で……」

と云つたくらゐで、香屑は格別竹丸の出奔を憂へてゐる風でもなかつた。

「開店草々で取り込んで居りましたものですから、ツイ監督も行届きませいで、申譯がござりません」と福松が云ひにくさうにして諂を云ふと、香屑は却つてキマリの悪さうな狀で、

「奈良から此處へお越しになりました時、お手傳がてらお見舞に上る筈でしたが、法用の重りで……」

なぞと、自分の方から謝して出た。

お信も來て、亡き老母のこと、桃千代の生れたことが主として話題に上り、おそまき晩蔭の弔詞と新しい祝辭とが交換された。

香屑は播磨屋の隠居所で一晩泊つて、備後町の飯屋の二階へ後始末に行つたが、老いた亭主の長火鉢に凭れながらニタニタ笑つての話によると、竹丸は拂ひも總てキッチンと片付けて、同宿の坂谷と共に

何處へか行つたと云ふことで、始末すべき何物をも留めなかつた。

七十一

去年のこの思ひ出さるゝ、十一月三日の大紋日が來た、梅ばちも播磨屋も、仕込みを平常の四倍にして客を待つたが、店の様子は朝の中から氣色ばんで見えてゐた。梅ばちでは一番役に立つ雇人が一人、前の日に今日の紋日を控へて給金の前借りを強請り、店の用の濟んだ夜の一時ごろから遊びに出たまい、肝心の日に戻つて來ないので大まごつきをやつた。

「役に立つ奴は悪いことをするし、正直な者は間に合はんし……」

腹の中から絞り出したやうな小聲でこんなことを云つて、福松は妻を相手に帳場で溢し切つてゐた。其の忙しい中へ、東京の竹丸から長い手紙が來て、今度は宿所も隠さず書いてあつたので、それを讀まぬ譯には行かず、讀んでは噂をせずにおられなかつた。

竹丸は東京の郊外に住んでゐる教授の家へ書生に住み込んでゐた。教授は近頃フランスから歸つたばかりのまだ若い人らしく、新しい學問、新しい思想に練り固められてゐるとかで、早くも其の感化を受けたらしい竹丸は、文句の調はぬ長い手紙に、イズムと云ふ字を多く混へた小意氣なことを書き込んだ後へ、東京は良いところ、それに比べると奈良は死んだやうな町、大阪は大俗地であると云ふことや、基督教を始め宗教は皆詰まらぬ、神はあるものでなく、十字架は男子の△△△に象つたものであると云ふことや、福松の感情を刺撃するやうな文字を並べてあつた。

午後から夜にかけて、店は今まで例のない繁昌で、出前も盛んに出たが、福松は竹丸へ出す返事の書き工合を考へて、帳場の方には抜かりが多かつた。ヤンツとかダンドリとか、雇人仲間の符牒にあ

る悪事がぼつ／＼と行はれて、客の拂つた勘定を横取りされたり、商品を盗まれたりした。出前が帳面に落ちたことを知つて、代金をくすねた上、岡持や井を歸りに蜷川へ棄てた雇人もあつた。

其の間に福松は竹丸への長い／＼手紙を例の四角張つた字で書き出した。

「……何と云ふ珍しもの喰に候や。東京が良いとは言語道斷なり。今は帝都と相成り居り候へ共、開府は家康の狸老爺がしたと思へば、拙者の如きは東を向いて小便もしたくない。昔より何事にも初めだけ立派なことや、喧嘩でも初めに勢ひよく後にヘコタレルが東京の常にて、襪め易き江戸紫と申し候。それに東京は極々俗地にて殺風景のこと多きやうに思はれ候が如何にや。併し東京の清元二上り新内の如きは拙者大賛成のものに候。兎に角拙者も一度は行きたく方々の見物や、清元都々逸も聴きたく候へ共、何分今のやうでは十里と遠方へは行くこと出来ず候。御身はまだ第二の故郷ともならぬ中より東京を最負になされ候が、餘り最負ばかりせず、上は貴族より下は乞食に至るまでの有様に注意して、能く能く風俗人情を研究なされ候様願上候。さすれば東京のあらもよく分り申すべく候。土地の争ひは先づこれくらゐに致しおき候て、諸拙者方商賣も思ふやうに儲からず、これなら奈良に居た方がましであつたと思ひ居り候。朝も可なり早くから夜は一時二時頃まで起き居り候ても、忙しきのみにて一向儲からぬのみか、持ち出しばかり致し、何一つ觀にも聴きにも行くことは出来ず生き甲斐のない上、子供は此頃疳の虫起りてヒイ／＼泣く、妻は小言を云ふ、雇人は盗みする、多くの家族を引連れた難義なもの、賣口は東京に御座なく候や」

用の合間／＼に、まで書いて、筆を持つたま、福松は暫く考へ込んだ。

七十二

「御身は科學／＼と申され候へ共、科學も頓と當にならぬものにて、天文學でも古は天が動くと申し候も、今は地が廻轉すると申し候て、えらい相違に相成候。さうかと思へば近頃はまた太陽が地球、木星、金星などの惑星を連れて、非常なる速力で或る方向に飛んでゐると云ふ説もこれあり候由、このさきまた如何なることを云ひ出すや分らず候。今のところにては、科學も矢張宗教のやうなものにて、トの行き詰りは信ずるより外途なしと存じ候………學者でも博士でも解らず屋の多きものに候。人力車夫の云ふことも、學者博士の云ふことも、結局の理は同じことに候。學者博士の云ふことは、只用ぬゝ言葉が違ふてゐるだけに候。基督が「智者學者に隠して稚子に顯はす」と申され候は、このことに候。學者博士とて特別製の人間ではなく、矢張り仕入れの人間に候、學者とか博士とか云ふ人間は、人力車夫と云ふ人間よりも、字を書いた紙を少し餘計に見たゞけの相違に候。六七年前、東京の或る商家にて易者に家相を觀て貰ひ候ところ、裏の地下に穴があると申し候故、試みに其處を掘り候に、果して大穴があり、それを大學の學者が見て、太古穴居の蹟と鑑定致し候も、故老の言葉にて六七十年前其處に麴屋のありしこと分り、大穴は麴の室と知れ候由、また奈良にてよく聴き候落語家の話に、或る提燈屋が如何なる紋にても謎にて注文すればそれを判じて提燈を拵へると廣告し、若し謎を解くこと出来ずば提燈を無代にて與ると申し候ところ、多くの客が來り種々の謎にて注文致せしに、孰れも難かしく、提燈を取られてばかり居り候中、そんなことを知らぬ一人の老人まゐり、丸に柏の紋の提燈を注文いたせしに、提燈屋は一生懸命に考へて、鼈に鶏を書いた、と云ふことこれあり候、所謂凝つては思案に能はずの類、學者博士の研究とか學說とか申すものには、こんなことが多からんと存じ候………御身はまた行々藝術家になるとかにて、新思想とか何んとか申され候が、藝術論は到底拙者等には解らず候へ共、併し人の心と

云ふヤツは妙なものなり、數年前までは一しきり何事も唯物ばかりにて、唯心は過去の遺物として、宗教も易の如きものも、皆打ち砕かうと致し候に。近頃また獨逸あたりでは、唯心論がそろ／＼頭を持ち上げてまゐり候由。人生を極むるは唯物唯心即ち自然と自然以上に候、眞善美は有神無神論の判然と解つた上のこと、正邪一如善惡無差別、汎神論も一神論も自然以上のこと、何々主義なぞも自然以上のものあつてのことに候。先づそれまでは、後の雁が前になり前の雁が後になり、新らしいとか陳いとか、一時の流行と相成り申すべく候。基督は「我れは道なり眞なり生命なり安きなり」と申され候：：：：御身は頻りに神を惡く云はれ候が、神の十誠に、汝の神エホバの名を妄りに云ふ勿れとあり、拙者は御承知の通り最早信仰も薄く、三信七疑ぐちゐのと、ろに候へ共、神を惡く云はれると勿體ないやうな氣が致し候故、これだけは以後お止め下され度候：：：：：：歸れと申し候ても御身は今更歸る心も無かるべく候に付、多田へも申し送りて其のまゝ東京に居られるやう取り扱ふべく候へ共、此手紙をよく讀んで半可通の天狗にならぬやう能く／＼修業なさるべく候。拙者はこれまでこんなことを他人に話したことなく自分だけに考へ居り候も、今御身の爲めに斯くは長々と申述べ候。拙者の字を書くはえらい労働のやうで非常に疲れ申し候：：：：流行病に罹らぬやう、怪我過ち無きやう氣を付けて、身體を大事になさるべく候」

福松はこの手紙を書き終るのに、翌日の正午頃までかゝつた。二三度讀み返へした上、妻を帳場に坐らして、自分に投函に行つたが、其の足で銃砲店へ寄つて、豫て希望のピストルを一挺買ふことにしたけれど、金を持つてゐなかつたので、鐵砲屋の丁稚を連れて歸つて來た。

七十三

「貴下は夢ばかり見て生きてゐる人であります：：：：梅ばちが破産して、食物も小づかひ錢も無くならなければ、貴下の夢は醒めぬでせう：：：：」

と云ふやうなことを書いた手紙が竹丸から來たのは、其の年も最う暮に近く、梅ばちの店では今まで見合はせてゐた茶碗蒸しの出來るやうになつて、蕎麥も東京風の策と云ふのを調へるなぞ、いろ／＼と新らしい試をやつてゐる時であつた。

「年の行かんものを相手にして議論しても詰らんな：：：：何ぞ一つ教はると鬼の首でも取つたやうに直き云うて來るのやもの」

福松は斯う獨言を云つて、竹丸の手紙を帳場の机に擴げたまゝ、熟と見入つてゐた。

「竹さんの手紙だツか。東京へ行きはつてから、大分良う書くやうになりましたな」

と云つて妻は帳場の前に蹲踞んで、向ふむきになつてゐる手紙を自分の方に向けた。

松は子宮の中をまで見究めやうとするが如き目付きをした。

四人續けて年子！ 福松は唯それを考へたゞいで、嬉しいとも哀しいとも、そんな心は浮ばなかつた。

「下手な字やないか。ペンなぞで書いて：：：：香屑さんは手がえ、竹丸はあかん、こんな解りにくい字を書くものやない」

自分にも何を喋舌つてゐるか分らんと云ふほどの氣のない答を、毎もよく云ふ言葉として、福松はまだ妻の腹に目を付けてゐた。

「摘み喰ひをしたり持ち逃げをしたりする雇人がえらい、力んで働くものは馬鹿や。と書いておますな、何故こんな逆さまを云うてだすのや……私の読み違へだすか」

妻は顔を曇めて、竹丸の手紙の終りに近い方を口の中でブツ／＼と拾ひ読みしながら斯う云つたが、「怠惰者の天國……て、何のことだす、可笑しいことを書く人やなア」

と頓狂な聲をして笑ひ出した。福松は難かしい顔で、

「何を云ふのやら、あの男の書いて来るのは、狐を馬に乗せたやうなことばかりや……それでもこれだけのことが一月や二月東京へ行た。けて云へるやうになつたのがえらい、賢い男や……私等あの年ではまだ子供やつたがなア」

と感心する風をして云つた。四人連れの客が寒さうにして入つて来て、帳場の方をゼロ／＼と見つゝ、奥の方に坐を構へて、暖かいものと慄へた聲で雇人に注文した。

「貴耶、お乳母はんは何うしまへうかなア。もう乳は出やしまへんし、少しでも口を減らした方が宜しおま、よつて……」

「お前さへ好けれや、暇出したて可えが、云ひにくいな」

夫婦は聲を密めてこんなことを暫く相談し合つたが、何の結着もつかなくつた。

「……昨年も申し候通り、御身は剣難の相がある故、諸事控へ目にして注意なさるべく候。また人相の上にては御身の前齒の間の隙き居り候が甚だ悪しく候……」

斯う云ふ手紙を福松は竹丸の許へ出した。

先程買ったピストルを、毎日のやうに拵くつては喜び、寝る時には必ず薄團の下へ入れて、妻や乳母を氣味悪がらして居たが、打ち試しがして見たくて耐らなくなつたので、一日、身體を練り合はし

て、甲山の奥へ出かけた。

七十四

夜になつて、甲山から歸つて来た福松は、非常に疲れた風で、顔の色も蒼味を帯びてゐたけれど、店の忙しい盛りで誰れも氣の付くものはなかつた。大きな身體の、黒い二重廻しの前の釦を外したままピストルや紙入れの押し込まれた懷中を膨らまして、二階の明るい電燈の下へ仰向けに寝轉んでゐるのを、小ひさいお律とお花とて耳を引つ張つたり、鼻を撫でたりしてゐた。

「何うかなさいましたか」

稍暫くしてから、乳母が階子段の音をさせて来て、お花を膝に載せながら斯う問うた時は、

「山賊の棲家へ入つて、残らず退治て来たんや」

なぞと、戯ふれるほどに元氣を回復してゐたが、言葉に呼吸切れのする模様があつた。

「こないに動悸したのは生れてから初めてや……死ぬかと思つた」

一時間ほど後に福松は階下へ下りて、肥えた胸を押へつゝ、妻の水を求めてコップに一杯飲んだ。

「もう癒つたんだすか……久し振りで遠路をしなければつたよつて、身體に利いたんやらう。明日診て貰うといははれ」

妻は漸く夫に物を云ひ得る隙を得たと云ふやうな顔をした。

「もう好え。醫者へ行くと仰山に云ふよつて厭や」

と、福松は帳場に坐つて、懷中のピストルを取り出し、革の袋に入つたのを握つて、仕方話を始めた。

「甲山の奥の寂しいところで、松の樹を狙うて打つてみやうと思つたが、怖いやうで引金が引けん……」

……まだ鐵砲と云ふものを打つたことがないので、さアとなるとなかく引金が引けんものやなア：
……手が慄へて仕様がな：
……人が来やへんかと思つて方々見廻してから、思ひ切つて……やつ
たんやが、プスツと云ふくらぬで、さう大げな音もせんし、彈丸の中つたところを見ても、一寸とは
入つてゐんやうやつたな」

こんなことを云ひく福松は、ピストルを袋から出し、二つに折つて彈丸を抜き取りなぞした。雇
人は皆火鉢の暖い帳場の前へ集つて来た、縁日の臘胸賣りを見るやうにそれを見た。

「これさへあれば、どんな奴が来たて負けるもんか……常陸山と喧嘩したて……スメンサーと議
論したて……大丈夫や……これを一つドンとやればなア」

斯う云つて、彈丸の抜いてあるピストルの引金をカチ／＼と引いて、方々に狙ひを付けに。銃口を
向けられた雇人は、眩しさうにしてそれを避けた。

月々二十圓、多い時は四十圓も持ち出しをして、梅ばちの店は商賣を續けてゐた。

春が来て冬が去り、夏が来て春が去つて。梅雨で濕っぽい幾日か、續く中に、妻は二階の九疊の片
隅の産聲で女の兒を生んだ。

「……愚妻こと去る△時女兒分娩、母子とも健全に候。諺に女の子三人持てば家の棟が墜ちると申
すことこれあり、拙者方もいよく棟の落し人が出来申し候……商賣相變らず不印……」

なぞと、福松は早速竹丸の方へ葉書で知らした。この時竹丸は教授の家を出て、或る著述家の許で
フランス語を習つて居た。

福松の心臓は快い方でなくて、醫者にかゝらずには居られなかつた。

「ゆつくり歩いてゐると何んともないが、少し急ぐと呼吸切れがして動悸が高まる……もうあかん
……」

「この秋から手綱を引き締めて、うんと儲けさしてあげる……これまでに足したぐらゐ直き取り戻せ
る……」

姉弟は全く異つた心で將來を見て居た。

七十五

火事！ それは大阪で幾十年目幾百年目とかの大火事であつた。

其の火事に梅ばちも焼けた。夢のやうに焼け出されて、夢のやうに姉の家——播磨屋の隠居所——
へ多くの家族を連れて避難した福松は、一週間ほど死んだやうになつて、便所に近い四疊半で寢てゐ
たが、十日目ごろからぼつ／＼と動き出して、先づ長い手紙を書いた。

「……はじめて警鐘の音を耳に致し候は三十一日午前四時過ぎに候……拙者方と出火のところと
は大分隔り居り候模様故安心致し居り候も、半鐘は頼りに鳴り、車の通る音もいつもの朝よりは喧ま
しく、何となく騒がしく相成り候……」

御承知の如く、拙者方近傍は北の新地遊廓にて朝は皆おそく候が、拙者方も前夜二時過ぎに一同就
寢致し候故、普通ならば朝寢致し候筈に候へ共、何分半鐘が鳴りて世間の騒がしきと、殊に當時は月
末節季と申し、賣掛け諸拂ひ等の爲め世話しき爲めとにて、午前五時頃に拙者が先づ起き出て、蜷
川の橋の上より東方を眺め候に、黒煙凄まじく立ち昇り居り候も、凡そ二十四五丁ぐらゐは隔り居る
見當に候上、其の間には細くとも堀川もあり、廣き新道もあり、また蒸氣ポンプもありて、これまで

十人以上を焼きたる火事は稀なる由に聞き及び居り候故、安心して仕事にかゝり、節季にて饅飩屋は一寸賣前に候へば、商品を平日よりも倍に仕込みて商賣を始め申し候……

午前十一時頃に來り候客が、えらい火事ぢや、何處も焼けた、其處も焼けたと、名高い建物の名を申し候へ共、まだ、安心致し居り候ところ、また來りし客の話にては、火がもう堀川を超えて、老松座も焼けたる様子にて、戸外は大變の人通り、皆東へへと走り申し候……

午後三時には火が随分近く迄來たと申し、また工兵隊が出て家屋を壊し居る故、最早鎮るであらうかとも申し候——後に拙者考ふるに、工兵は却て邪魔と相成りしこと、存じ候。家を壊したものを其のまゝに致し置き候爲め、それに火が附き候。壊したものを一々取片けたら宜しく候も、それは出來ぬ故、壊しても駄目のやうに存じ候。また多くの兵士がッロ付き候爲め甚だ妨げに相成候て、道具の片付けに不便を感じ候——拙者方店は、火事見舞に行きたる歸りの人や何やかやにて能く賣れ候間、雇人の云ふに、親方この様子では火事が止んだらドット客が來ませうから、代物の手廻はしを致し置きては如何とのこと、拙者もそれ可からうと申し候。雇人は矢張り四人にて、中には窃と火事場を見に行きしものもこれあり候……

朝より東風烈しく候に付、午後五時頃には、煙と砂埃りとて眼を痛めたる多くの消防夫が拙者方の前へ來り、また蒸氣ボシプが損じたと申して引き上げ來るもあり、拙者方店へは眼が痛いから洗はせて呉れと申して、ドヤ／＼と入り來り、狭い店が消防夫で一杯になりて商ひも致し難く相成り候……

姉方よりは雇人が多く來て呉れ候も、拙者はまだ大丈夫と存じ、道具の片付けは一寸見合はせて貰ひたしと申し候故、皆々喜びて火事場へ見物にまゐり、また姉方に繋がる親類知人などにて見舞ひに來り候ものも、拙者が落ちつき居り候故、他への見舞ひやら、火事場見物やらに、いそ／＼とお祭り

にでも行く様にして出かけ申し候……」

七十六

「……これも姉方續き合ひの親類にて、新町遊廓の元取締致し居り候もの、拙者方へ見舞ひに來り候ところ、業體柄とて多くの消防夫に顔を識られ居り、消防夫は皆「ア新町の親方が居やはる」と申し、また「親方、夜明けから何んにも喰ひまへんよつて、御親類のお店なら蕎麥でも饅飩でも喰はしとくなはれ」と申し候故、新町も拙者も、サア喰へ／＼と申し候ところ、入り代り立ち代り澤山の消防夫が喰ふこと／＼。其の少し前に鉢類等商賣用の壊れ物だけ一寸片付けかゝり候も、これが爲めまた鉢類を取り亂し候上、狭い店に多くの消防夫の入り込みしこと、て、他の道具の取片付けに邪魔になり、大に困難致し候。消防夫の中には店へごろ／＼と寢轉び居り候ものこれあり候……

其の混雑中へ姉がまゐり、子供だけ先きへ連れ歸ると申し候に付、混雑中に人力車を探し、三人の子を姉に托し、乳呑兒を抱きたる妻とも、道頓堀へ送り申し候。妻がモット道具類や衣類を片付けてからでなくては行かぬと申し候て、なか／＼剛情に候を、乳呑兒がありてはと、混雑中に姉二人に説諭するに甚だ骨が折れ申し候——乳母は最早居らず候——この人力車賃金一臺一圓五十錢づい、平日なら二十錢か二十二三錢ぐらゐ……

この時風は少しく東北になり、火は蛭橋を南へ越え、堂島へ渡り候模様にて、二階から見れば煙は西南へ向ひ候に付、見舞の人々も拙者もこれなら多分免れるであらうと申り居り候に、やがて風はまた正東と相成り候て、火は最早拙者方より二丁餘り東の曾根崎橋まで來り候。消防夫は既に去りて、工兵が拙者前方に集合致し居り候……

其の少し前まで混雑中の道路を電車が通ひ居り候て、人々の右往左往に走り廻り居り候間を、チリ／＼と鈴を鳴して轟々と行き候には、見てゐてひやく／＼致し候故、拙者は先づ電車を止めやうと存じ、近所へ電話を借りに行きて掛けやうと致し候も、交換手が何うしても出て申さず、止めに致し候其の中自然に電車も止り申し候………

火は次第に迫り來り、火の粉は雨の如く、到底免れぬと悟りて、いざ片付けやうと致し候時は、手傳人が大半居らず、日は暮れかゝりて屋内暗く相成り候も電燈は點かず、家は二階なれども、下屋になり居る川端の物置を合はせて三階のやうになり居り、一ヶ所の狭い階子段で實に困り申し候。其處へお濱の養子にて家出中の幸助と申すものが堺の南濱寺にて號外に驚き駈け付けたと申してまゐり候等、思はぬ人が手傳ひに來て呉れ候。養子は御身上京後手切の話にて一二度會ひ候のみなるに早速來て呉れ候。人情の厚薄は斯う云ふ時に分り申し候………

轉住後僅か一年になるやならずにて、知る人も尠く、荷物の預け場所に困り候が、差し當り道頓堀よりは近い、新町へ持ち行くことに致し、借りて來た小車に積みて運び出し候へ共、それとても道が可なり遠く候故一度運べば橋々が焼け落ちて戻ること出來ず、後の道具を如何に致し候はんかと、最早窓より煙の入る二階にて、近く家の崩れる音を聞きながら、幸助と相談致し、中の島公園にしやうか、梅田停車場前の廣場へ運び若し其處が危くならば、また他に移すことにしやうかと、今にも火の付く場合に種々迷ひ候上、漸く停車場前の廣場へと決斷致し候て、二階の窓を外し、簞笥などを道路へ吊り下し候………

道路へは兵隊が火の粉を浴びつゝ長く列を作り、將校は劍を抜きて何か命令を致し居り、喇叭が鳴り響きて、拙者は何となく氣が變に相成り候………」

七十七

「……拙者一人最後まで残り居りて、幸助始め手傳人に道具を運ばせ候も、目ざす停車場前の廣場は既に幾百人とも幾千人とも知れぬ避難者にて、銘々道具類を持ち出しては積み重ね居り、後より運ぶものは何處を置場所にせんかと當惑致し、漸く幸助の慮ひにて、柳の樹の前と置場所を選定致し候ところ、手傳人の中には、柳の樹の前を、柳の樹の下と解し候ものもありて、置場所が分らず、折角運びたる道具を持ち戻りなぞ致し、また僅か二丁餘のところなれども、名狀し難き混雑なれば、一度まゐり候ものは急に歸るを得ず、二階より下したる道具は階下にありたる道具と、もに道路に積みありて一向運び出しの掛が行かず、火の粉の降り來ることいよ／＼劇しく、兵隊の喇叭はますます／＼鳴り響き巡査は血眼になりて、早く逃げよと申し候………

大釜鍋は其の前の蜷川へ沈め、鉢等壊れ易きものも川または井戸へ沈め候が、其の外四五百個の鉢は先刻消防夫に喰はせたまゝ大桶に山盛に入れあり、日は全く暮れて、火の手は間近く、ボン／＼と燃え落つる音と、ワア／＼と人の叫喚する聲とが一つになりて、ゴッ／＼と嵐が津波でも押し寄せ來るやうに覺え、最早人の顔なぞは能くも眼に入らぬやうに相成り候。其の中にも巡査は附き切になりて、早く／＼と急ぎ立て、引き立てるやうに致し候故、是非に及ばず、運び残れる小道具類や夜具蒲團を其のまゝに棄て置きて、後を振り返り／＼、人込みの間を停車場の方へ逃げ申し候………

幸助が道具類の置場所を柳の樹の前と申し候は、些細なことなれども言葉の届ぬところあり、前を下と誤り候ものありしも無理ならぬことにて、これは柳の樹の向ひ（向ふ側）と申すべき筈なりしな

ぞと思ひつゝ、其の邊には一本より無き柳の梢を、家の焼ける焔の明りに眺めて泣き顔を致し候……

雇人四人の中二人は口入屋より来りしものに候が、其の一人は薄情なものにて、自分の僅か一二枚の衣類を持ちて福島野田へ預けにまゐり候。また他の二人は拙者方の道具を親類へ運び出し候まゝ、歸り来らず、それは無理もなく、田舎者にて地理不案内の爲め道が埒らず、漸く歸らうとすれば、橋々が焼け落ち候て、如何とも致し方なかりしものと存ぜられ候……

午後十一時過ぎに幸助は、食物を求め来ると申し候て立ち去り、其の後は拙者一人と相成り、辛うじて運び出し候荷物の番を致し候が、柳の樹の側の家に火が付けばこの荷物も駄目。東に西に焔が立ちのぼり、殊に西の火の手は熾んに候。腹は空る、盛夏の候に候も浴衣一枚にては風の爲め寒く感じ候……

不圖持出し候荷物の中に商ひの食物あるに心付き、ゴタ／＼して荷の中に手を入れて、蒲鉾一片と生の鯉鮓とを攫み出し候も、砂埃りにて喰へず、吐き出し候。何分一人故荷物を置いたまゝ、食物を買ひに行くことも出来ず、近邊に賣る家は無し。午前一時過ぎになりて小雨ばら／＼と降り来り、寒さは増す、腹はますます減る。四邊は至極騒がしく候も、身は深山幽谷に在るやう思はれ候……火災前より病氣なり、年も人生の半ばを疾くに過し、多くの子供を持ちて、今は命の綱の商賣を失ひ、この後は如何に致して世を送らうかと、過ぎ越し方や行末を思ひ、悲しく相成り候て、懐中には寸時も離さぬピストルがあり、いろ／＼に考へ申し候……」

七十八

「……拙者若し基督教を少しも知られば、此時懐中よりピストルを取り出したるべく、取り出した上は、どんなことになり居るや分らず候。着物の上から固くピストルを袋のまゝ肉に喰入るほど押へて夜を明し申し候。ガラクタ道具の間に腰を下して、雲まで赤くなりたる焔を眺めつゝ、自殺は罪惡である、卑怯である、と口の中で幾度も唱へて自ら勵ましつゝ、諸の感慨に打たれ申し候。泣くにも泣かれずとはこの時のことに候……」

夜明も間近き頃、矢張焼け出され人と見ゆる貧乏長屋の女房らしきものが、背中の兒にワ／＼と啼かれながら、自分も泣きて、小走に鍋らしき物を提げて行き候が、拙者の直ぐ傍を通り申し候。これにて拙者は世に自分よりもまだ不幸の人あるを思ひ、且は其の女房の負へる子供の状を見て自分の四人もある兒のことを考へ、子供の成長を見届け度くなりて、自殺は全く斷念致し候……

後にて思ふに、この女房は拙者の命の親。また思ふに、この時若し一思ひに自殺してゐたら、これから後の困難と苦痛は無く、今頃は天國か西方淨土か高天原かまゐり居りて、樂隠居致し候ものと殘念にも存じ、あの女房が邪魔致しなぞと考へ居り候……

女房の後姿の見えぬやうになりし時、幸助が握飯澤庵漬等持ち来り、それを喰ひながら相談致し候て、眼の前にある荷物は一時兎に角姉の隠居所へ運ぶことに定め候も、自分にて一つ／＼運ぶことは出来ず候故、夜の全く明けてから仲士を雇ふとて、炎天に傘もなく焼跡を通りて尋ね廻り候が、皆他に雇はれて居らず、ワ／＼致し居り候折の暑さ、日光と焼跡の火氣の爲め焼き殺されるやうで耐つたものにあらず候。漸く姉方の知れる運送屋の周旋にて荷車一臺五圓、三臺十五圓にて、南の隠居へ運ばせ申し候……

幸助と二人にて拙者方の焼跡へまゐり候ところ、前に申せし消防夫の喰ひ殻の鉢四五百個を大桶へ

入れたまゝ逃げ候其の鉢が、少しばかりの壊れよりなくて残り居り候は、實に不思議にて奇蹟と存じ候。態々川へ沈め置き候鉢類は、橋の錆物の欄干が墜ちたる下になりて粉微塵に相成り候。其の他鐵器類は残り居り候も銅器類は少しも無く候……

四五日前、八日目に焼跡の地中一尺ほど下より掘り出し候脇差しの身は未だ熱く候て、皆々感じ入り候……

拙者方店の焼け候は、三十一日の午後八時過ぎ殆んど九時前と存じ候。下屋に入れありし道具は大槓焼失致し候、二階にありし着物なども紋付類を除きて平常着は悉皆焼失致し、夫婦子供まで着のみ着のまゝ、下駄蝙蝠傘等翌日より買ひ求め候て、あれがあつたら、これがあつたらと申し居り候。殊に拙者書物を多く焼き候は取り返へしが付かず、實に残念に候……

夫婦に子供四人、雇人一人、都合七人が、只今は茫然と姉方の厄介に相成り居り候が、姉方も東西に同業者ありて其の間に挟まり苦戦中故、拙者も氣兼苦勞に候。世の中は一國にせよ、一家一人にせよ、苦勞の絶えぬものに候……

この先き如何に致してよきや。火事後は妻までが拙者を侮り、姉と妻との折合ひも悪しく、妻を叱り候へば却つて逆ひ申し、腹を立つれば胸の動悸が高まり候。懷中が淋しくなると、人が皆拙者を馬鹿に致し候……

福松はこの手紙に四日かゝつた。

七十九

竹丸からの返事は十日も待つた後、葉書が一枚來た。それには只有り觸れた火事見舞の詞が書いて

あるだけで、焼けた梅ばちの宛になつてゐたから、附箋がドツサリ貼つてあつて、熱い焼跡を集配人が汗水流しつゝ、あちこちと持ち歩いて探し廻つた状が思ひ浮べられた。

晝飯を不味く喰べた福松は、膳と枕とを入れ代りに取り寄せて仰向に寝轉びながら、竹丸からの葉書を幾度も／＼も取り上げては、云ひ知れぬ物足りなさを感じた。

四疊半三室の細長い隠居所は、四人の子供で朝から騒がしかつたが、正午過にはそれが皆小ひさな枕を四つ並べて寝たので、一しきり静かになつて、妻は土間で焼け残りの道具類を調べ、

「これは焼けたとばかり思つてたな」

なぞと頓狂な聲を出してゐた。いろ／＼の物賣りが、路次へ入つて來ては出て行つた。

福松は物に驚いたやうな風に突然起き上つて、箆笥の上から硯箱と巻紙とを取り下し、何かの大きな空箱を机にしまった手紙を書き出した。

「……此の節はもう死を待ち居り候。思ふに我等何の爲めに生れ來り候や解らず。よく／＼不運な人間に候……」

其の手紙には斯う云ふ文句もあつた、がそれを投函すると今度は返事が間もなく來た。

「……人間は災難に遭はぬと真面目にならぬものです。貧しきものは幸なりです。あなたは今まで世間の事ばかり見て、宗教だとか道徳だとか、夢のやうなことのみに考へ、自分を留守にして居られました。私はあなたに向つてソクラットの所謂「汝自身を知れ」と云ひたかつたのです。併しあなたも其は苦痛の爲めに漸く自分を見るやうになりました。これはあなたの爲め祝すべきことです……」

誰れに教はつたのか、例のペンで書いた拙い字でこんなことを並べ、終りの餘白に「二伸」として、

これは竹丸獨りの考へらしく、

「地球に人間の居るのは、腐つた團子に虫が生いたやうなもので、元來下らないのです。災難だ貧乏だと云つて、騒いだり泣いたりする價値もありません」

とあつた。福松は待つてましたと云ふ状で、姉の店から頼まれてゐた帳面の整理を棄て、置いて、直ぐ手紙の筆を執つた。

「……貧しきものは不幸に候……拙者今の詫住居は、橋一つ越えると、芝居、淨瑠璃、落語、活動寫眞、また大小料理店に鮓店、團子店、實に眼の毒に候。おまけに近所は遊廓にて、赤の蹴出しがチラ／＼……世間に見ると、薩摩上布の單衣を着て上等パナマ帽を被り、美人の手を引いて散歩致し居り、まことに癪の毒にて、金が欲しく相成り候……聖ボウロは、新約羅馬書第八章に、肉のことを念ふは死なり（地獄行き）靈のことを思ふは生なり（天國行き）安きなり、と申し候が、拙者は今迷ひ居り候……腐つた團子に虫がわいたなんのとは、眼の附けどころが小さい……空間時間原因結果の理を能く、考へられよ。二と二を合すれば三とも五ともならず、矢張り四なり……」

こゝまで書いたとき、寢てゐた四人の子供の中が一人、眼を覺して啼き出したので、あとの三人もそれに誘はれて、四人が一時にブツと聲を立てた。妻は何處へ行つたのか、土間には見えなかつた。

八十

福松は自分の眼の前に、東京の賑かな町の状が見えて來たやうな氣がした。さうして自分が頼りに

手紙で争つてゐる相手が、年の行かん竹丸ではなくて、立派な、名高い教授や著術家であるやうに思はれ、まだ會つたことのない、髭のあるえらさうな顔が、竹丸の上京したばかりに世話になつてゐた家の先生として、また後に住みかへたところの主人として現はれ、いろ／＼自分に議論を吹きかけてゐるやうな心になつて來た。乃て福松は一生懸命に筆を走らして、一々其の議論に答へた。

「……科學は智慧の遊び、宗教は感情の遊び、神經の戯れに候。人間のすることには兎角遊戲が多く候。遊戲に苦しき遊戲と樂しき遊戲があるだけの相違に候……」

人間に智慧あれば、其の原因たるものに智慧あるは必定に候。何か萬物の原因たる智慧のあるものがあるに相違なし。我あると思ふ故に我ある、の類に候……

大日本帝國の首府の眞中に居ながら、造物者たる上帝は誰が造つたとは何事ぞ。知らずば云つて聞かさんよッく承はれ、上帝は完全である、完全なるものを何うして造られるぞ。彼れ造りものならば不完全なり。若し上帝を作りしものと云は、それを造つたものは、と、定めて溯るであらうが、上帝は永遠より永遠に存在するものである。造りしものは、とだん／＼溯るは無端説と云ふて哲理を知らぬ者なり。上帝の存在を知らぬ者は、森田悟由でも釋雲照でも青山胤通でも桂でも西園寺でも山路愛山でもスチルネルでも田山花袋でも、拙者の眼から見たら、三歳の小兒同様なり（その原因結果の理が解らぬ故）。久松留守より鎮西八郎宿と書き給へ、御身の信仰は其の時代のものなり……

佛教ではこの世を穢土火宅と云ひ、基督教では惡魔の世、涙の谷と申し、また昔からこの世は善人の泣き場所と云ふ。拙者も元より樂土とは思はず候が、何分にも男女の、ある以上は頼みはずとも我等は出て來り、出て來りし以上は何とせればならず。他人の妻でも美人は美人と見え候

も、自分は妻は汚くとも他人に任せたくなく候。また澤庵よりも鰻が食ひ度く候故。金が入用に相成り候……

神は人に智恵分別自由を與へたと云ふが、たとへばこゝに立石ありとするに、通行人は善惡二股の追分道の立石を見て、善き道に行き度きも文盲にて立石の文字が讀めぬ故、一寸見たところ廣く行き易さうな惡しき道を行くものと思ひ候。若しこの追分道の道標が石でなくて、生きた人間であつたら、親切に道を教へるであらうと存じ候。基督教では立石の文字の讀めぬのを、字を習はぬ罪ぢやと致し居るやうに候。故に拙者は基督教を立石の如しぢやと申し候。死んだもの、即ち石の如きものと申し候。上よりの能力は無きものと信じ候……

梅に従ひ柳に靡き、其日／＼の風次第か、引寄せて結ばば柴の庵かな解けば元の野原なりけり。また、年毎に咲くや吉野の山櫻木を割りて見よ花のあかりかな。引き寄せて結ばば柴の庵なる其の意匠を誰れがするか、花のありかの分からぬに花が咲くは何故かと存じ候。飲めや唄へや、コリヤ……

四人の年子が重なり合ふ様になつて、火の付く如き聲で啼いてゐるのを、素知らぬ風で手紙に向つてゐる夫の蒼白い顔を、外から歸つて来て見た妻は、腹が立つよりも、怖ろしさを覺えて、冷水を注がれたやうな氣になつた。

八十一

其の夜、姉のお信が来て、便所に近い四疊半で團扇を使ひながら、福松と妻と三人で今後の相談をした。焼跡はバラツクを建て、其處で商をしやう、總べての構へを前の半分にするれば、客は尠くと

も何うにかなるであらう、と云ふのがお信の意見で、

「これなり廢めて仕舞ふのも胸糞が悪いやないか」

と、彼女は力んで云つたが、福松はニヤ／＼と笑つて、他人のことで相談でも受けてゐるやうであつた。

「大阪が怖うなつた」

稍暫くしてから福松が斯う云つたとき、次の室の蚊帳の中の嬰兒が啼き出したので、妻は添乳に急いだ。間に合はせに求めた狭い木綿蚊帳の中から、夫の舉動に目をつけて、子守唄をうたつてゐた。

話は何うとも決らずに夜は更けた。

「今夜はお濱が早寝の番やよつて、私はもう去ぬ。まア緩然考へときや」

お信が斯う云つて立つて行くのを、福松は黙つて上り口まで送り出したが、

何時の間にか、「はりまや」と赤い字を現はしたアラ／＼提燈の破れかゝたのを持ち出し、

「蠟燭／＼」

と痛聲を出して、提燈に火を點け、これを持って行けと氣を利かした風に、お信の眼の前へ差し出した。

「惡慮しいなや、賑かいたこを橋一つ越えるのに提燈が要るかいな」

お信は何心なく斯う云つて笑つたが、暫く土間に立ちながら弟の容子をつく／＼と見ると、素直に提燈を受け取つて、考へ／＼門口を出た。

「これを持って行かな可かん」

福松は後から追ッかけて、更に三本の蠟燭を姉に渡した。

お信が歸つてからお濱が来て、妻と密々話をしてゐたが、ヒストル、刃物なぞと云ふ言葉のチヨイ／＼聞えるのを、福松は何の氣も付かぬ風で、子供に混つて帳蚊の中に大きな裸體を横へてゐた。

「大阪が怖うなつた」

と云ひ續けてゐるだけで、福松には其の後別に著るしい變りも見えなかつたけれど、お信は最早バラツクの開店を勧めずに、奈良へ歸つてゆる／＼養生するやうに云つた。

「……近世學術の教ゆるところに據れば、人も動物の進化したものである。人間の世界と蟻や蜂の世界と大差はない、宇宙の無限大に比較すれば同じことだ。世界が蟻や蜂の自由にならぬやうに人間の自由にもならぬ……但、蟻や蜂は其の能力及ぶ限り生活狀態を齊整して、進歩の極に達したから、我等のやうな醜態も苦痛もない、我等はまだ進歩の途中に在る、前途に對してストラツグルしなければならぬ。我等はこのストラツグルに活きやうとする……現世が辛らいからと云つて、慰藉を虚偽の宗教、天國に求めるほど憐れなものはあるまい。我等は只道理に訴へ、學術に訴へ、道義に訴へ、感情に訴へ……」

こんな手紙が東京から來たのは、福松一家が、奈良へ出立しやうとする日の朝であつた。名は竹丸であるが、手蹟は異つてゐた。福松は只せゝら笑つた。

弟の機嫌が割り合ひに好いので、停車場まで送つて來たお信も安心して別れた。九月の晴れた日で涼しかった。

十年も異郷に暮したやうな氣になつて、窶れ姿の福松夫婦は、一年振りに奈良の家へ歸り着いた。お律もお花も生れたところを忘れて、妙な顔をしてゐた。

福松は初男を抱き、妻が嬰兒を負つて、ザラ／＼した畳の上を歩き廻つた。

去年大阪へ立つ時に貼つた、佛壇の扉の封印が、元のまゝに白かつた。——日が暮れた。

——完結——

大正四年六月廿五日印刷
大正四年六月廿五日發行

定價壹圓拾錢

不許複製

著者 上 司 小 劍

發行者 植 竹 喜 四 郎

印刷者 細 萱 武 四 郎

發行所

東京市神田區
佐久間町四丁目

植 竹 書 院

振替東京二二九五三 電話下谷三四一九

印刷所 東洋印刷株式會社

■ 現 代 代 表 作 叢 書 ■

第 二 篇
第 五 版
鈴 木 三 重 吉 著

第 一 篇
第 十 版
森 田 草 平 著

縮 刷
珊 瑚 樹
(三 重 吉 傑 選 集)

縮 刷
煤 煙
(四 卷 合 本)

内 容
櫛 雨 の 洞 赤 女 烏 小 一 枚 の 瓦 猫 血 三 津 さん

● 今迄著した十数冊の小説集の中から著者自身に最も気に入つた作物ばかりを選び集めて縮刷したものです。讀者は本書一冊を讀みて、赤門派隨一の作家三重吉氏の精神を會得するを得べし

● 傑作煤煙を知らざるものは未だ現代文藝を語るに足らず。唯この名著の出版者があまりに發賣禁止の厄を恐れたる爲め前後二卷の合冊となして徒らに價格の増漲を來し、完成に數年を費したる等讀者をして購讀に多大の不便を與へたるは實に我が文界の恨事なり。今や合本縮刷成る。即ち價格に於て從來の三分の一の廉價となり裝幀に於て會心の美本となる、乞ふ一本をそなへよ

菊半紙四百十餘頁
總クロース木版
手刷十數度刷
全六號二頁七百餘字
定價九
五錢
送 費 八 錢

新形總布極美本
全 六 號 活 字
定價九拾錢
送 費 八 錢
特 製 定 價
壹 圓 六 十 錢
送 費 八 錢

■ 書叢作表代代現 ■

第三篇

著 郎一潤崎谷

刷 縮

麟

(集作傑郎一潤)

容 内

小 説
麟

The affair
Two wat hes
怖

○ 誕 信 象 戀 春
戲 西 生 曲 知 海 邊

● 著者が自ら會心の作として撰集せられたるもので實に氏が代表作である。同時に殆んどその全集を見るべきが出来る。

結城素明裝幀
横山、長野四大
安田、平福家畫
羽二重表紙
箱入頗美本
五百五十餘頁
定價壹圓廿錢
送費八錢

第四篇

著 袋花山田

刷 縮

傘・春小

(集選袋花)

容 内

幼 別 別 幼 幼
き れ て から 死 兒
の ま まで 町 山 蒲
の 灸 の 椿 の 花 團

● 我が純容觀派の文學は著者によりて完成されたり、實に著者の創作は明鏡の如し、本書は其精を蒐めて遺漏なきを信す眞に萬代に傳ふべき傑作集なり。

箱入絹布表紙
極美製本
全一冊四百頁
定價九拾五錢
送費八錢

■ 書叢作表代代現 ■

第五篇近刊

正宗白鳥著

裝幀頗優美箱入美本
全一冊全六號縮刷

定價 壹圓

送費八錢

容 内

まぼろし

泥人形

二家族

挿話

まぼろし

深刻なる藝術は著者の創作に求むべし、本書は著者の作品は著者の自許するもの、悉く讀書界を風靡せる傑作にして、何人も一讀すべき著者獨特の傑作集なり。

長田幹彦著

裝幀頗優美
全六號縮刷

箱入美本全一冊

定價九拾五錢

送費八錢

舞

姫

容 内

零落僧尼

雛雲薄浮

舞昇の窓

お邊山

惡僧光珠

京の舞姫を描いては妖艶無比、深泊の藝術家を拉しては凄絶無比、紅燈の雪深き北の國に思を密め、或は我が文壇唯一の抒情佳人なり。

■ 現代表作叢書 ■

第七編 再版 內容

田村俊子著

あきらめ

- あきらめ
- 木伊乃の口紅
- 生血
- 憂鬱の匂
- 魔作者
- 炮烙の刑
- 女

「あきらめ」は、大阪朝日新聞で金二万圓の懸賞小説募集に第一等に當選した長篇の傑作であつて、他は其れから後の最も苦心した而して評判のあつたもので著者自身も撰擇した即ち會心の作のみである

菊半載四百頁 高雅なる美本
箱入絹表装
定價九拾五錢
送料八錢

第八編 新版 內容

泉鏡花著

菖蒲貝

- 春畫
- 歌行燈
- 春晝後刻
- 夜行巡查
- 袖屏風
- 處方秘箋
- 三味線堀
- 玄武朱雀
- 沼夫人

津田青楓氏裝幀
木版數度刷美本箱入
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

■ 現代表作叢書 ■

第九編 新版 內容

小山内薫著

一里塚

- 病友
- 十三年
- 手
- 眞空
- 粘土
- 乞食
- 後悔
- 捕縛
- 大川端

紺木製表紙
箱入、四百十頁
定價壹圓
送料八錢

第十篇 近刊

上司小劔著

お光壯吉

- お光壯吉
- 太政官
- 木像

定價壹圓拾錢

最近文壇を風靡せる著者が最も得意とする洒脱にして深刻なる上方藝術に對しては何人の模倣をも宥さざるは言を俟たず。眞に著者の藝術を探索して上方藝術に到着し著者が今日に及ぶまでの凡ての傾向を忌憚なく表白せるは本書である。歛むるころ「お光壯吉」の圓熟せる筆致を以てせる情調極いなき一大雄篇より最近の作「太政官」に及び「木像」の最大長篇を以て終る著者の全藝術である。

■ 現 代 代 表 作 叢 書 ■

第十一篇 德田秋江著

閨怨

内容
 執着 疑惑 疑髮 疑屋
 青流 仇な 流さ 流け 流草
 津の國屋

別れたる妻
 に送る手紙

津田青楓氏装幀
 絹表紙油繪木版刷
 定價未定
 六月中旬發行

第二十二篇 中村星湖著

小年行

内容
 少年行 親はづれ 町はづれ 村の西郷
 行路病者 一切の事 烟切の事 枇杷の實

むかしの家 瀬戸うち 悪戯 蛆蟲のやうに

津田青楓氏装幀
 カンパス製表紙優美
 定價未定
 七月初旬發行

■ 薔 薇 叢 書 ■

第一編 デューマ作 福永挽歌譯

椿姫

總タロース製極美本
 菊半裁書入四百頁

定價八十錢
 送料八錢

第二編 メエテルリンク作 若月紫蘭譯

青い鳥

菊半裁箱入
 總布製美本

定價五十錢
 郵税六錢

第三編 モウパッサン作 吉江孤雁譯

水の上

菊半裁箱入
 總布表紙頗美本

定價五十錢
 郵税六錢

第四編 シルレル作 船木葉之助譯

全譯 全ウ井ルヘルム・テル

菊半裁箱入
 總布製美本

定價五十錢
 郵税六錢

■ 書 叢 薇 薔 ■

編五第

チッケンス作 矢口達譯

全譯 クリスマス・カロール

クロース製箱入
定價 五十六錢
郵税 八錢

編六第

スコット作 馬場吉信譯

全譯 湖上の美人

クロース製箱入
定價 六十八錢
郵税 八錢

編七第

マキアゼリー原著 橋田東聲譯

權謀術數學
(マキアゼリズム)

クロース製箱入
定價 五十六錢
郵税 六錢

編八第

ピョルンソン作 矢口達譯

全譯 縮刷 ア ル ネ

クロース製箱入
定價 五十六錢
郵税 六錢

新刊

最新實際新聞學

每夕新聞主 幹兼編輯長 小野瀨不二人譯著

- 如何にして新聞を經營すべきか?
- 如何にして新聞記事を書くべきか?
- 更に如何にせば最も有益に新聞記事を読み得るか?
- 本書を繙けば悉く知る事が出来る?

□ 四六判四百數十頁
□ 總布製箱入美本

定價壹圓參拾錢

郵税 八錢

新刊

修養日訓 大町桂月先生監輯

桂月先生の序に曰く(前略)謹んで世の修養に志ある人々に告ぐ。自給して一時に修養上の知識を積むとする勿れ。日に少くも昨日の條を讀み終りたる所を回顧するも好し。決して翌日以降の條を見らざるべからず。比較して見よ。必ずや諸君は吳下の舊阿蒙にあらずらむ。

□ 四六判三百八十餘頁
□ 總布製箱入美本

定價壹圓貳拾錢

郵税 拾貳錢

□ 現代和歌選集叢書 □

第一篇	第二篇	第三篇	第四篇	第五篇
黑曜集	行人行歌	萬物の世界	灰の音	戀慕流し
前田夕暮 名歌選集	若山牧水 名歌選集	土岐哀果 名歌選集	與謝野寬 名歌選集	吉井勇 名歌選集
錢拾六册各價定 子美の美 とし本 紙装箱 と紙入 				

モウパッサン作
廣津和郎譯

五版全
女の一生

四六版五百餘頁
總布箱入極美本

定價金壹圓參拾錢

發賣禁止

モウパッサン作
廣津和郎譯

改訂全
縮刷譯
女の一生

全一冊六號四百頁
袖珍形羽二重製美本

定價五十錢

送料六錢

美しくしき處女の眼に憧れ深く映じたる人生の姿は戀と情慾との涙と微笑とを知りし時如何に憐れましく悲しく意味深く戀り行きしか。モオパッサンの精緻なる描寫と犀利なる觀察とは彼女の生涯に捧げたる此の一篇を得て始めて生く。

アナトール・フランス作
谷崎 精二 譯

袖珍形羽二重製美本
全一冊六號二百數十餘頁

全譯 優女タ・イス

定價四十錢

送費六錢

タイスは古代エジプトに住んだ妖艶無比な一舞妓の名である。墮落と罪惡との裡に燦然として輝いてゐた芳麗な一肉體の名である。一代の聖僧の非凡なる信仰と難行とに打ち勝つた否み難い人生の偉なる力であつた。——タイスの生涯は我々に何を物語つてゐるか。

イブセン 原作
長田 幹彦 譯

袖珍形羽二重製美本
全一冊六號百八十餘頁

全譯 人形の家

定價三十錢

送費六錢

本書はイブセンが傑作中の傑作、總ゆる婦人問題の出發點と稱せらる。現代にあつて女主人公ノラの名を知らざるは恥辱なり。名を知つて内容を知らざる者は更らに愧死すべし。新劇壇の明星松井須磨子はノラに扮して初めて今日あるを得たり。

278
310

終

